

中国青島市における公園緑地の形成と変容

江本 硯

システム情報工学研究科

筑波大学

2014年7月

目次

第1章 序論.....	1
第1節 研究の背景と目的.....	2
第2節 先行研究.....	3
第1項 公園の現状.....	3
第2項 公園の歴史.....	4
第3項 公園緑地の改造に関する研究.....	6
第4項 青島に関する研究.....	7
第3節 本研究の視点と研究方法.....	8
第2章 森林の形成と変容.....	11
第1節 ドイツ統治期の森林造成.....	11
第1項 森林の位置づけ.....	11
第2項 樹種の輸入と森林の生態学、美学.....	13
第3項 森林の造成と影響.....	16
第2節 日本統治期の森林造成と改良.....	17
第1項 森林の位置づけ.....	17
第2項 日独戦役の影響と森林の補植.....	18
第3項 植林事業.....	18
第4項 林相改造.....	20
第3節 中華民国統治期の森林造成と改良.....	21
第1項 森林の位置づけ.....	21
第2項 植林事業.....	22
第3項 林相改造.....	25
第4節 第二次日本統治期の森林破壊.....	25
第1項 グリーンベルトの計画.....	25
第2項 森林の破壊.....	25
第5節 小括.....	26
第3章 公園の形成と変容.....	29
第1節 ドイツ統治期の公園建設.....	29
第1項 最初の都市計画.....	30
第2項 公園の計画と建設.....	33
第3項 公園の特徴.....	35

第2節 日本統治期の公園建設と改善.....	39
第1項 都市の拡大.....	39
第2項 公園の建設と改善.....	43
第3項 公園の特徴.....	48
第3節 中華民国統治期の公園建設と改善.....	49
第1項 都市の充実.....	49
第2項 公園の建設と改善.....	53
第3項 公園の特徴.....	62
第4節 第二次日本統治期の公園破壊.....	64
第1項 都市と公園の計画.....	64
第2項 公園の破壊.....	67
第5節 公園の具体例.....	68
第1項 中山公園の形成と変容.....	68
第2項 貯水山公園の形成と変容.....	79
第3項 中国海洋大学構内景観の形成と変容.....	89
第6節 小括.....	98
第4章 並木道の形成と変容.....	105
第1節 最初の並木道.....	106
第2節 ドイツ統治期の並木道の造成.....	107
第1項 樹木の保護条例.....	107
第2項 道路の建設.....	107
第3項 並木の植栽.....	107
第3節 日本統治期の並木道の整備と造成.....	110
第1項 道路の建設.....	110
第2項 並木の補植と植栽.....	112
第4節 中華民国統治期の並木道の整備と造成.....	114
第1項 道路の計画と建設.....	114
第2項 並木の補植と植栽.....	114
第3項 実現されなかった並木道.....	118
第5節 第二次日本統治期の並木道の破壊.....	119
第6節 小括.....	119
第5章 結論.....	123
第1節 要素ごとの変容の特質.....	123
第2節 時代ごとの公園緑地の変容の特質.....	128
第3節 青島市における公園緑地の一般性と独自性.....	133

参考文献一覽.....	135
初出一覽.....	140
謝辭.....	141

第1章 序論

公園緑地は都市の衛生と社会の問題を解決する、近代に誕生した重要な都市空間要素であり、近代都市計画理論の核心の一つだと考えられる。欧米で自然誕生したのとは異なり、中国の公園緑地は植民地の歴史とナショナリズムなど複雑な背景の中に移植されたものであった。本研究は中国の典型的な近代都市である青島市における公園緑地を対象とし、その形成と変容を論じるものである。

「公園緑地」については、中国で公園緑地とは「都市の中で大衆に開放され、遊ぶと憩う機能をメインとして、これらの機能を支える施設とサービス施設が設けられている一方、健全な生態、美化景観、防災減災などの総合機能を兼ねている土地のことである」¹⁾。日本では、公園と緑地が別々に定義されている。公園とは、「主として自然的環境の中で、休息、観賞、散歩、運動などのレクリエーション及び大震火災等の災害時の避難等の用に供することを目的とする公共空地である」。緑地とは、「主として自然的環境を有し、環境の保全、公害の緩和、災害の防止、景観の向上、及び緑道の用に供することを目的とする公共空地である」²⁾。即ち、中国語の「公園緑地」は日本語の公園だけを指し、日本語の「公園緑地」は公園と緑地の並列であり、都市における公園、森林および緑道がすべて含まれていることが分かる。

本研究が用いる「公園緑地」は後者であり、広域スケールで青島市の公園緑地の研究を行う。本章では、1. 本論文の背景と目的をのべ、2. 公園緑地及び青島市に関する先行研究を整理することにより本論文の視点と意義を明確にする。第2章、第3章と第4章では青島市の森林（面）、公園（点）と並木道（線）を取り上げ、その形成過程を考察し、特徴を分析する。結論では、まず近代の様々な都市計画理論を背景とし、都市計画・建設におけるこの3つの要素の位置づけとそれぞれの特徴及び変化をまとめる。それを踏まえ、時代ごとに公園緑地の全体的な特質をまとめ、政治、文化、地元の状況の視点から、その要因を分析する。最後に、同時期他の都市で形成された公園緑地と比較し、青島市における公園緑地の一般性と独自性を検討しようとする。

第1節 研究の背景と目的

中国の経済は現在急速に発展しているが、その代償として、大気汚染、環境破壊の問題は日々厳しくなってきた。国際社会に注目されており、中国国内でも環境への批判が高まっている。一方、ある程度経済が発展したことに伴い、人々の価値観は変化し、生活空間の質を求めようともなっている。2012 年に行われた中国共産党第 18 回全国代表大会でエコシティの建設は中華民族の復興戦略におかれ、「花園城市」、「緑色都市」など環境のよく、緑の多い都市は多くの都市の建設の目標となっている。

これは西洋の国々が近代化の時に面していた問題とほぼ同様である。これらの問題を解決するために、19 世紀の後半には多くの理想都市案が探求されていた。この頃、中国の多くの都市は植民地となり、植民支配者によってもたらされた近代都市計画理論に大きく影響された。このうち、青島、大連、長春、ハルピンなど全領域が占領された都市は近代都市理論に従い、白紙から作られた都市であり、都市計画理論の中国での実践品である。つまり、これらの都市は中国において、合理的なゾーニング、良い環境を創出することを模索していた。これらの都市の建設の経緯、その成功と失敗を明らかにすれば、今後の都市の建設の参考になると考えられる。

青島市は建設されてから戦前までの間にドイツ (1898-1914) → 日本 (1914-1922) → 中華民国 (1922-1938) → 日本 (1938-1945) のように支配者が何度も変わり、極めて複雑な歴史を持つ近代都市である。珍しいのは支配者の変更にもかかわらず、ドイツ統治期から中国に住んでいた外国人に「中国のブライトン」³⁾、アメリカの新聞に「東アジアで最も完璧な商埠」と評価され⁴⁾、戦前まで「中国で一番美しい都市」⁵⁾ の栄誉を持っていたことである。これらの栄誉を青島にもたらした原因はいくつか考えられるが、数多くの公園緑地はその要因の一つだったと言える。1935 年の『青島農林』は「もし、青島に昔のように山々に樹木がまっくなくなったら、立派な建物があっても、完璧な道路があっても、良い港としかいえず、風景まで言えない」⁶⁾ と、青島市の緑地を非常に高く評価している。これらの評価から戦前青島市の都市景観の建設が大きな成功を遂げたことが分かる。

一方、青島市は現在でも中国の「園林都市」であるが、現実には、経済の発展とともに、美しい都市景観が破壊されつつある。中華人民共和国が成立後、居住の需要が増えるとともに昔は建ぺい率が低かった地域の空地あるいは庭園の部分に増築が行われたり、舗装されたりし、建築の密度が高くなり、庭園の面積が小さくなってきた。庭園だけではなく、駅前の緑地、第三公園など旧都心部にあった公園もなくなり、旧市街地のみどりは減少しつつある。そして、工業の排水によって海水が汚染され、2013 年まで青島には連続 6 年水草の災害が発生し、海水浴場の質は

著しく落ちている。このような厳しい現実の前に、青島市の公園緑地が形成された経緯を明らかにし、昔の美しい景色と対照させて、青島が緑地景観や町並みを失いつつあることを警戒するよう呼びかけたい。

本研究は以下の3つの問題を解明することを目的とする。①青島市の公園緑地はいかに都市計画・建設に位置付けられたのかという問題、②支配者の変更により公園緑地の建設がいかに継承されたのかという問題、③政治や文化による時代ごとに青島市の公園緑地は如何なる空間、植物景観の特徴を持っていたのかという問題の3つである。

第2節 先行研究

近年には環境、みどりに対する関心が高まってきたことに伴い、数多くの都市における公園緑地の現状、植物景観に関する研究が徐々に増えてきた。ただし、公園緑地の研究といっても、公園と緑地に分けられ、分析が行われているケースはほとんどであり、両方を合わせた全体的な研究はあまり見られない。しかも、公園の歴史、形成された経緯よりも、公園の現状に主眼が置かれている。一方、中国の公園緑地は「国の中の国」と呼ばれていた租界や租借地から輸入されたから、公園緑地の歴史に関する研究はおもに近代に租界や租借地になっていた都市が対象とされている。

ここで、公園緑地の現状、歴史、改造と青島に関する研究を分け、先行研究をまとめることとする。

第1項 公園の現状

彭慧⁷⁾は長沙市における主要な公園の歴史・文化を発掘し、市内の公園に関する計画、植物景観の特徴を論じている。そして、事例を挙げ、公園に存在している問題を指摘している。劉潔⁸⁾は武漢市を対象とし、公園緑地の重要性を強調し、公園緑地の分布や管理について調査を行い、公園の種類と数が少なく、分布の不合理、公園システムの不完全性などの問題を指摘している。これらの問題に対し、郊外の緑地を都市の緑地体系に取り入れ、法律・法規の制定を進めるなどの対策を提出している。

李素英⁹⁾は公園緑地の中の重要な種類の一つである带状公園緑地を選定し、他の種類の緑地と比べ、带状緑地の定義を明確にし、その歴史と機能をまとめている。そして、統計資料を分析した結果を踏まえ、中国の都市に带状緑地が不足しているという問題を指摘し、都市附属緑地を開放したり、改造したりする対策を提出している。祝昊冉¹⁰⁾はチケットの値段、周辺の施設、公園の規模、サービスなどの要

素を指標として、北京市の公園緑地のレベルを分けている。そして、人口密度、住民の年齢、経済などと北京市の公園緑地の分布とのかかわりを分析している。

また、公園の植物景觀に関しては、王静¹¹⁾は南京市における公園緑地を13カ所選び、植物の觀賞要素、色彩と季節などの特徴に基づき、植物の配置パターンを分析している。また、生態学原理を基に、景觀評価システムを造り、基幹樹種が単一の公園緑地の特徴を論じている。李淑鳳¹²⁾は北京市における様々な公園緑地の中から事例を取り上げ、植物の配置に存在している問題を指摘し、地形、色彩、植物の生長の速さ、においなどの要素を考え、植物の配置原則を提案している。

第2項 公園の歴史

1) 個別の公園の形成史

中国で数が一番多い公園の名称は「中山公園」だと考えられる。1925年から、中国政治家・革命家であり、中国国民党総理であった孫文（別名中山）を記念するために、中華民国南京政府（1927-1949）が中国各地で既存の公園を改名したり、新しく構築したりし、多くの中山公園を一気に建設した。1930年代以降、中国各地（台湾を含む）の中山公園は合計267カ所になった¹³⁾。数が多く、特別な政治・文化の意味を持っているため、近年中山公園に関する研究が徐々に行われている。陳蘊茜¹³⁾は中華民国時期に国民党が民衆の記憶を構築するために、中山公園を国家の権利と民族主義を象徴する空間として建設したという視点から、中山公園の記念空間の誕生、空間の象徴性と孫文に対する崇拜と記憶の形成を論じている。「中山公園の研究」¹⁴⁾と「台湾地区における中山公園の研究」¹⁵⁾はそれぞれ中国大陆と台湾地区における中山公園の分布、機能、空間要素などを論じたものである。

中山公園ほど有名ではないが、中国の多くの都市に魯迅公園や老舍公園が建設されている。「魯迅公園の歴史的過程と評価」¹⁶⁾は租界公園から魯迅公園への変遷の歴史を要約し、上海における近代公園の形成とそのありさま及び機能と解放後の新しい特徴を検討している。

その他、建設者が中国人であるか外国人であるかを問わず、各地において画期的な意義を持っている公園が研究されている。「天津ビクトリア公園歴史過程と造園のスタイルの研究」¹⁷⁾は天津の英租界で造られたビクトリア公園と英国の重要なイベントとの関係を究明し、公園内におけるインフラの整備、公園のスタイル、植物の種類を分析している。「武昌における首義公園の歴史的変遷の研究」¹⁸⁾は武昌において初めて中国人によって造られた中国の革命記念公園であった「首義公園」の設立、開拓、衰退及びその原因を明らかにし、公園のスタイル、記念・教育、娯楽、収容の機能を検討している。

2) 個別都市における公園の形成史

今まで、中国全国における公園緑地を対象とし、近代になってからの総合的な発展経緯に関する研究はまだ行われていない。先行研究は主に都市を単位として、公園緑地の歴史を明らかにしている。しかも、多くの対象地は近代に租界や租借地となっていた都市である。このうち、上海、天津と北京は最も多く研究されている。上海と天津には近代にイギリス、フランス、アメリカなど数多くの国の租界が設けられ、支配者たちはそれぞれ自国の租界に公園を造っていた。そのため、公園は全体として統一されることはなく、様々なスタイルが混在していた。

趙慧¹⁹⁾ は上海を対象地にし、戦後の 1949 年から「改革開放」の 1978 年までの混乱期とされている時期を選び、この 30 年をさらに回復期（1949-1952）、建設期（1953-1959）、調節期（1960-1965）と破壊期（1966-1978）の 4 つの段階にわけ、各時期の政治、社会制度と結び付け、公園の建設活動をまとめている。そのうえで、各時期の公園の機能や特徴などを分析している。同じ対象地を選んだ瀋穎²⁰⁾ の修士論文は上海の近現代公園の歴史を簡単にレビューし、近現代公園の分布、歴史的特徴などを分析し、現在、公園の内部空間、使用状況と周辺環境に起きている問題を指摘し、解決方案を検討している。

楊樂ら²¹⁾ は天津と上海に設けられていた各国の租界の公園を紹介し、公園の要素、スタイルと植物景観を分析している。陳雅君²²⁾ は文化生態の理念に従い、「公園文化生態系統」の概念を提出した。そして、この視点から、天津の公園に複雑な歴史背景により蓄積されている庶民の息、中国の南と北、中国と外国が融合している文化を強調し、将来、天津の公園景観が生態化し、機能が複合化、多様化などをして、発展する成り行きを予測している。

近代に租界や租借地として発展してきた都市と異なり、長い間、中国の首都であった北京の公園の創立は皇帝専用庭園の開放から始まった。王煒²³⁾ は北京で順次に開放された公園を総括し、公園の教育・政治上の機能、そして市民たちの生活に与えた影響を論じている。何江麗²⁴⁾ の「民国前期北京の公共空間と公共衛生」の第一章には民国時期における北京の公園の誕生、都市の衛生と民衆の強化の施設としての機能を論じている。

これらの有名な近代都市に加え、他の都市における公園緑地の研究も徐々にみられるようになってきた。胡冬香²⁵⁾ は中国で最も早く開港された広州において、租界公園、封建私有庭園と衙署ガーデン及び近代市民の為に造られた公園の例を挙げ、都市公園の制度の変化を分析している。柯鑫鑫²⁶⁾ は杭州を対象とし、1912 年-1993 年の 82 年間を 5 つの時期に分け、各時期の公園と社会、政治、経済、文化との関わりを論じている。

第3項 公園緑地の改造に関する研究

旧来の都市にあった公園は建設後時間が経って、施設が老朽化したり、市民の需要に合わなくなったりし、公園緑地の改造が数多くの都市が面している課題になっている。如何なる手法で、如何なる改造を行ったらよいのかに関して、研究者たちは文化、植物景観、歴史的建築物、経済など様々な視点から議論している。

北京園林学会²⁷⁾からは公園の改造について、現存の植物、建築、道路などの制限がある一方、これらの要素を上手く利用し、改造の資金を節約できるという考え方が出されている。そして、付近の住民は長期間にわたり公園を利用することにより記憶が形成されるので、改造する際、設計者たちはなるべく人々の記憶を構成している建築や植物を保存すべきことが指摘されている。張文杰ら²⁸⁾は公園の道路に透水性の材料を使う、建築の数を減少する、地元の植物をメインとし自然のような公園景観を造るべきであると主張している。

顧芳らは²⁹⁾上海の元フランス租界にある復興公園の改造を事例として、事前調査やヒアリングの結果を踏まえ、なるべく公園の構造、植物景観の特色である芝生、バラ園と大きい樹木を保存し、公園の租界時代のスタイルがよく継承されることになった。一方、老朽化した腰掛やトイレ、道路等のインフラが更新され、低木も公園に植えられた。改造後の公園についてアンケート調査が行われた。その結果、改造後は前よりよくなったと思っている利用者の割合は 95%であり、植民時代に造られた公園改造の成功例だと評価されている。方慰元³⁰⁾は森林公園と総合公園の両方の機能を有している上海東平国家森林公园の改造に対し、園内の交通を改善し、林相を豊かにし、水系をうまく利用するなどの対策を提案している。

中小都市に関しては、陶敏³¹⁾が江蘇省泰州市を取り上げ、公園の更新を分析している。大都市とことなり、中小都市の公園の多くは中華民国時期以降に建設されており、立地がよく、古跡が多く、折衷の手法で設計されたものが多い。これらの公園を改造する際、①公園の歴史文化を尊重する、②公園の開放度を増やし、アクセスを確保する、③現存の施設を十分に利用し、費用を減らす、④持続的发展を考え、合理的な商業施設を招致する、という4つの原理が提出されている。

成功例に対し、経済を発展させるために、公園が商業化され、中国の伝統的な文化が失われたケースもある。馬錦義ら³²⁾は南京市で有名な総合公園である白鷺洲公園を事例とし、商業施設を建設するために、景観の象徴であった施設が取り壊され、公園内の室外で遊ぶ空間も小さくなったという問題を指摘している。しかも、改造後、公園のチケットが80元(¥1,000)に上がり、普通の市民たちにここで散歩し、憩う場所を提供する機能を失った。曹慧芳³³⁾は西安市の公園改造に事前調査不足、政治意図や経済利益を考えすぎる、全体的、持続的な更新ではなく応急的な改造が多く行われている、という問題を指摘している。

第4項 青島に関する研究

1) 建築と都市計画

青島にはドイツ、日本、スペイン、デンマークなど様々なスタイルの建築があり、「世界建築の万国博覧会」と呼ばれている。そのため、青島の建築は中国の研究者と外国の研究者たちに注目され、多く研究されている。徐飛鵬³⁴⁾らは1990年代に青島の近代建築の分布を調査し、建築の設計者や当時の用途と現状を詳しく記述している。同様に、ドイツの研究者である華納 (Torsten Warner) がドイツ統治期に建てられた建物の現用途、住所、設計者、建築年と建物に関連したことを述べている³⁵⁾。陳霖³⁶⁾はドイツ統治期に建てられた住宅や教会などの建物に現れた屋根の形、塔、飾りを分析することによって、建物の原型をまとめている。そして、これらの要素がいかに活用され、中国、日本の要素や現代建築と融合し、青島の現在の建物に継承されたかを検討している。王福雲³⁷⁾は青島に多く造られた独立住宅（一戸建て）を対象として、住宅のスタイルやドイツ統治期以後、住宅のスタイルがいかに継承されたのかを論じている。

他方、ドイツ統治期から、各段階の都市建設は近代都市計画理論と緊密に関連していたため、青島の都市計画史は多くの研究者に注目されている。ドイツの研究者である華納³⁸⁾はドイツ時期の都市計画と建設を中心にし、青島の都市計画の開始、拡張、インフラの建設、衛生保健、緑化及び住宅の建設に関し、詳しく論じている。李東泉³⁹⁾は各時期に編成された都市計画はいかに港、鉄道を建設し、工業、商業の発展を導き、都市全体の発展を図り、青島のレイアウトが完成させたのかを分析している。李百浩⁴⁰⁾も支配者の相違により都市計画の段階をわけ、各時期の都市計画の特徴を論じている。

2) 公園緑地

青島は中国の近代を代表する「園林都市」である。しかし、青島の近代建築について中国、日本、ドイツの研究者によって多くの研究が行われていることに対し、公園緑地に関する研究はすくない。公園に関しては、鄭愛芬⁴¹⁾が青島の公園からサンプルを抽出し、各公園の植物の種類の多様性、分布、樹種の使用頻度の現状について分析している。孫向麗らの「青島市における公園緑化の樹種の調査」⁴²⁾は青島市の公園に植えられている植物の種類、数量と配置を明らかにした。並木道に関しては、高蓉蓉⁴³⁾が青島の並木道の写真を撮影し、アンケート調査を行って、樹冠が大きい、整然としている、あるいは花を觀賞できる樹種が好まれるという結論を出している。劉晶⁴⁴⁾は青島市の海岸景観を取り上げ、高層ビルの建設による視線の妨害やスカイラインの破壊、過度の観光開発による砂浜の退化と海水の汚染などの問題を指摘している。海岸の改造が行われ、歩道で海岸景観のつながりが強められたが、上記の問題はあまり解決されていないという。

森林に関しては、「青島市の植林樹種の選択」⁴⁵⁾が青島市の森林の樹種の現状を調べ、目的に応じ、土の性質、経済性などのうち如何なる原則によって樹種が選定されているのかを述べている。また、由超⁴⁶⁾が青島市の森林を対象とし、森林に多く用いられている樹種を調査し、高木、低木、地被植物、竹にわけ、統計的な分析を行っている。そして、常緑樹と落葉樹の比率（3：7）、高木と低木の比率（2：1）、針葉樹と広葉樹の比率（1：4）等に対し、提案を行っている。また、並木、公園緑化、遊園、街路緑地、山々、住居など様々な地域を分け、それぞれに適合する樹種を論じ、天然森林を模し、青島市の森林を恢復と再現することを提案している。

上記の研究はそれぞれ青島における公園緑地の1種類だけを対象とし、その現状を分析しているが、歴史についてほとんど述べていない。

第3節 本研究の視点と研究方法

本研究は個別の要素だけではなく、青島市の森林、公園と並木道を一体的に捉え、公園緑地の各時期の「都市理想像」とのかかわり、都市計画・建設上の位置づけを分析する。こうすることで、公園緑地の都市空間としての歴史的価値に関する理解が一層深まる。そして、3つの要素の間のつながりも分析し、森林（樹林）はいかに公園に転換し、持続的な発展を実現し、並木道はいかに都市公園をつなぎ、青島市における公園緑地のシステムを構成しているかという視点から、研究を行う。さらに、経済、生態、特に植民文化の面から、要素ごとの空間的特徴、変容の特質、そして公園緑地の景観の主役となっていた樹木の輸入された経緯とその配置パターンを明らかにすることを目的とする。

研究方法としては、まず、ドイツ統治期（1898-1914）、日本統治期（1914-1922）、中華民国統治期（1922-1938）と第二次日本統治期（1938-1945）の4つの時期に分け、分析することにする。各時期において、政府の業務報告、都市計画に関する書類などの一次史料を用い、青島市の都市計画の目標や建設のプロセスを理解する。そして、土木・農林誌などの史料を利用し、各時期の公園緑地の建設、分布などの情報を把握する。ただし、これらの史料は時期によっては本研究にとって限界がある。例えば、公園の設計図が含まれておらず、並木の樹種が詳しく記録されていないなどの問題がある。そのため、文献史料に加え、古写真と古葉書を参考にし、これらの問題を補足し、都市公園の歴史的空間や並木の樹種などを復元的に考察する。さらに、現地調査を行い、公園緑地の現状、景観を構成している主要な樹種などの情報を把握していく。

注：

- 1) 景長順 (2008)：公園工作手冊、中国建筑工業出版社、12
- 2) 日本公園緑地協会 (2010)：公園緑地マニュアル、日本公園緑地協会、108-109
- 3) 華納著・青島市档案馆訳 (2011)：近代青島の城市計画と建設、東南大学出版社、188
- 4) アメリカ評論報・甘永龍訳 (1908)：徳人経営青島の成績、東方雜誌、第5年、第7期
- 5) 青島市工務局 (1935)：青島市施行都市計画方案初稿、41
- 6) 青島工務局 (1935)：青島農林、1
- 7) 彭慧 (2006)：長沙市主要城市公園初步研究、北京林業大学、修士論文
- 8) 劉潔 (2010)：武漢市城市公園体系研究、華中農業大学、修士論文
- 9) 李素英 (2006)：城市带状公園緑地研究、北京林業大学、博士論文
- 10) 祝昊冉・馮健 (2008)：北京城市公園の等級結構及其布局研究、城市規劃 Vol. 15、No. 4、76-83
- 11) 王静 (2009)：南京城市公園緑地骨幹樹種調查研究、南京農業大学、修士論文
- 12) 李淑鳳 (1995)：北京公園緑地中の植物配置、中国園林 Vol. 11、No. 3、32-37
- 13) 陳蘊茜 (2006)：空間重組与孫中山崇拜、史林 2006、No. 1、1-18
- 14) 王冬青 (2009)：中山公園研究、中国園林 2009、Vol. 25、No. 8、89-93
- 15) 陈毅嘉 (2008)：台湾地区中山公園研究、天津大学修士論文
- 16) 張志恩 (1996)：魯迅公園歴史沿革与歴史評価、中国園林 Vol. 12、No. 4、22-24
- 17) 孫媛・青木信夫・張天潔 (2012)：天津維多利亞公園歴史進程与造園風格探析、學術論文專刊 No. 7、35-39
- 18) 趙紀軍 (2011)：武昌首義公園歴史變遷研究、中国園林 2011、No. 9、70-73
- 19) 趙慧 (2010)：上海現代城市公園變遷研究 (1949-1978)、上海交通大学修士論文
- 20) 瀋穎 (2008)：上海近現代公園の保存狀況及保護政策探討檢討、同濟大学修士論文
- 21) 楊樂・朱建寧・熊融 (2003)：浅析中国近代租界花園—以天津、滬兩地為例、北京林業大學學報 Vol. 2、No. 1、17-21
- 22) 陳雅君 (2009)：天津城市公園景觀文化特色演變研究、東北農業大学、修士論文
- 23) 王煒 (2007)：近代北京公園開放与公共空間的拓展、北京社会科学 2008、No. 2、52-57
- 24) 何江麗 (2011)：民国前期北京的公共空間と公共衛生、近現代史と文物研究 2011、No. 11、127-133
- 25) 胡冬香 (2009)：広州近代城市公園制度化演繹、広州園林 Vol. 32、5-8
- 26) 柯鑫鑫 (2011)：杭州近現代公園發展研究 (1912-1993)、浙江大学修士論文
- 27) 北京園林学会 (2007)：城区旧公園改造中現有植物景觀保護利用和規劃設計 (講座)、北京園林 Vol. 23、No. 3、51
- 28) 張文杰・屈培源・張文博 (2010)：城市公園の「近自然」模式改造—以新鄉市人民公園為例、西北林学院學報 Vol. 25、No. 1、181-184

- 29) 顧芳・曹宏偉・朱銘鸞 (2009)：用人文和諧的理念重放老公園的光彩、中国園林 2009、No. 9、65-68
- 30) 方慰元 (2007)：上海東平国家森林公园改造規劃探討、中国園林 2007、No. 9、68-72
- 31) 陶敏 (2004)：中小型城市傳統公園的适時更新—以江蘇省泰州市泰山公園改造設計為例、城鎮形象与建築設計 2004、No. 4、34-37
- 32) 馬錦義・陳菲・馬亮 (2012)：旅行開發背景下城市傳統文化公園景觀改造探析—以南京白鷺洲公園為例、中南林業大学学报 Vol. 6、No. 4、6-10
- 33) 曹慧芳 (2011)：西安城市公園改造存在問題与对策探討、陝西農業科学 2011、No. 3、246-249
- 34) 徐飛鵬・村松伸 (1992)：中国近代建築総覧—青島篇、中国建筑工業出版社
- 35) Torsten Warner(1994):German Architecture in China、 Ernst&Sohn.
- 36) 陳露・武雲霞 (2001)：青島近代建築原型的變異、建築歷史 Vol. 19、No. 5、92-95
- 37) 王福雲・韓勇・譚大珂 (2009)：青島近代獨立式住宅建築研究、工業建築 Vol. 39、No. 6、42-46
- 38) 華納著・青島市檔案館譯 (2011)：近代青島的城市計畫と建設、東南大学出版社
- 39) 李東泉 (2007)：近代青島城市計畫与城市發展關係的歷史研究及啓示、中国歷史地理論从 Vol. 22、No. 2、125-136
- 40) 李百浩・李彩 (2005)：青島近代城市規劃歷史研究 (1891-1949)、城市規劃學刊 2005、No. 6、81-86
- 41) 鄭愛芬 (2010)：青島市公園綠地木質植物的多樣性、南京林業大学修士論文
- 42) 孫向麗・張啓翔 (2006)：青島市における公園の樹種の調査、当代生態農業、45-48
- 43) 高蓉蓉・吳美霞・周春玲 (2007)：青島市行道樹的美觀度評估、山東林業科学技術 Vol. 168、No. 1、16-19
- 44) 劉晶・董文 (2009)：青島濱海景觀改造研究与分析、山東農業大学学报 Vol. 40、No. 3、411-415
- 45) 董運齋・于家柱・于永偉 (2010)：青島市の森林樹種の選択、国土緑化、43-44
- 46) 由超 (2006)：青島市城市森林建設研究、山東大学、修士論文

第2章 森林の形成と変容

青島市の森林は人工林であり、近代に造成された重要な施設の一つである。丘陵都市である青島市においては森林が土砂流失を抑制し、水源を涵養し、風景を向上させるとともに、青島市の持続的発展を確保してきた。

とりわけ、近代中国が無立木国であったのに対し、進んだ造林事業は青島に独特な性格を与えた。森林が景観に与えた影響に関しては、1935年の『青島農林』には「もし、青島に昔のように山々に樹木がまっただけでなかったら、立派な建物があっても、完璧な道路があっても、良い港としかいえず、風景まで言えない」¹⁾と高く評価している。現在でも青島市では森林の建設が重視され、2014年の国際園芸博覧会を目標とし、2012年に青島市が「国家森林都市」を目指し、みどりの青島を建設する戦略が提出された²⁾。

本章では、近代になってから、青島市の荒山、海岸に対し、ドイツ、日本、中華民国政府が森林の建設と都市発展の目標にいかに関わりつけ、如何なる方針に基づき、都市の無立木地の状況を徹底的に変えたのかを明らかにする。そして、建築や町並みなど一般の植民都市の歴史に関する研究では注目されていない樹種・植物景観に浸透していた植民文化を究明する。

第1節 ドイツ統治期の森林造成

第1項 森林の位置づけ

19世紀の半ば頃には科学の進歩によって、森林が土壌の維持、気候と河川の調節について重要な役目を果たしていることが認識され、大半のヨーロッパ諸国は森林の保護や増加を重視するようになった³⁾。ドイツは中でも植林、林業教育の先進国であった。それに対し、当時の中国には森林が乏しく、世界の無立木国の一つに属していた⁴⁾。青島も例外ではなかった。

1898年に「膠澳租借条約」が締結され、青島を含む、面積約540km²、人口6-

8 万人の膠州はドイツの租借地になった⁵⁾。図 2-1 の中のみどり色の線が租借地の範囲を示している。この地図によれば、青島の東に山地が多いことが知られる。だが、ドイツが青島を占領したときには、森林が濫伐されていたので市内の山々に樹木は全くなかった。山に土砂の流失を抑える森林がないため、市内には雨水の浸食によって形成された谷が非常に多かったという。これらの谷は整地と道路の構築に難題をもたらした⁶⁾。そして、雨水が速く流失し、高い場所では土層が薄く、青島地区への飲料水の提供も困難だった。土砂の流失を抑制し、都市飲料水供給の状況を改善するためにも、植林計画が策定された。当時の現実の困難を解決するだけでなく、足りていない木材を補うことができるという経済上の考慮もあった⁷⁾。

このように、飲料水の供給、衛生、経済、郊外の景観など様々な問題に関連して

図 2-1 租借地範囲 (『青島地図通鑑』⁸⁾ より)

いる森林は最初から政府に重視され、系統的に解決するために林業に関する行政部署が設置され、計画もいち早く編成されることになった。

第2項 樹種の輸入と森林の生態学、美学

植林事業が順調に進むように、1898年に総督に地位の高い林業官が配備された¹⁴⁾。のちに森林を管理するために、1900年に林業官を補助する猟師2名、海軍兵士8名、園芸師1名が派遣され¹⁵⁾、林務局（林業部門）が設置された¹⁶⁾。この部門は以下の業務を行うことと規定された。1) 都市造林計画の策定と実施。青島市区における山々、ドイツの租借地となった労山の一部の山林の造営及び水源涵養林、海岸防砂林の営造。2) 植林地の徴用、造られた森林の保護と宣伝。3) 植物の品種の輸入、馴化、栽培、繁殖と普及。4) 新たに開拓された道路の並木と遊園内の樹木の栽培と維持管理。5) 各法規の制定と施行¹⁷⁾。また、日本統治期の史料によれば、これらの機能以外に、公園と官庁庭園の設計も行っていたと記録され¹⁸⁾、当時の林務局が公園の設計や管理の業務も兼ねていたと考えられる。

ドイツ統治期に定められた植林の目標は10年以降、青島市におけるすべての山地をみどりで覆わせることであった¹⁹⁾。広い範囲で植林することを実現するために、林務局がまず解決しなければならないのは樹種の問題であった。前述のように青島には森林がまったくなかったため、樹種も少なかった。森林と並木道、公園用の樹木を得るために、1898年から林務局はドイツ、アメリカ、日本など他の国から樹種を輸入し始めた。輸入された樹種を試植するために、気候のよいイルチス山（後

表 2-1 ドイツ統治初期に輸入された主要樹種（『備忘録』により作成）

樹種	学名	輸入年	輸入国	備考
ニセアカシア	Rubinia pseudocacia	1898	ドイツ	生長が速く、針葉樹と混生しやすい。北西からの強風に弱い。良好の坑木である。
ハンノキ	Alnus glutinosa	1898	ドイツ	—
プラタナス	Platanus	1898	ドイツ	林業に使いえず、形がよく、並木に適応する。
アカカジワ	Quercus rubra	—1903	アメリカ	生長が速く、繁殖しやすいが、種の購入が難しい。
モクレン	Magnolia	—1900	アメリカ	庭園樹
ユリノキ	Liriodendron tulipifera	—1900	アメリカ	庭園樹
アカマツ	Pinus densiflora	1898	日本	冬の強風に弱く、風が当たらない南と南東部に植えるべき。
サクラ	Prunus*	—1900	日本	花を觀賞でき、公園に多く植えられた。（種類不明）
コナラ	Quercus cuspidata	—1900	日本	—
クロマツ	Pinus thunbergii	—1903	日本	岩土に生きられる。強風に強い
ハンノキ	Alnus japonica, incana	—1903	日本	湿地に適応する。
	Alnus incana	—1903	日本	乾燥地で生長の状況がよく、針葉樹と混植する重要な樹種。種の購入が難しい。
ヤチダモ	Fraxinus pubinervis	—1903	日本	木と葉の形が綺麗で、一級木材。
クリ	Quercus vesca	—1903	日本と地元	防風用、大面積の植栽がよくない。
モンゴリナラ	Quercus mongolica	—1903	満洲	生長が遅いが、種の購入が困難である。
* 種類不明				

旭山・現太平山)に植物試験場が造られた²⁰⁾。そこで樹木の試験が行われ、試験に成功した樹木が青島の緑化に用いられた。

表 2-1 はドイツ統治初期に世界各国及び中国各地から持ち込まれた主要な樹種、特に広葉樹を示したものである。これらの広葉樹にはハンノキ、クリ、コナラなど生長が速く、適応性の高い樹種が多く、主に一次林相を造成するために選ばれたと考えられる。注意すべきはこのうち最も多く輸入された樹種はドイツのものではなく、日本の樹種であった。それはおそらく、日本の植物には種類が多く、気候が青島と似ている、距離も近いなどの生態と経済の双方の理由があったと考えられる。その他、アメリカ、カナダから輸入された樹種もあった。その結果、ドイツ統治期の終了まで、天然林を含め、青島の林相を構成している樹木の種類は 176 に及んだが、中国固有の樹種は「十分の二三位にすぎない」植物景観が造成されることになった²¹⁾。こうして、人工的に造られた青島市の森林は最初から異国の文化、特にドイツと日本に大きく影響された。

輸入された樹種で注目されるのは日本のクロマツとドイツのニセアカシアである。この 2 つの樹種はもっともはやく青島に持ち込まれ、のちに青島の山々、海岸、道路、公園に非常に多く使われ、現在も青島の主要緑化樹種である。このため、ここでクロマツとニセアカシア類の輸入過程をのべておく。

周知の通り、針葉樹は荒山を緑化する「遷移初期種の陽樹」と呼ばれ、荒山の環境を改善する最初の段階で多く植えられる樹種である。そのため、林務局が針葉樹の試験を何年にもわたって続けていた。1898 年-1899 年の『膠澳発展備忘録』(以下『備忘録』と略す)には「1898 年春、青島近郊の山々に約 10ha の広葉樹(クリ、エンジュ、日本と山東省のゴム)と針葉樹(入手できる各種類の中国の松と日本のスギ、ヒノキとマツ)が植えられた」という記録がある²²⁾。1902 年と 1903 年の『備忘録』には「今まで植民地区で試植成功した針葉樹は一つの樹種だけに限られ、この針葉樹は日本人に **Kuro matsu** と呼ばれている」²³⁾、「土が比較的よい場所ではクロマツの生長状況は相当良い。しかも、石質の岩土にも生きられる」、「強風と寒さにも強い」と記録されている²⁴⁾。クロマツと同時に日本のアカマツやドイツのある種のマツの試験も行われたが、風に弱く、種が腐ったなどにより失敗だったという。このように、強風にも強く、岩土にも生きられるクロマツは初期に唯一試験で成功した針葉樹として、青島の山々や海岸に植えられることになった。1903 年に 80.19 ha、1,002,400 本の 2 齢クロマツが植えられ、2ha、16kg の種が撒かれ²⁵⁾、植林総面積の半分を超えていた。他の年に植えられたクロマツは明確に記録されていないが、試験で成功した針葉樹の種類は限られるので、植えられた針葉樹にはクロマツがかなり高い割合を占めていたと推定される(図 2-2)。

ただし、『備忘録』に書かれているように「もし、この地域に統一した針葉樹で植林することができれば、植林の任務は簡単になる」。実際、大面積で植えられた針葉樹によって、火災や虫害、特に松毛虫の災害は多く発生した。そのため、広葉樹と針葉樹を混ぜて森林を造ることが解決案として出された。そして、試験によって、ニセアカシアは針葉樹と混植された時に、もっとも生長しやすい広葉樹であることが分かった。ニセアカシアは 1898 年に青島に持ち込まれたという²⁶⁾。1901 年の『備忘録』には「柔らかい土で埋められた斜面にニセアカシアを植えるのが一番相応しい。ニセアカシアが発達し、水平に伸びている根は土を固定させる一方、刺の多い枝は人々が森林に入ることを防止し、土地を保護することになる。」²⁷⁾という機能もあった。このような特徴を持つニセアカシアは、山の斜面に最も多く用いられていた。そして、速く伸びられる広葉樹であるニセアカシアは並木と庭園樹種としても好まれていた。1909 年までに合計 137.2 ha のニセアカシアが植えられた。

植林の生態だけではなく、森林の美学も良く考えられた。海水浴場と別荘区域と

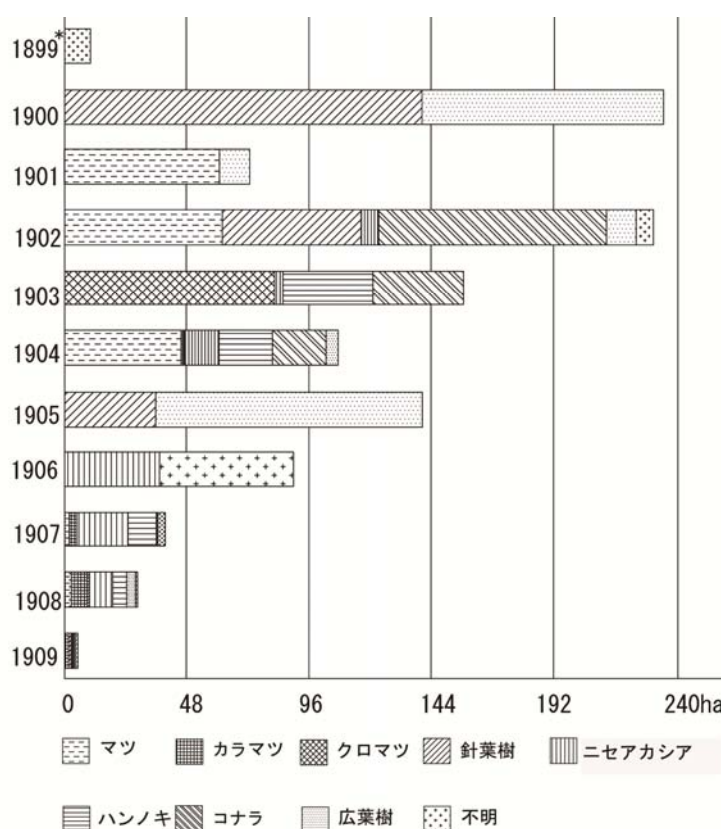


図 2-2 ドイツ統治期の植林面積（『備忘録』により作成）

*年は 10 月から翌年の 10 月まで

して開発されたビクトリア湾（後忠ノ海、現匯泉湾）の緑化については以下のように記されている。「会前角（図 2-3）で植林することによって、アオグステ・ビクトリア海岸沿いの緑化を確保した。ここにはすべて 2 種類のコナラの木を植え、ただし、葉の色が混ざるように、コナラの木の外側にクリノキとアオギリを植えた。そして、コナラの木が塩を含む風に影響されないために、海に面している南側には幅が 200m のクロマツ防風帯を設置した」²⁸⁾。この記録から、海岸の塩を含む強風の環境と樹木の季節による色の変化がよく考えられたことが知られる。

第 3 項 森林の造成と影響

1898 年にはドイツ総督府は初めて青島の開発計画図を公表した。都市は青島と大鮑島付近の 20 ha の範囲に限られた。この地域以外に集住している中国人に関わる事務を処理するために、李村と労山にそれぞれ一つの行政区が設置された（図 2-1）²⁹⁾。官有林の建設は市区と李村の近くの郊外から建設され始めた。1899 年からドイツ総督府はイルチス山（後旭山、現太平山）、ビスマルク山（後神尾山、現青島山）、モルトケ山（後若鶴山、現貯水山）の 400ha の土地を買収し、地形や高さなどの測量などの準備を行った³⁰⁾。1903 年に台東鎮、四方の買収を終了し、1907 年に至り、李村地方における森林地帯を買収し（図 2-3）、さらに租借地内における旧清国の官有地及び所有不明の山地などを官有地とし、合計 2423.7 ha の植林地を得た³¹⁾。

1902 年までに、青島市の周りにある山々の植林活動が大体完成し、これらの森林はおもに土砂の流失を抑制し、のち山頂公園³²⁾に建設あれ、市街の美化の役割を果たしていた。山々に加え、ドイツ統治期には青島市の水源地の保護を重視し、人口の増加とともに、相次いで海泊河、李村河、旱河で水源地を開拓し、そこで水源涵養林を造った。水源涵養林が造られたのと同時に、少し遠い郊外にあるカイインリッヒ山（後浮山）に木材を生産する経済林の創出も策定された（図 2-3）。

水源涵養林と経済林に加え、景観を向上させるために風致林も造られた。1904 年にはドイツの東アジア援助委員会と宝くじの出資により、労山の柳樹台に療養所が建てられた³³⁾。この療養所は最初負傷した兵士が回復するために建てられたが、のちに春と秋に登山客に泊まる場所を提供し、夏に外国人の娯楽の場所となっていた。療養所が竣工した翌年にはこの周辺で植林する計画が提供された。また、青島で観光客特に外国人の観光客に好まれる海水浴場を造ることもドイツ総督府が最初から考えていたことである。ビクトリア海湾は初めての浴場として建設されることになった。そこにホテル、更衣室などの施設以外で非常に重要なのは、1900 年に始められ、みどりの背景として海湾を取り囲んでいた森林であった。

このように、防砂林、水源涵養林、経済林、風致林が徐々に造り出され、森林は市内から遠い観光地域まで徐々に広がっていった。1898 年から 1914 年までの 17

年間には合計 1259.6 ha 植林された³⁴⁾。最初に定められた「10 年後に青島市の山地を緑に覆わせる」目標も実現され、青島は中国の南東沿海都市の中で衛生環境が一番よい都市とされ、外国人に好まれる休養地となった。無論、この目標を実現するために、ドイツ政府は巨大な経費を支出していた。17 年間で森林の維持費、植林費、土地買上費などの費用として合計約 230 万麻克（約 190 万円）がかかったという³⁴⁾。

官有林だけではなく、苗圃から非常に安い値段あるいは無料で農民に苗木を放出し、植林用地の地租を免除するなどの政策を行い、民有林の発展、とくに労山と李村など市区から離れている場所の民有林の発展を奨励していた。このうち、最も正式な組織となったのは 1908 年に劉錫五によって創立された労山森林会社であった。この会社は労山附近にあった官有牧場をかり、民有林も若干買収し、合計 3001.5 ha の規模に及んだ。これらの森林はドイツ統治期に建設された都市にみどりの背景を提供していただけではなく、清潔な水源、新鮮な空気を守り、十年、数十年後に徐々に拡張された青島の風景も確保した。

ドイツが青島で森林の造成に残した実績と森林が水を治める効果は中国政府の注意を引いていた。1904 年に山東省の巡撫と官員が青島の森林を何度か視察し、青島と同様に済南の山地に森林を造成しようとする意図はあきらかであった³⁵⁾。1907 年に奉天の巡撫であった唐紹儀がドイツの林務官を雇い、奉天の造林事業を指導していたという³⁶⁾。このように、ドイツ統治期の植林が青島を超え、他の都市の植林にも影響を与えたことが分かる。

第 2 節 日本統治期の森林造成と改良

第 1 項 森林の位置づけ

1914 年 9 月攻城戦が開始し、12 月に日本が青島を占領した。日本政府はドイツによって造られた森林を「大規模の築港と支那内地に貫通している山東鉄道と共に、独逸の残した施設中最も著しきものの一つである」と非常に高く評価した。そして占領後の植林については、『青島軍政史』に以下のように述べられている。

占領地内労山附近ニ於ケル一部ノ山地ヲ除キテハ直ニ經濟的林業を行フヲ困難トスル所ナリ然レトモ地方一般ノ産業上衛生上ヨリ觀察スレハ現ニ山々シキ危険ノ状態ニシテ将来ノ福利増進上植林ノ計画ハ一日モ緩フスヘカラザル³⁷⁾。

この記述から、日本統治期に森林は都市の衛生状況を改善、将来の福利を増進することが考えられ、ドイツ統治期とあまり変わらなかったことが分かる。

そして、ドイツによって建設された青島の風景を踏まえ、日本政府は「青島カ名勝地トシテの使命ハ倍々其ノ大ヲ加フルにニ至リ今ヤ亦市街天然ノ大公園トシテ

海泊河、李村河、白沙河等青島水道ノ水源タル諸川上流地ニ水源涵養林ヲ設定シ、青島市内外ノ諸公園ト連絡シ所謂青島大公園ヲ大成セムトスル計畫アリ」とあるように青島市全体を大公園にする計画を作成した³⁸⁾。このように日本統治期に公園都市の目標を実現するために森林は郊外にある天然公園として位置付けられた。

こういう背景で、1915年に青島守備軍司令部の下に青島守備林務署が置かれた。森林を継承事業として、林務署は元ドイツ林務局の管掌した官有森林を管理経営し、占領地内の林業監督及び植林奨励に關しての業務を掌理していた³⁹⁾。

第2項 日独戦役の影響と森林の補植

戦争際、防御の必要からドイツは青島森林（市域内の森林の総称）、海泊河の森林及び他の森林を大面積伐採した。そして、無数の砲弾が森林の各所を破壊し、林地は惨憺たる状況を呈していたという⁴⁰⁾。これに加え、戦争によって、森林保護の制度は全く一時廃絶したことにより、住民は全山の樹木を盗伐していた。具体的な破壊状況は以下のようである。青島における各砲台とその付近約 80 ha、海泊河森林約 70 ha、黄草庵森林約 20 ha、丈兒山森林約 5 ha、臥狼齒山森林約 25 ha、合計約 201 ha の森林が破壊された。それだけではなく、青島森林において林業設備の温室や風車・建物及び防砂堰堤の破壊、貴重樹種・温室植物の紛失、病虫害の発生などにより、森林の損害が非常に大きかった⁴⁰⁾。そのため、日本が青島を占領した後の造林事業は主として被害を受けた更地の再造及び新植林地の撫育事業になった⁴¹⁾。1916年と1917年に青島森林、海泊河森林と樹木園において、107.7 haの森林が造成された。山地植栽にはおもにクロマツが用いられ、樹木園にはサクラ、ヒノキ、スギなどの樹木が植えられた。多くの樹種は日本内地から持ち込まれたという⁴¹⁾。

第3項 植林事業

破壊された森林を補植した以外にも、林務所は新しい森林も造成した。表 2-2 は 1916 年までに造成された官有森林の各樹種の面積を示している。同表によると、マツは 687 ha、ニセアカシアは 476.8 ha、マツとニセアカシアの混林は 75.2 ha あり、合計 1,239 ha が植えられ、総植林面積の 82.3%を占め、各森林において最も多く用いられた樹種であったことが分かる。これは前述したように、マツとニセアカシア類は荒山の生態環境への適応性と樹木の生長の速さ、火災、虫害の予防などで優れていたのがその理由である。

日本統治期に青島は日本人に開放され、青島に住んでいた日本人は 1913年の 316 人から 1915年の 11,009 人に急激に増加し⁴²⁾、1920年にさらに 28,395 人に及んだ⁴³⁾。人口の増加とともに、年々必要な飲料水量が増加していた。しかも、戦争など

の事情によって、水源上流地の森林は荒廃していたため、日本統治期には水源涵養林を中心とし、官有林と民有林両方を含む巨大な植林計画が編成された。このうち、海泊河に 206.8 ha が 1922 年までに完成し、李村河と張村河に 1334 ha が 1921 年から 1923 年の 3 年間で完成し、白沙河に 7870.6 ha が 1920 年から 10 カ年をかけて完成する計画が策定された⁴⁴⁾。植林計画が順調に進むことを担保するために、計 98 万円の経費予算が組まれた。しかし、残念ながら、1922 年に青島が中華民国政府に回復された時にはこれらの計画が 2、3 年分しか実施されなかった。

日本の支配が終わるまでに植林された面積に関しては日本統治期に出版された『青島要覧』とのち中華民国統治期に出版された『膠澳志』の両方に記録されている。『青島要覧』には、1921 年春までに、官有林は 741.7 ha、白沙河上流労山水源官有林は 476 ha、防砂林は 28.5 ha 完成したと記されている。官有林に加え、民有林地も 31100.7 ha のうち 11226.6 ha だけに樹木が植えられ、残りの土地はまったく無立木だったという⁴⁵⁾。一方、『膠澳志』（食貨志 林業）によれば、日本統治期に新たに造られた官有林は 493.2 ha、補植されたものは 139.1 ha であった。水源涵養林は 754.1 ha が新に植林され、197.3 ha が補植された。防砂林は 66.5 ha 造られた。造林に加え、ドイツ統治期に堡塁付近に植えられた 272.3ha の森林も官有林に編入された。このように、補植された森林を除けば、合計 1313.8ha の森林が造られた。ここに記録されている水源涵養林の面積も防砂林の面積も『青島要覧』の統計よりかなり大きくなっている。それはおそらく民有林も含まれていたと考えられる。

表 2-2 日本統治期の森林及び樹種の面積（『青島軍政史』より）

官有林名	無立木地(町)			立木地(町)								果樹園、苗圃、見本園	計
	草生地	畑地	其他	松	胡藤	赤楊	櫟	松胡藤	櫟胡藤	赤楊胡藤	櫟其他		
青島森林	5	15		370	293.5	70					20	110	883.5
海泊河森林	15		20	15	70	55	10			15			200
黄草庵森林		2	1.5		40.0						4.05		47.55
水清溝森林				1									0.8
関家山森林					12.8								12.8
大児山森林	2.3				7.5		5.3						15.1
老鴉嶺森林		10.7		3	2.3		6.5						22.9
臥狼齒森林	21			2	46			64.9					133.9
滄口樓山森林									16.7				16.7
螢子樓山森林		1		6					2.5				9.7
峪楊子森林	110			88									198
九水庵森林	49.5	9.3		150	4.7		7						220.5
柳樹台森林	2			5				10.3					17.6
北九水庵森林	2.1			13									15.5
労山石門森林	12.4			3									14.9
労山蔚兒鋪森林	502.4		120	30									652.4
計	721.7	38	142	687	476.8	125	28.8	75.2	19.2	15	24.05	110	2461.9
	901.2			1560.7									

注：胡藤はニセアカシア、赤楊はハンノキ、櫟はクヌギである。

表 2-3 は青島が接収された時の各場所における官有森林の面積である。ドイツ統治期に造られた森林に加え、1922 年までに青島に合計 1,860ha の造林が完成した。

図 2-3 は日本統治期の各官有森林の位置を示している。

植林用の樹種については、『膠澳志』によると 1920 年にクロマツとトゲナシニセアカシアを計 90 万本、1921 年にクロマツとトゲナシニセアカシアを計 120 万本、1922 年にはクロマツなどの樹木計 105 万本を植えることが計画された。苗木以外にも、クロマツの種をまく計画も立てられた。このように日本統治期の森林には主にクロマツ、トゲナシニセアカシアと地元のコナラが用いられたことが分かる⁴⁶⁾。

第 4 項 林相改造

ドイツ統治期に林務局は荒山を改造するために、生長が速く、瘠せた土に適応する機能が高いクロマツやニセアカシアを山々に多く植えた。しかも、土地への直射

表 2-3 1922 年青島が接収された時の官有森林の面積（『膠澳志』より）

森林名称	面積(ha)	森林名称	面積(ha)	森林名称	面積(ha)
青島官林	724.4	海泊河官林	128.7	老鴉嶺官林	16.5
黄草庵官林	51.2	柳樹台官林	18.9	臥狼齒山官林	144.2
水清溝官林	0.8	北九水庵官林	16.7	滄口樓山官林	18
閻家山官林	13.7	勞山石門官林	16.1	塋子樓山官林	10.7
丈兒山官林	16.3	勞山蔚児舗官林	701.6	九水庵官林	226.6
大福島官林	15.8	天黒山官林	14.6	峪場子官林	213
太平岬官林	10.2	旧砲台官林	130.9	合計	1860

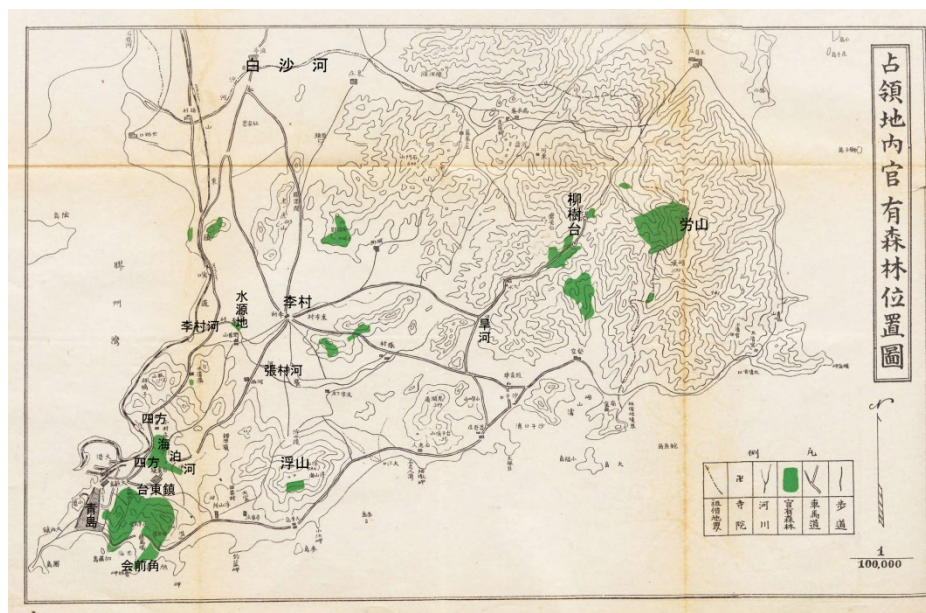


図 2-3 日本統治期に官有森林の分布（『青島軍政史』より）

表 2-4 1916 と 1917 年伐採された樹種と面積（『青島軍政史』（第 5 卷）により作成）

年度	1916年	同	1917年	同	同	同
樹種	胡藤、赤楊	在来種、赤松	胡藤	赤楊	其他、雑木林	在来種、赤松
伐採別	手入除伐	枯損木伐採	疎伐	同	同	枯損木伐採
区域面積	350000	25000	280000	74000	50000	58000
伐採 数量	幹材（棚） 枝（束）	205 10000	425 30263	593 7640	357 10343	33 3144
						210 12651

注：胡藤はニセアカシア、赤楊はハンノキ、赤松はアカマツである。

日光を減少させ、樹冠の鬱閉度を適当に持つために、毎町歩に 1 万数千本という非常に高い密度で苗木を植えた。十数年を経た日本統治期になって、過度の密林が形成され、樹木相互の生長を阻害するほどにいたった⁴⁷⁾。そのため、適当な間隔を保ち、伐採する必要が生じた。1915 年に林務署によって調査が行われ、1916 年より実施に着手した。

表 2-4 は 1916 年と 1917 年に伐採された樹種とその面積をしめしている。伐採された樹木はおもに最初に高密度で植えられたニセアカシア、枯損した在来種のアカマツと雑木林であった。その後、ドイツで林学博士学位をとった本多静六が青島の森林を考察し、第一次林相を造る、第二次の林相改造に関する方案を提出した⁴⁸⁾。第一次林相の造成は土地の湿度によって、極湿地、湿地、適潤地、乾燥地、極乾燥地、海岸に分けられ、それぞれに適する樹種を列挙している。例えば、雨季に沼になる場所、上流河床地、土取蹟などにはハンノキ、ヤナギ類、中国ドロノキ、中国サワクルミ、トネリコを植える。乾燥地にはニセアカシア、中国アカマツ、ネムノキ、ヤマハンノキをうえるなどの意見を述べている。第二次林相改造には地形によって、平地林又は山鉄沿線林と山地のニセアカシア林に分けている。その林相改良は樹齢によって、間伐したりし、松林は将来広葉樹にする意見も述べている。

第 3 節 中華民国統治期の森林造成と改良

第 1 項 森林の位置づけ

1922 年 11 月には青島の支配が中華民国北京政府により回復された。この時期は政府の変更により、中華民国北京政府統治期と中華民国南京政府統治期に分けられる。北京政府統治期には森林の重要性が十分認識されていたが、政治の不安定によって、森林事業に対する計画は編成されず、森林の建設はあまり進まなかった。

1929 年から、青島は中華民国南京政府に接收され、直接に管理されることになった。森林事業に関しては青島農林事務所によって編成された『青島農林』に次のように述べられている。「青島市は美しい風景を有し、世界で有名である。山を背

負い、海に面する地理的な優勢を占めているのは勿論、繁茂した森林があるからこそこの印象と感覚が増している。(中略)。森林のおかげで水源の涵養、気候の調節、風砂の防止、空気の新鮮さを確保している。(中略)。青島市の繁栄は必ず森林の経営と農業の改善を優先にする」。このように森林は生態や風景の改善だけではなく、農業品種の改善によって、直接の利益をもたらす、青島の繁栄と緊密にかかっているとされていた。このような視点から、中華民国南京政府統治期には官有林より、民有林が発展していった。

1935年に青島市工務局は都市全体に対し、「青島市施行都市計画方案初稿」⁴⁹⁾を編成した。計画案には「園林緑地」は都市の肺とたとえられ、このうち海拔が60m以上の山地は森林保留地として指定されるようになった⁵⁰⁾。このような思想に従い、植林事業が続けられた。

第2項 植林事業

青島が接収された時には林務局と農事試験場双方が設置されたが、1923年3月に合併され、農林事務所になった⁵¹⁾。行政機関が早く設置されたが、造林の経費は年々削減されることになった。1923年の予算は8万4千元あったが、そのうち5万8千元は俸給になって、僅かに2万3千元だけが植林事業に使われた。1924年にと1925年の2年は5万6千元の予算のうち植林経費は1万にも至らなかった。そして、1925年以降、治安が悪くなり、森林の盗伐と火災が多くなり、現状だけを維持するのも難しくなったという⁵²⁾。

このような経費や戦争など様々な理由により、1922-1929年の8年間の造林事業は既存森林の補植を中心として行われ、1923年と1924年だけに森林が新たに造られた。表2-5はこの2年間で植えられた森林の位置と面積を示している。風致林、防砂林、水源涵養林を含め、僅かに96.7haの森林だけが造成された。このうち苗

表2-5 1923と1924年に造られた森林の位置と面積（『膠澳志』により作成）

場 所	面積 (ha)	樹種	本数	備考
太 平 山	9.6	クロマツ、ニセアカシア	82434	風致林の補植
会 姓 岬	0.2	クロマツ、ニセアカシア	2600	風致林の補植
青島森林	1.63	クロマツ、キササゲ	15603	防砂造林
南海沿岸	5.6	クロマツ	97000	上と同じ、苗木は小さい
柳木園北部	0.08	コノテガシワ	500	防砂造林
柳 樹 台	2.96	スギ、ヒノキ	20910	水源林
王子潤南山	0.27	アカマツ	1920	水源林
九 水 庵	5.76	アカシア	24500	防砂造林
九 水 庵	37.8	クヌギ	128900穴	種まき、水源林
蔚 児 舗	32.8	クヌギ	61440(穴)	種まき、水源林

木で造られた面積は 26.1 ha だけであり、もっとも多く使われた苗木はクロマツとニセアカシアであった。苗木の他、クヌギの種も水源地におおく撒かれた。

青島が南京政府に接收されたあと、農林事務所はそのまま青島市政府の下に置かれ、総務、農務と林務にわけられ、それぞれ文書の編成、統計、作物の試験、改良などの職務を執行した。南京政府は北京政府統治期には森林事業があまり進まず、苗木を育成する事業も滞ったことを認識し、1929-1931 年の 3 年間に官民所有林の完成や苗木の繁殖に力を注いだ。官有林のうち苗木で造られた森林は 98.1 ha、種まきで造られた森林は 36.1 ha であり、合計約 134.2 ha の森林が造られた。

表 2-6 はこの 3 年間に苗木で造られた森林の種類と場所を示している。まず、森林の種類で注目されるのはこの時期に初めて造られた記念林である。総理記念林は国民党の総理であった孫文を記念するために、1929 年から中国各地に造られた森林であった。青島には中山公園の北東部と張家窪で連続 3 年間、合計 3.9 ha の総理記念林が造られることになった。このように森林は水源涵養、防風防砂などの機能に政治、記念の機能が加えられた。

そして、ドイツ統治期と日本統治期に主に水源涵養林と防風防砂林が植えられたのと異なり、中華民国統治期に植えられた風致林は 57.3 ha に達し、総植林面積の半分以上を超えていた。とりわけ、ドイツ統治期に造られた砲台の周辺に約 40 ha の風致林が造られた。これに関しては 1935 年の「青島市施行都市計画方案初稿」⁴⁵⁾に「青島はもともと農漁村であり、文化は浅く、歴史も短いので、価値のある古蹟と

表 2-6 1929-1931 年に造られた森林（『青島農林』により作成）

場所	面積 (ha)			主要樹種	本数	備考
	1929年	1930年	1931年			
総理記念林	1.7	0.5	1.6	1, 2, 4, 6	13963	記念林
太平山	4.9	1.3	1.5	1	44016	風致林
海泊河	8.3	5	—	1, 2, 5, 7	48639	水源林
臥狼齒	3.1	8.4	—	1, 4	64350	水源林
1号砲台	9.6	0.6	—	1	53961	風致林
2号砲台	—	10.1	—	1, 5	57001	風致林
3号砲台	—	8.6	—	1	48368	風致林
4号砲台	—	8.6	—	1, 5	48551	風致林
万年山	—	0.5	—	1	2573	風致林
觀象山	—	0.9	—	1	5292	風致林
蔚児舗	—	6.7	—	1, 6	35700	水源林
老鴉嶺	—	1.2	—	1	7000	水源林
会姓岬	—	—	1.2	1	6670	風致林
太平鎮	—	—	4.3	1, 5, 6	23897	保安林
王子洞	—	—	9.5	1, 8	58379	風致林
注: 1号: 匯泉角砲台 2号: 青島砲台 3号: 小泥洼砲台 4号: ビスマルク砲台						
樹種: 1: クロマツ 2: ニセアカシア 3: クヌギ 4: コノテガシワ 5: ハシノキ 6: アカマツ 7: ドロノキ 8: ヒノキ						

名勝はそもそも少なかった。都市を装飾するため、広い範囲で古蹟を探すべきだ。本計画の範囲内、砲台、湛山射撃場、浮山前の古寺院と古樹、燕児島の名勝などの歴史的価値を持っているものを利用し、景色を装飾するまたは公園として開拓する。」と書かれている⁵³⁾。こういう事情で、青島の歴史、文化的景観を豊かなものとするために、砲台を中心とし、風致林が造られた。現在、青島山における砲台はアジアで唯一の第一次世界大戦の戦跡として保存されている。1939年に官有林面積は2474.6 haに達し、1922年に青島が中華民国政府に接收された時の1,860 haよりも、614.6 haの官有林が増加した。官有林と比べ、民有林の面積はより著しく増えた。1939年の統計によると、民有林は23,345 haに達し、日本統治期の倍になった。図2-4は1939年の青島官有林と民有林の分布図である。この図によれば、青島の山々、川の上流地が森林に覆われるようになった。1898年にドイツの租借地になっていなかった労山の東側の部分も民有林によって緑化されていたことが知られる。この部分の植林事業は中華民国統治期に行われたと判断される。

樹種に関しては、最もおおく植えられたのはクロマツであった。総理記念林を含め、クロマツ林は約53ha、総植林面積の39%を占めていた。他にニセアカシア、クヌギ、ハンノキ、ヒノキも植えられ、ドイツ・日本統治期とほとんど変わっていなかった。

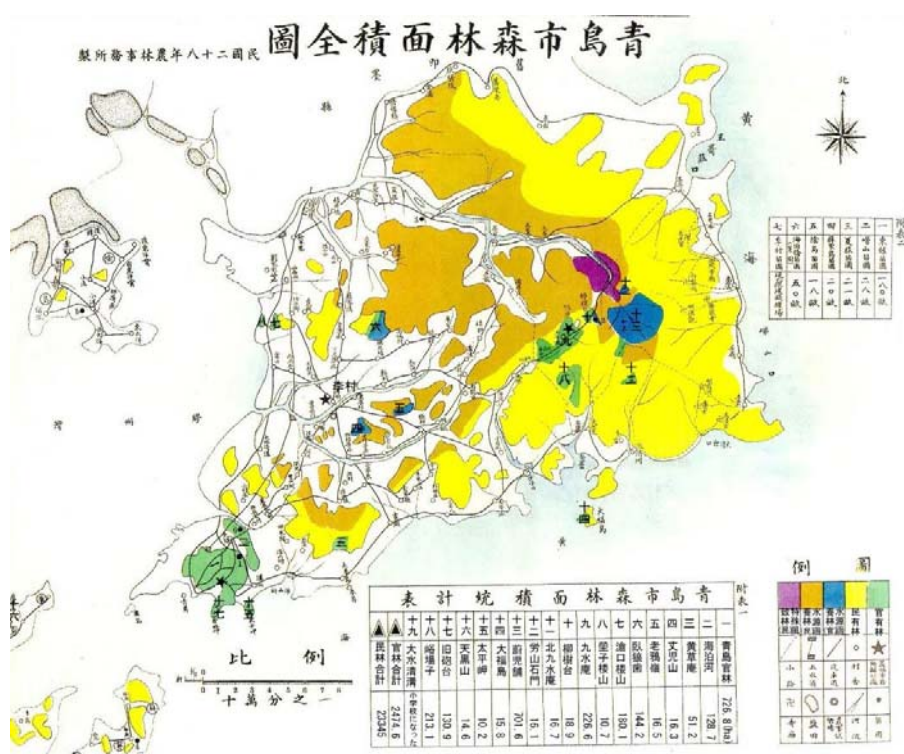


図2-4 1939年青島市の森林分布（『青島地図通鑑』より）

第3項 林相改造

日本統治期と同様に、中華民国時期にも樹木がよく生長するように林相の改造は重要な仕事だとされていた。1930年から青島市内における森林の林相を整え始めた。改造はおもに張家窪、太平山、青島山と湛山で行われた。1930年と1931年には220.1 haの森林に主にクロマツ林、ニセアカシア林、クロマツとクヌギの混生林、ニセアカシアとクヌギの混生林が整えられた。そして、ドイツ統治期に植えられ、樹齢30年になった過密のクロマツ林に対し、伐採計画も立てられた。計画によって、1932年の春から、青島山、太平山において約80 haに及ぶマツ林の伐採が実施された⁵⁴⁾。

第4節 第二次日本統治期の森林破壊

第1項 グリーンベルトの計画

第3章で詳しく説明しているように、1941年に興亜院青島都市計画事務所が「青島特別市地方計画（地方計画と略す）、青島特別市母市計画（母市計画と略す）要綱」を編成した。その中に含まれている「青島特別市母市計画図」（図3-14、p.65）には都市の外側に緑地帯が計画され、その中に森林が含まれている。森林は初めて都市空間の一部として位置づけられた。

そして、100万人の人口、更に工業が集積すると予想され、当時の水源地に加え、石橋河、大沽河と五龍河で新しい水源地を開拓する計画も定められた。ここでは森林計画は見られなかったが、各時期に新しい水源が開拓された時に必ず水源涵養林が植えられたことから、水源地の開拓計画が策定されるたとともに、水源涵養林も造られる予定だったと推測される。しかし残念ながら、戦争によって、この計画案はほとんど実施されなかった。

第2項 森林の破壊

1938年4月1日、2日と27日-30日に労山蔚兒鋪官林に大火が起こり、約473.6haの森林が焼失されたという⁵⁵⁾。火災に加え、この時期にいろいろな戦闘があり、青島の森林は著しく破壊された。具体的な面積は記録されていないが、1941年に農林事務所の業務報告には次のように書かれている：「事変以来、元来の森林には破壊されていない場所がなく、山々に樹木がなくなり、非常に惜しい」⁵⁶⁾。この記録により、森林の破壊状況の一端が知られる。同業務報告には、苗圃から民有林用の苗木が配られる計画や「早めに大青島市の緑化を推進する」という計画があったが、具体的な実施の記録は見られなかった。

表 2-7 戦時森林苗圃の損失（「青島特別市建設局農林事務所民国三十五年（1946）2 月分工作報告」より）

損失事項		東鎮苗圃 (本)	李村苗圃	労山苗圃	夏荘苗圃	薛家島苗圃	陰島苗圃
損失区域		市区	李村区	労山区	夏荘区	薛家島	陰島
参考 資料	戦前	1866000	6566000	209000	19600	140190	164000
	戦時	860本が 残存	房社と苗木 が全部損失 した	同左	同左	同左	同左
	現在	種を撒い た	飛行場に占 用された	恢復され ていない	借りている民 地が取り戻さ れ、恢復でき ない	借りている民 地が取り戻さ れ、恢復でき ない	恢復され ていない

1945 年に日本が敗戦を迎え、その戦争によって青島の苗圃まで非常に大きく破壊された。表 2-7 は 1946 年に青島農林事務所によって作られた戦時の損失に関する報告である⁵⁷⁾。同表によれば、東鎮苗圃に残存した 860 本の苗木を除くと、合計 8,963,930 本の苗木が損失した。戦争開始時点に存在した森林の破壊に加え、その後の森林の補植も相当大きな影響を与えた。

第 5 節 小括

ドイツ統治期からずっと、森林は都市建設の中に非常に重要な事業として引き続き建設された。しかも、都市建設の目標を実現するために、巨大な植林計画が編成された。ドイツ統治期と中華民国統治期には植林計画と都市計画は併立するものだったが、日本統治期に「公園都市」の目標が提出されたことにともない、森林は都市と一体化され、都市と切り離せない施設となっていた。第 2 次日本統治期に計画されたグリーンベルトは実現されなかったが、森林は都市空間の一部として位置づけられることになった。

実際の建設からみると、森林は主に水源を涵養し、風景を美化し、土砂流失を抑制し、経済を発展させるなどの生態と経済の役割を与えられ、政治や記念と殆ど関連させられなかった。そのため、第二次日本時期の破壊を除いたら、支配者の変更にもかかわらず、森林は継続事業として引き続き建設された。そのおかげで、青島の生態、衛生、風景は改善され、「中国で一番美しい都市」となった。

樹種に関してはドイツのニセアカシア類と日本のクロマツが最も多く植えられた。それは青島の厳しい生態環境や樹木の生長速度などに原因であった。環境以外にも、森林美も考えられ、樹木が季節による色の変化も配慮された。植林用の樹種はおもにドイツによって輸入されたが、意外にも日本の樹種が最も多かった。それは気候、地理と経済などの原因があったと考えられる。現在でも、クロマツとニセアカシア類は青島市の森林の主要樹種として使われ、青島の森林の特徴、とくに

クロマツで形成されている海岸林を作り出している。

注：

- 1) 青島工務局（1935）：青島農林、1
- 2) 青島市林業局（2013）：青島市森林都市建設総体規劃。
<http://ly.qingdao.gov.cn/54/179/2802.html>
- 3) ミシエル・ドヴェーズ著・猪俣禮二訳（1973）：森林の歴史、東京：白水社、97
- 4) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、233
- 5) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、3
- 6) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、13
- 7) 同上
- 8) 青島市档案馆（2002）：青島地図通鑑、山東省地図出版社
- 9) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、3
- 10) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、23
- 11) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、478
- 12) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、21
- 13) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、259
- 14) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、13
- 15) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、108
- 16) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、174
- 17) 青島市史志事務局（1997）：青島市志（園林緑化志）、北京新華出版社、104
- 18) 青島軍政史：自大正3年11月至大正6年9月、第5巻、98
- 19) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、56
- 20) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、108
- 21) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、236
- 22) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、56
- 23) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、258
- 24) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、256-258
- 25) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、260-261
- 26) 華納著・青島市档案馆訳（2011）：近代青島の城市計画と建設、東南大学出版社、188
- 27) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、157
- 28) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、209
- 29) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、42
- 30) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、80

- 31) 青島軍政史：自大正3年11月至大正6年9月、第5巻、96
- 32) 1984年に青島市政府が「山を閉鎖し、植樹・造園するお知らせ」と「山頂公園十ヶ所を建設するお知らせ」を出し、青島の山々で公園を作る活動が始まった。十ヶ所は觀海山、觀象山、信号山、青島山、太平山、貯水山、嘉定山、北嶺山、樓山、烟敦山である。
- 33) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、203
- 34) 青島軍政史：自大正3年11月至大正6年9月、第5巻、第4章附表
- 35) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、313
- 36) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、542
- 37) 青島軍政史：自大正3年11月至大正6年9月、第5巻、112
- 38) 青島守備軍民政部（1920）：土木誌、56
- 39) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、234
- 40) 青島軍政史：自大正3年11月至大正6年9月、第5巻、110
- 41) 青島軍政史：自大正3年11月至大正6年9月、第5巻、142
- 42) 青島守備軍大正四年度第一統計年報、第三人口
- 43) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、青島守備軍統計附表。
- 44) 趙琪修・袁榮（1928）：膠澳志（食貨志 林業）、成文出版社、28-29
- 45) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、234
- 46) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、159、257。ここでコナラは属名であり、中にはコナラとカシワが含まれている。
- 47) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、237
- 48) 本多静六（1919）：青島森林の将来。現在、東京大学農学部森林風致計画学研究室に所蔵されている。
- 49) 青島市工務局（1935）：青島市都市計画施行方案初稿
- 50) 青島市工務局（1935）：青島市都市計画施行方案初稿、37
- 51) 青島市農林技術所（1932）：青島農林、1
- 52) 趙琪修・袁榮（1928）：膠澳志（食貨志 林業）、成文出版社、23
- 53) 青島市工務局（1935）：青島市都市計画施行方案初稿、11
- 54) 青島市農林技術所（1932）：青島農林、33
- 55) 山東省省情資料庫ホームページ：
<http://sd.infobase.gov.cn/bin/mse.exe?seachword=1&K=b2&A=1&rec=6&run=13> 最終閲覧日 20140506
- 56) 青島特別市建設局農林事務所民国三十年二月分工作報告、青島市档案馆に所蔵される。
- 57) 青島市農林事務所（1946）：青島特別市建設局農林事務所民国三十五年二月分工作報告、青島市档案馆に所蔵される。

第3章 公園の形成と変容

公園は憩う、遊ぶ、運動するなどの場所を提供する、公園緑地の中では市民たちの日常生活と一番近い関係を持つ緑地施設である。青島は自然に恵まれ、山と海の両方を持ち、山頂公園、海岸公園が多く造られ、公園の多様性、特色が創出された一方、自然の地形や景色もうまく利用されることになった。20世紀の初頭に青島市で最初の公園（現中山公園）が誕生してから、2011年までに、青島市には公園・動物園の数は74カ所に増加し、市区における園林緑地の面積は21121.44haに達した¹⁾。多くの公園緑地を持ち、青島市は1999年に「国家園林都市」として選ばれ、2007年には最初の「国家生態園林都市」の試験的な都市として選定されることになった。

都市と一緒に誕生した青島市の公園は、それぞれの時代の需要によって形や施設が変わってきて、都市の歴史・文化においても、都市の計画・建設においても非常に重要な存在であると考えられる。本章では戦前までを、ドイツ、日本、中華民国による4つの統治期に分け、各時期において公園はいかに都市計画と結びつけられ、いかに植民文化を反映したかを明らかにする。そして、各時期に建設された公園の数、分布、機能と景観の特徴を究明する。それに加え、本章の最後にはそれぞれの統治期に建設された代表的な中山公園（ドイツ）、貯水山公園（日本）と中国海洋大学の庭園（中華民国）を具体例として取り上げ、その空間・景観の形成と変容を分析する。

第1節 ドイツ統治期の公園建設

ドイツ統治期には公園の定義は明確ではなく、公園緑地に正式な名称さえ付けられず²⁾、公園と樹林や森林の境が曖昧だった。そのため、ここではのちの日本統治期に改善され、正式に公園と命名された緑地だけを公園として取扱う³⁾。

第1項 最初の都市計画

青島地区にはもともと青島村、大鮑島、会前村などの村落が散在し、人々が主に農業や漁業に従事していた。漁民たちの安全を守るために、1467年に海の近くに天後宮（寺院）が建てられた。1891年には清朝政府が海防のために、青島に衙門（役所）、兵営、砲台、栈橋等の施設を建設し、寺院とともに青島の政治と宗教の中心となっていた。ドイツ統治期に編成された計画図（図3-1）は村落と衙門、天後宮の位置を示している。都市全体の衛生状況、伝染病の防止などのことで、これらの村落は1898年－1908年の間に全部買収され、取り壊されたという⁴⁾。

1898年に青島はドイツに占領され、ドイツ海軍により膠州湾で基地を造る計画が策定され、そして、ドイツ帝国海軍部の特別の要求に応じ、海軍は租借地の管理と都市の建設の責任を負っていた。そのため、多くの海軍の技術者が青島の港、都市、各種の施設の建設に参加した⁵⁾。ドイツの研究者である華納（Torsten Warner）の研究によれば、青島市の都市計画に重要な役割を果たしていたのはベルリン帝国海軍の技術者ではなく、青島で仕事を従事していた専門家たちであったことが分かる。彼らは長い間に中国に住み、中国の文化を熟知していた⁶⁾。

青島市の初めての都市計画に重要な役割を果たした人物は Georg Gromsch であった。彼は当時青島建設管理部門の担当者であり、ダンツィヒ、ヴィルヘルムスハーフェン港とキールで働いた海軍建設の総監督であった。青島に来る前に、彼は王室のキール造船場の監督を勤めていた。彼の経験からみると、港を建設する経験が豊富であり、ドイツが青島の港の建設を重視していたことが知られる。海軍の少佐であった Moritz Demling と東アラビアの戦争に参加し、第一次世界大戦中將軍となった Georg Maercke も初めての青島の計画に影響を与えた。彼らが膠州湾の測量作業に参加し、膠州湾の発展に関する説明書を作成した。彼らの説明書によって、当時の気候、特に季節風が住居地域の立地を選定する時考えられた重要な要素となった。Georg Maercke の説明書からは、岩石丘陵の天然美景を都市の景観に役立たせる⁷⁾ 観点も強調し、都市を建設する時に美観の原則も考えられたことがわかる。

1898年9月に青島市に対する建設計画が初めて公示された（図3-1）。政府が街路、広場、港、公共施設と防御工事の土地だけを保有し、他の土地を民間に払い下げる政策があった⁸⁾。そのため、この計画図には都市の立地、道路網、地域の機能と主要な公共施設の位置が定められることになった。まず、都市は欧州人区と中国人区にわけられた。欧州人と中国人をわけて都市を建設するのはハルピン、大連と天津のイギリス租界にも見られた。

欧州人区は青島湾と総督府山の間に位置し、気候と景観のよい立地を有している。その立地については『備忘録』は以下のように説明している。「ここ（小港付近）

には必要な施設だけを建てる。それはこの場所には冬の北東と北西の寒風を遮る障壁がなく、夏には南と南東からくるすがすがしい海風も欠いているため、欧州人にとってここは快適な居住地ではない。青島湾に面している山坂だけが都市居住と貿易地区の建設に適する。新しい都市開発計画もこの状況に従って作成された」⁹⁾。ここから都市の立地を選定する時には中国の風水より、気候が主要要素として考えられたことが分かる。家屋の建設においては、計画者たちは既存の村落から経験を学んだ。「村落の北側はほぼ高い坂に遮られている。(中略)。家屋の北側には窓も扉もない。住民の経験は新しい都市を建設する時に十分採用すべきだ」と述べられている¹⁰⁾。欧州人区に対し、中国人区は港の近く、風を遮る障壁がない大鮑島村に設置された。面積は限られ、地図によれば、中国人区における街区の面積は欧州人区にある街区の面積より小さく、道路の幅も狭く計画されたことが分かる。

各地域の機能に関しては 1898 年 9 月 22 日に青島で公告が公布され、街路と地域の機能を説明している。海岸沿いには欧州人の商業施設とホテルを建設し、海岸大通りと並行する道路には商店街を建設すると定められた。居住地域に関しては「現在の青島村の附近に立地し、村の西側に商業と官員の居住地域があり、山坂の東側には東部兵営と砲兵兵営の附近には別荘区と浴場地域がある」¹¹⁾。住居地域の立地から計画案はなるべく現状を尊重し、景色と気候の良い場所に住居建物と重要な建物を手配したのが分かる。駅と工業地域は都市の北西に設置され、「駅をなるべく商業地域と青島湾の附近に建てる。鉄道は駅から、地形の低いところを十分利

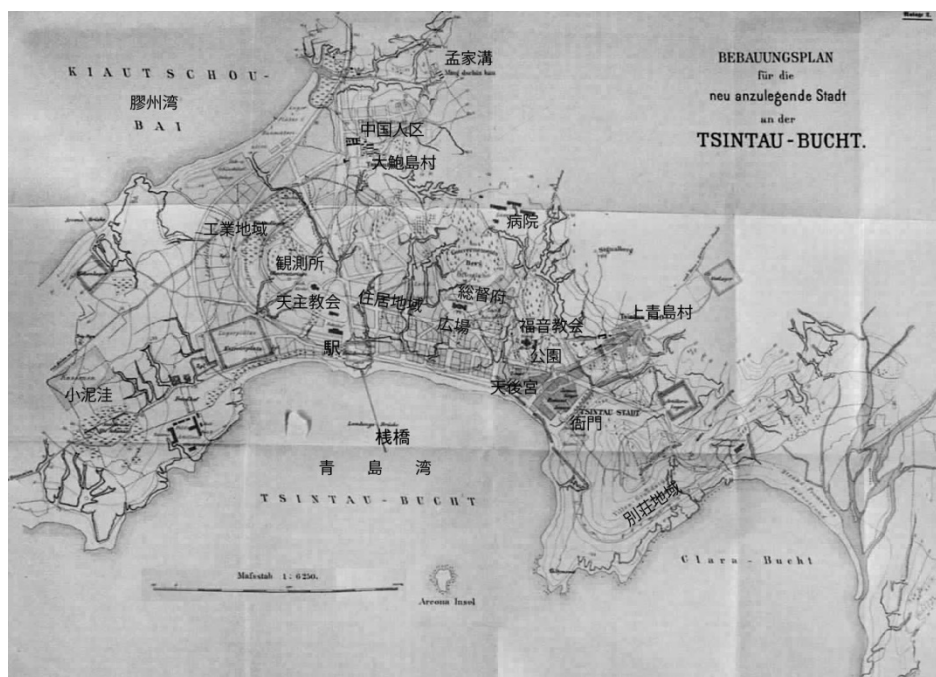


図 3-1 1898 年の建設計画図（『見証青島』より）

用し、工業区と倉庫区に定められた市区を通過し、それから膠州湾の東海岸の北側に行く。そこで港の鉄道支線がこの鉄道とつながりやすくなる」¹¹⁾。この記述から商業地域、工業地域と港が鉄道でつながっており、交通の利便性が確保されたことがよくわかる。

地域の機能だけではなく、重要な公共施設の立地も決められた。図面によれば、総督府は都市の真中に設けられ、その両側に比較的高密に官員などのための高級住宅地域が設けられ、福音教会と天主教会がほぼ左右対称に配置されていた。立地の選定に関しては「大きい建物（教会、総督府、野戦病院、観測台）にとって、高さも位置も非常によい場所を選定した」と『備忘録』に記述されている。

1899年に都市計画の修正案が出され、図面にいくつかの変化が見られる（図3-2）。まず、都市の西側に、元来天主教会と観測所だけが立地していた場所には街区が計画され、都市建設用地に加えられた。これに伴い、そこに設けられた天主教会が中国人区と欧州人区の境界線に移され、観測所は大鮑島の東側にある山にうつされることになった。駅の立地については、鉄道技師であった Heinrich Hildebrand¹²⁾と Luis Weiler が栈橋のすぐ近くに駅を設置し、90°の鉄道を構築する意味がない意見により、修正案には駅が北側に移動され、鉄道は直線になっている¹³⁾。また、この図面に示されていないが、前述したように、中国人の村落は次第に取り壊され、総督がそこに住んでいた人たちと外来労働者の住む場所を造るために、1899年と1900年の間に市区から離れた台東鎮と台西鎮に新しい中国人の住宅区が造られた

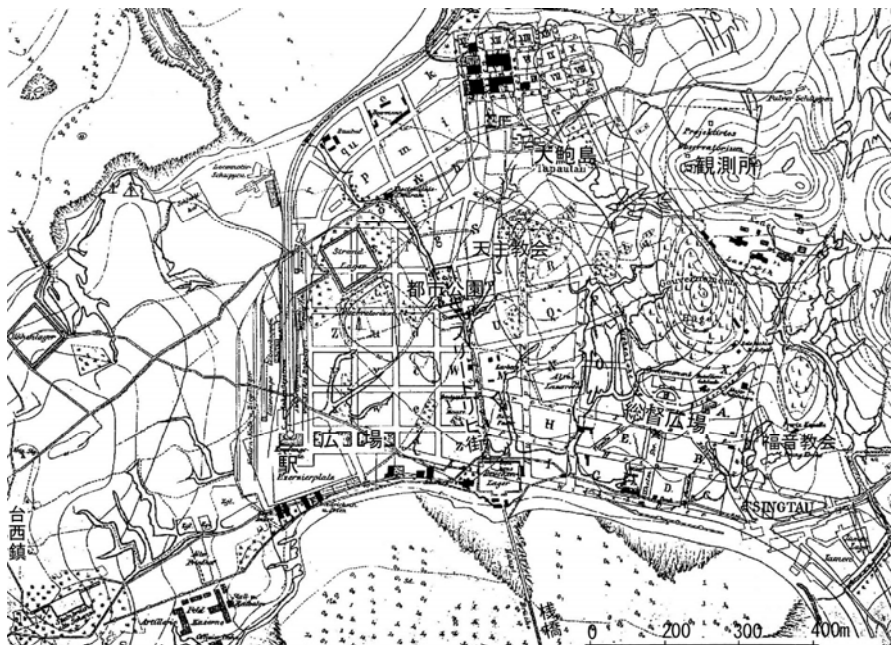


図3-2 1899年の青島建設計画（『近代青島的城市規劃与建設』より）

¹⁴⁾。のち、都市計画が何回か調整されたが、欧州人区、中国人区と台東鎮と台西鎮の住宅区が青島市の基本のレイアウトを構成していた（図 3-3）。

第2項 公園の計画と建設

第1章で述べたように、青島市を衛生都市、療養地とするべく建設するのはドイツ総督府の目標だった。山々に森林を造ることに加え、市区に多くの公園と庭園を造るのはこの目標を達成する重要な手段であった。

2-1. 都市計画によって形成された公園

ドイツ統治期には公園の定義や理論が整備されていなかったが、都市計画図に含まれた公園からドイツ統治期の公園の位置づけが読み取れると考えられる。1898年の都市計画図には2つの公園が含まれている。一つは総督府の前に立地し、もう一つは福音教会の周辺に位置する¹⁵⁾（写真 3-1）。1899年の計画案にはこの2つの公園に加え、3つの公園が増えた（図 3-2）。一つ目は天主教会の周囲にあり、この配置パターンは福音教会とまったく同じである。ただし、のちに天主教会の立地がまたかわり、この公園は実現されなかった。二つ目はフリードリヒ街の西側にあり、正式な名称がなく、都市公園または都市広場呼とばれていた。これはドイツ統治期に造られた公園の中で商業地域に立地していた唯一の緑地であり、当初に海軍クラブに建設するつもりだったが、のちに別のところに建設されることになったといわれている¹⁶⁾。三つ目は駅の移動によって形成された駅前広場であった。フリードリヒ街に立地する都市公園を除き、計画案によって形成された公園はすべて政府、教会、駅の周辺に立地していることから、ドイツ統治期には公園緑地の計画より、重要な公共施設の位置がまず選定され、公園緑地は附属空間のようにこれらの施設の周辺に配置された傾向を読み取ることができる。

この傾向は1907年に建設された総督官邸公園によって強められた。総督臨時官邸は最初に別荘区として指定されたビクトリア海岸に建てられた。そのあと、3年間をかけ、新しい総督官邸の立地と計画案を選定し、1905年に信号山で新しい総督官邸の構築が始まり、1907年に竣工した¹⁷⁾（写真 3-2）。同年には総督府官邸公



写真 3-1 教会公園（『青島古葉書』より）

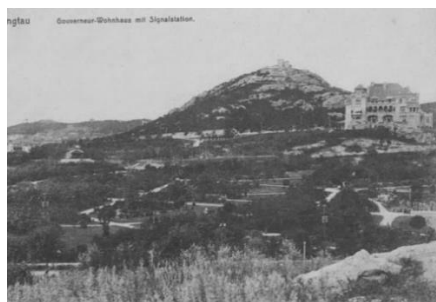


写真 3-2 官邸公園（『青島古葉書』より）

園が構築され、数百人の中国人労働者が公園の構築に参加した。『備忘録』の記述によれば、公園の面積は約 10ha であり、南の部分は市民に開放される公園であり、北側の部分は総督官邸庭園であった。林務局が高木を 665 本、低木を 1,532 本、灌木を 51,796 本、苗木を 56,150 本、この新しい緑地に提供した¹⁸⁾。そして、「この緑地の設置は、樹木に対してますます増加している需要にこたえるのに役立つ」という記録から、公園は最初に苗圃として使われるつもりが見られる。

2-2. 植林によって形成された公園

都市計画による明確なプランが出されたことより、多数の公園は最初に苗圃や植林地として使われ、樹木が大きくなるとともに道路が構築されたり、施設が設けられたりし、徐々に公園が形成された。この中で最も代表的な公園は森林公園（現中山公園）である。第 2 章で述べたように、外国から持ち込まれた樹種の試験を行うために、1898 年にはイルチス山に植物試験場が造られた。ここに苗木を育成する苗圃、果樹園が造られ、ヨーロッパの野菜や観賞用の植物も植えられていた¹⁹⁾。これに関する詳細の内容については本章の第 6 節に述べている。植物の試験が行われる一方、1900 年にはドイツ総督府がイルチス山を買収し、植林活動がはじめられた。樹木が徐々に大きくなるとともに、野生動物が集まり、狩猟区域が設けられ、ここは徐々に植物園と動物園を中心とする公園になった。

植林によって形成された公園はもう 2 つある。一つはビクトリア海岸公園であり、もう一つはアルブレット公園である。ドイツ政府が青島を占領してから早いうちに、青島の衛生状況の改善に伴い、将来皆に人気のある海水浴場になると予想し、ビクトリア海湾を最初の海水浴場の場所として選定した。1900 年の「引き続き植林する。そして、森林地域を会前角まで拡張させ、アオグステ・ビクトリア海湾を樹林で取り囲む」²¹⁾ の記録から、1900 年以前に植林活動が始まり、継続する計画がたてられたことが分かる。これらの森林は防風以外にも浴場に良い背景を創出する役割も果たしていた。1904 年には別荘に近い部分の林間道路もう完成し、緑地施設の建設も開始された。その方法については「ここをまず苗圃として使い、苗木が大



写真 3-3 海岸公園(『青島古葉書』²⁰⁾ より)



写真 3-4 アルブレット公園(『近代青島
都市計画と建設』より)

きくなり、必要な苗木を移出した後、公園に改造する」²²⁾ というものであった(写真 3-3)。翌年の『備忘録』の記録によれば、計画された通りに道路網がさらに拡大され、公園が整備された。よい環境が作り出されるとともに、海で泳ぐ客の数は1902年の30人から1908年の575人に増加した。彼らは主にドイツ人であり、その次はイギリス人(200人)で、アメリカ人、フランス人、日本人もいた²³⁾。

アルブレット公園はドイツ統治期に造られた最後の公園である。1898年の計画図で公園が立地している場所には道路と街区が計画されていたが、1901年の「青島及び周辺」の地図では道路と街区がのちにこの公園になった場所を避けるように配されている。この場所が選ばれた理由については地形から示唆が得られると考えられる。1898年の地図に描かれている地形と写真 3-4 によれば、アルブレット公園は元来谷だったことが知られる。谷の上に道路や街区を造るのは困難であったため、建設用地として使うことは控えられたと推定される。1911年12月には都市建設局がこの坂に木を植えることを提案し、建築廃棄物で谷を埋め立てることが行われた。1913年には面積30,000m²の緑地が形成された。

第3項 公園の特徴

3-1. 立地と分布

表 3-1 はドイツ統治期に造られた公園と他の統治期の名称を対照させたものであり、図 3-3 はその分布である。これらの公園を起源によって分類すると、都市計画によって形成された公園と植林によって形成された公園の2種類があった。都市計画によって形成された公園の立地は前述の通り教会や総督府等の公共施設の立地によって決められ、公共施設の位置が変えられたことに伴い、公園の立地も変わったこともある。この特徴は教会周辺に立地する公園に最も見られやすいと考えられる。それに対し、植林によって形成された公園は当時植林樹種の栽培、海水浴場の建設、地形などそれぞれの需要に応じ、山、海岸、谷など建築物を建設しにくく、風景が絶好の場所に立地する傾向が明らかであった。

1913年まで約101haの公園が造られ、1人当りの公園面積は16.8m²に達し、2012年の青島市の1人当たりの公園面積(14.58m²)より高かった。ただし、これらの公園はすべて欧州人区が立地していた都市の南、東に設けられ、分布は極めて不均一であった。もし、欧州人(軍を含む)だけで計算すれば、1913年に青島に住んでいた欧州人は合計2,069であり、1人当たりの面積は約491.9haに及び、驚くほど大きい公園面積だった。それに対し、大鮑島の中国人区は面積が限られ、建ぺい率が約75%の高密度に建設され、公園が1カ所も造られなかった。また、市区から遠く離れている台東鎮と台西鎮はそもそも都市の範囲に収められず、衛生の問題から、労働者たちが隔離されたと考えられる。無論、この2カ所にも公園は

表 3-1 ドイツ統治期に造られた公園と名称の対照（『備忘録』、『土木誌』、『工務紀要』などにより作成）

番号	公園			建設年代	面積(m ²)	現状
	1898-1914	1914-1922	1922-1938			
1	総督府広場	総督府前園	市府前園	1898+	3,150	広場
2	福音教会公園	—	—	1898+	—	なし
3	森林公園	旭公園	第一公園・中山公園	1898+	800,000	公園
4	都市公園	深山公園	銀行に占用された	1901+	6,050	なし
5	海岸公園	曙濱公園	魯迅公園	1902+	50,000	公園
6	総督官邸公園	霞ヶ関公園	迎賓館前園	1907+	120,000	なし
7	アルブレット公園	大村公園	第五公園	1911+	30,000	公園
8	駅前広場	千葉公園	第六公園	—	992	なし

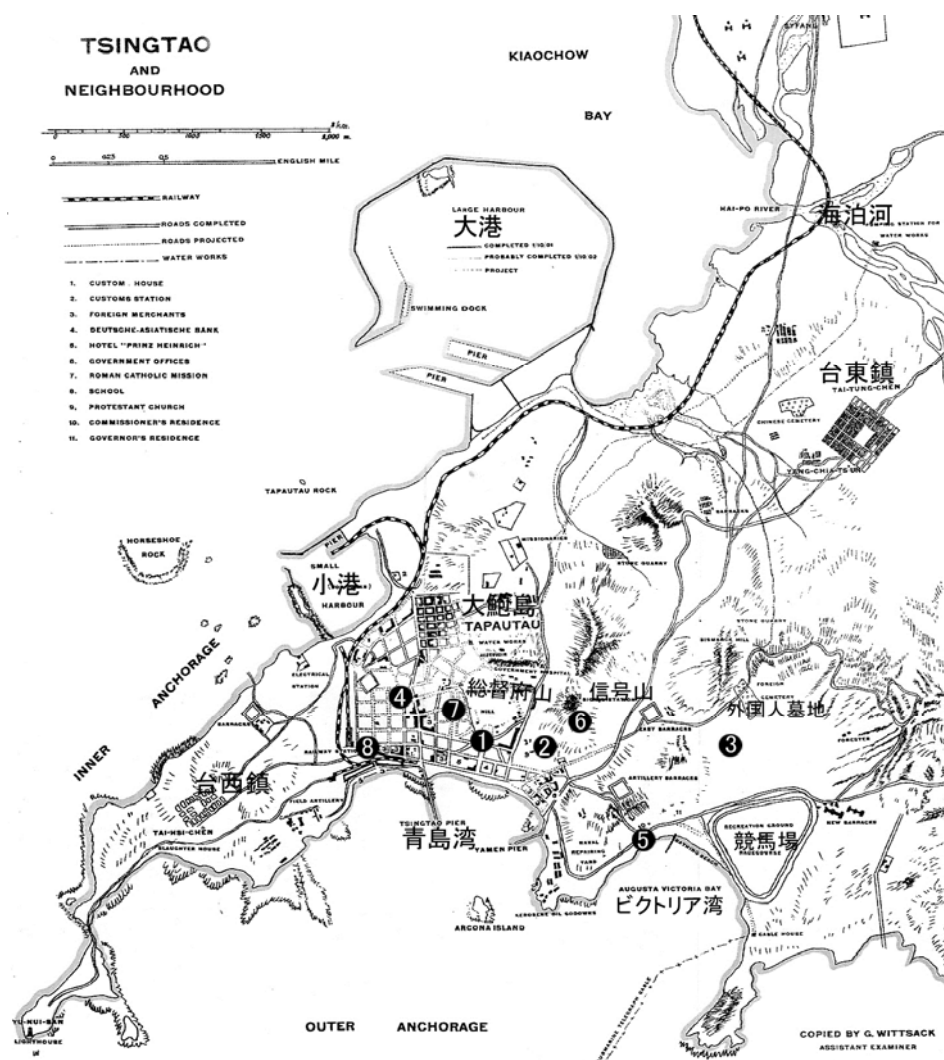


図 3-3 ドイツ統治期の公園の分布（ベースは 1901 年の「Tsingtao and Neighbourhood」（『青島地図通覧』）である）

造られなかった。公園の不均一の分布から植民地の特徴も見られる。

3-2. 空間的特徴

古写真によれば、総督府前の広場を除き、公園は海や山などの地形を尊重する場所に造られ、植物景観を中心とし、自然的な空間特徴を持っていた。道路が比較的良好に計画され、施設が多い公園は総督官邸公園だけであった。写真によると、公園は多くの樹木、環状の道路、石橋と馬屋によって構成されていることが分かる。一番高い場所に総督官邸が立っており、その雄大さ、権威が公園によって浮き上がらせられている。教会公園にも植物景観の中心に教会が建てられ、公園は教会の重要性を強調する付属空間であった。

公園は都市計画図によって場所が決められたが、その設計図は見当たらなかった。森林公園、海岸公園と総督官邸公園は最初に樹種の試験場、苗圃として使われ、のちに道路網が拡大されたりし、公園が形成された。この過程からみると、公園が造られた最初の段階で設計者によって造られたというよりも、当時の林務官であった Thomas と Malte Hases²⁴⁾の手により改造される形で公園は造られた可能性が高いと考えられる。それは青島が当初に無立木地であり、森林でも公園でも作る時には樹木を植えるのが急務だったからである。日本統治期の史料には林務局が森林の管理、樹種の輸入以外、公園と官庁庭園の設計も行っていたと書かれており²⁵⁾、お

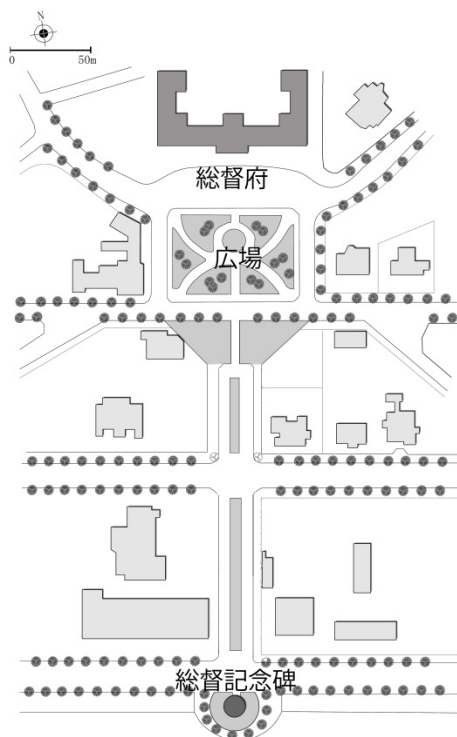


図 3-4 総督府前広場 (航空写真、google map より作成)



写真 3-5 総督府前広場 (『青島古葉書』より)



写真 3-6 総督記念碑 (『青島古葉書』より)

そらくこれらの公園も林務局によって設計されたと推定される。

最も異なる空間的特徴を持っていたのは総督府広場である（写真 3-5）。この広場は最初の都市計画案によって決められ、初期の公園緑地の中で唯一の幾何式で設計された緑地である。総督府周辺に等高線に沿って放射状に設計された道路と対応し、広場が対称、放射状に設計された（図 3-4）。広場の設計者が不詳であるが、総督府の付属緑地空間として、広場と総督府は同じ設計者によって設計された可能性が高いと考えられる。総督府の設計者はドイツ政府建築士 **Mahlke** であり、総督府広場も彼によって設計されたと推測される。

1901 年 1 月 27 日に総督 **Jaeschke** が亡くなり、青島の建設に全力を尽くした総督を記念するために総督府の真正面の海岸沿いに総督記念碑を造る計画がたてられた²⁶⁾。写真 3-6 によれば、記念碑が半円の緑地に囲まれていたことが分かる。こうして、総督府前の軸線的な景観は記念碑の構築によって政治、記念の意味が強くなった。

3-3. 樹種の選定

前述したように、樹種の問題を解決するために、外国から多くの樹種が輸入された。その結果、日本統治期に青島の樹種は 176 に及んだが、中国の樹種はその十分の二、三しかなかった。特に植物試験場として使われた森林公園の植物景観はほとんど外来の樹種で構成されていた。こうして、青島の公園は施設と形だけではなく、造園の材料まで徹底的に外国文化の印がつけられた。また、初期には樹木の種類だけではなく、植林と緑化用の樹木の量も足りなかった。早く多量の樹木を繁殖するために公園は苗圃として使われたこともあり、植物景観は観賞の機能より、生産の特徴が強かった。

樹木の配置パターンは基本的に樹種の生態適応性によって決められた。例えば、海岸公園では強風、塩気、岩石に対応する必要があるので、クロマツが一番多く植えられた。それに対して、海岸から遠く離れ、比較的乾燥している都市公園にはニセアカシアが多く植えられることになった。興味深いのは公園の植物景観に最も大



写真 3-7 陸軍病院(『青島写真案内』より)



写真 3-8 総督官邸公園(『青島二年』より)

きな影響を与えたのがドイツの樹種ではなく、日本のサクラであったことである。森林公園（現中山公園）には桜大通り、桜小路、苗圃などの形で、約 20,000 本のサクラが植えられ、ドイツ統治期から「桜公園」の通称もできていた。森林公園以外にも、総督府病院（後陸軍病院、現青島大学付属病院）と総督官邸公園でそれぞれ 4 列と 2 列の並木景観が創出され、サクラが公園の植物景観の主役となっていた。ドイツ統治期になぜサクラを多く輸入し、それぞれの景観に用いたかについては、サクラが花の咲く樹種として観賞価値が高い一方、ドイツがかつて日本の武士道を標榜し上下挙って桜花を賞した価値観とも関係があると言われえている²⁷⁾。

このように、日本とドイツの樹種は最初から青島市における植物景観の基調を決定し、現在まで引き続き植えられ、植物景観へ非常に大きな影響を与えている。

第 2 節 日本統治期の公園建設と改善

第 1 項 都市の拡大

日本は 1914 年 11 月に青島を占領し、1917 年まで青島で軍政を実施していた。青島守備軍司令部の下に臨時鉄道聯隊、軍通信部、軍經理部-水道部、軍軍医部-療病部、軍獣医部-屠獸場、軍法官部、青島軍政署、李村軍政署、埠頭部、港務部、林務署、軍憲兵が設置された。そして、青島軍政署の下には庶務、調査、經理、衛生、警務の各部署もが設けられている。1915 年以降、營業、土地、土木建築の分課が増やされた。日本が中国東北で行われた建設からみると、後藤新平、児玉源太郎、神尾光臣など満鉄総裁や軍政官が都市計画に与えた影響は土木課長より大きかったことがわかる。そのため、日本統治期に青島市の都市拡張に影響を与えていた可能性のある人物としてまず軍政時代の司令官を見てみよう。

青島市の初代司令官は神尾光臣であった²⁸⁾。青島にくる前に、彼は遼東守備軍参謀長（1904-）、清国駐屯軍司令官（1905. 6-）、関東都督府の参謀長（1906-）などの職務に就き、1905 年に大連の都市計画に方針を次のように指示した。「大連の将来の発展のため、少なくともこの世で恥ずかしくない都市建設を方針とし、家屋が保温、防火、美観の不燃建物にする。木造家屋は一時的な用途だけに使うことを許す」²⁹⁾。神尾光臣が青島の司令官に在職した期間（1914. 11-1915. 5）は短かったが、彼の思想はドイツ統治期に実行された建築法規と一致しており、おそらくドイツの建築法規がほぼそのまま継承された要因だったと考えられる。

拡張計画が編成される前に、まず応急政策として台西鎮に住居地域が開拓された。それは占領直後、青島が日本人に開放され、青島に住む日本人の数が急激に増加したからである。1913 年に青島に在住していた日本人はわずかに 316 人であり、総人口（60,484 人）の 0.5%をしめていたに過ぎなかったが³⁰⁾、1915 年末に、青島の

日本人は 11,009 人に達し、総人口（76,588 人）の 14.4%にも及んでいた³¹⁾。激増する人口による住居問題への応急政策として、政府は台西鎮の東方の停車場通りに接している面積 7,560 坪の土地を使用し、1915 年に道路延長 3,716 間の開削及び地均し工事に着手し、同年 6 月竣工したという³²⁾。

その後日本政府がドイツ人によって建設された市街地を評価し、日本人が今後の青島での発展を考え、拡張計画を編成した。まず、ドイツが建設した市街の現状と青島の将来に対し、日本政府がどう考えていたのかを見てみよう。日本政府にとっては「占領当時ニオケル市街ハ山東町、葉櫻町ヲ経テ大港ニ至ル道路ヲ幹線トシ左右ニ開展セル約六千万坪の面積ヲ有セルカ之レ独逸カ第一期ノ市街地工事トシテ急施セルモノニシテ市街發展ノ中心タルヘキ大港ヲ距ルコト遠キヲ以テ唯一ノ住宅的市街地タルニ過スシテ、到底商業地区トシテ将来ノ繁栄ヲ期待スルコト不可能ナリシヲ以テ青島ノ前途ヲ予想シテ其ノ發展ヲ大ナラシメントスルニハ市街地ヲ大港方面ニ拡張シ茲ニ商工業地区ヲ築カサル可ラス」。このように、日本は青島を商業と工業が繁栄する都市として建設する方針に基づき、新市街の建設工事を計画した³³⁾。詳細な工事計画に関しては、『軍政史』と『土木誌』の両方に記録がある。

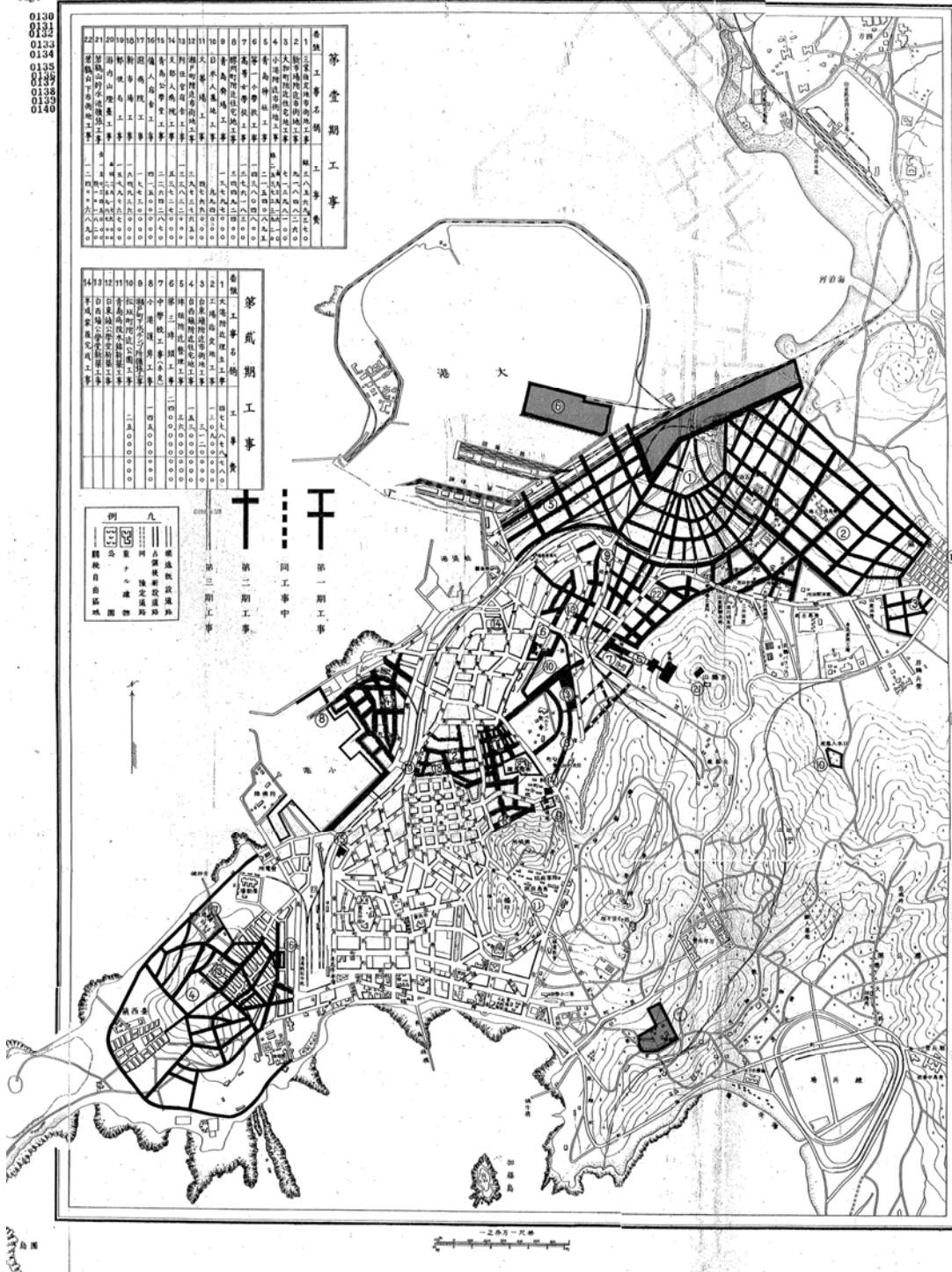
『軍政史』によれば、工事は 4 期に区分された。第 1 期工事には 1) 大鮑島区と北部大鮑島間に介在する上・下煉瓦工場を取り壊し、上の工場付近を商店向市街として、下の工場蹟を市場敷地及商店向市街地とする。2) 若鶴山西の中腹に神社敷地を建設する。3) 大和町上海町間に住宅地とする。4) 隼町、瀬戸町付近の工事を継承し、住宅地とする。5) 小港埋め立て及びその付近に商店街向市街地を建設し、小港船入場護岸建設及び浚渫と荷揚場整理工事。6) 膠州町東端測候所山の北麓に住宅地を設ける。7) 小鮑島通り西端に高等女学校、花咲町北端に小学校、万年山北東麓に日本人墓地、旭山西北麓に火葬場をまた膠州町東端に斎場を建設するため敷地を設ける。第 2 期工事は第 1 期完成との市街地へ接続し、東北方台と東鎮の間に市街地を延長する。第 3 期工事は埠頭北東方に接続する鉄道線路北の干潟地を埋め立て、市街地を建設する。第 4 期は第 3 期建設の市街地に接続し、これを北方に延長するため、鉄道線路以西の干潟地を埋め立てて、市街地を建設する³⁴⁾。都市の基本構成は大鮑島中国人区に接続する部分から若鶴山北西麓までの所に公共施設、商店街と住宅地が設けられ、日本人の生活中心が形成された。大港付近には商工業用地が設けられることになった。

『土木誌』によれば、都市を拡大する工事は 3 期に分けられた。第 1 期の第 1 次工事に応急的施設として市街の中央である上海町、所澤町間の傾斜地にする。元ドイツ人が経営した煉瓦工場を撤去し、三業指定地³⁵⁾ 及び市街地を設ける。その下方低地に市場及び付属市街地を設ける。次に「ジャンク」貿易の要衝地である小港の拡張及び荷揚場を整理し、その付近を沿岸貿易市場及び倉庫地とする。第 2 次工事

0010

[illegible][illegible]

例	九
 	 
關	關
自	自
自由	自由
區域	區域



41

において若鶴山の北方にして、台東鎮街道に沿う一帯の地域の約 12 万 5 千坪を工場指定地とする。大和町、上海町の間及び瀬戸町付近、大港停車場前一带、膠州町にそう測候所山北麓を住宅及び商業地とする。花咲町中央の空地に小学校敷地を、若鶴山の山腹に神社、高等女学校敷地を、その他公園、斎場、墓地などの新設敷地工事を実施し、日本人の永住の基礎を完成する予定だった。第 2 期工事として若鶴



図 3-6 青島の工事計画及び建設された公園（「青島市街工事計画図」付図「青島市街図」と 1922 年の市街図などによって作成した。＊図中の網かけ部分はドイツ時期に計画・建設されたもの）

山下及び広島町台西鎮間の高地一帯の面積約 20 万坪を住宅及び商業地として、大港の東部貨物鉄道線路と旅客鉄道線路の中間一帯の低地面積約 15 万坪を埋め立て、商業地区および鉄道倉庫地とし、その土取り場跡である台東鎮西方高地一帯を工場指定地の拡張地域とし、又旅順町、忠海町の沿道高地に約 2 万坪を住宅地として、目下施工中、若鶴山下市街地は既に完成し、そのほかは近く竣工させる計画であった。第 3 期工事としては台東鎮の東北方に市街地を拡張し、更に大港防波堤の裏一帯の浅瀬面積約 60 万坪を埋め立て、一大商業市街地とし、その北方に約 20 万坪の「ジャンク」港を建設する計画であった。

『土木誌』に記されている工事は『軍政史』の工事より範囲が大きかった。『軍政史』に記されている第 2 期は『土木誌』の第 1 期の工事に含まれ、第 3 期と第 4 期の内容が『土木誌』にまとめられ、第 3 期の工事に含まれることになった。そして、『土木誌』に記されている第 2 期の工事は『軍政史』に記されていない。それはおそらく、最初の工事計画がのち少し修正されたからと判断される。図 3-5 には 3 期の工事を示しており、表には具体的な工事と費用を示してある。この図面は『土木誌』に記録されている工事計画の内容をほぼ表示しているが、大港付近の範囲を見づらく、第 2 期の忠の海付近の工事範囲も示していない³⁶⁾。図 3-6 は筆者がこの図面及びその文字内容と 1922 年の市街地図などによって作成したものである。図面によれば、ドイツの埠頭地域に造られた日本人の生活の中心道路はほぼドイツ統治期の未完成道路の骨格に従って造られたが、北側の港付近には放射状と格子状の道路が計画され、日本が中国東北地方の満鉄附属地で実施した都市計画の面影が見られる。この拡張案は日本統治期が終了するまで、大港付近の工事の第 2 期と第 3 期を除いて、ほぼ実施され、市街の範囲はドイツ統治期の 3 倍となったという。

第 2 項 公園の建設と改善

2-1. 公園の定義と理想の都市

ドイツ統治期と比べ、日本統治期には公園の理論が非常に大きな進歩を遂げた。市内における普通公園はこのように定義されている：「今青島市内其ノ近郊ニ在リ所謂普通公園トシテ、遊覧休養、娯楽、運動並ニ市街ノ記念装飾等を主目的トナスモノ」³⁷⁾。普通公園はさらに小公園、小遊園地、広場と花壇に分類されている。このように、日本統治期に入って、公園の定義、機能、種類が明確になった。普通公園の定義で注意すべきは「市街ノ記念装飾」の機能である。この定義に従い、後述しているように、日本統治期に造られた公園は象徴・記念する傾向が著しく顕著になった。普通の公園にくわえ、海泊河、李村河、白沙河など郊外にある水源を涵養する森林も天然の大公園として指定された。市内外の公園を連絡し、青島市全体を一つの大公園に建設する計画であった。

この目標を実現するために、日本統治期にはドイツ統治期に造った公園に加え、道路交差点にある小三角地旭練兵場、各砲台、海水浴場及び予定計画中の公園など 24 カ所に及び、その面積は 389.3ha に達した。その他、気候の調和、風景の修飾、水源の涵養等のために、所謂森林公園 872.6 ha、市外天然公園 8938.2 ha を計画し、合計 43 カ所 10385.8 ha に達するものとした³⁸⁾。既存の公園と計画中のこれは理想都市の標準を満たしていることを確認するために、当時ニューヨークの公園課技師であったチャーレスドーニグ氏によって提出された理想都市との比較も行われた。

表 3-2 は青島市と理想都市の公園緑地の対照である。表によれば、青島市における天然林野の面積は理想都市より 90ha 広いことから、青島の植林事業が大きな実績を残していたことが分かる。逆に、小公園と小遊園地など普通公園の方が、面積も数も理想都市とはるかな格差があった。これに関しては『土木誌』にこう説明されている。理想とする公園は大陸平坦地の都市に於けるものと想定され、青島は山を中心とする丘陵地の都市であり、公園の数は理想都市より少なかった。だが、青島の市街住宅地は至る所で自然公園または天然林野と接し、利用できる便利さがあるからという説明があげられた³⁹⁾。これは、ドイツ統治期から中国人区と労働者が住んでいた区域に公園が造られなかったことと関連もあると考えられる。しかし、前章にも述べたように、青島の支配権が回復された時、森林も公園も計画の一部だけしか完成していなかった。

2-2. 公園の開拓

上記のように公園計画は行われたが、具体的な場所は不明である。ここで当時の都市計画との中の中華民国統治期の史料を合わせ、日本統治期に造られた公園と実現されなかった公園を見てみよう。まず、1915 年に編成された青島市街図には第 1 期 5 番の青島神社、23 番の新町公園と第 2 期 10 番の松坂公園の 3 つの公園が含まれている。その中では第 1 期青島神社と新町公園が実現されたが、松坂公園が実現されなかった。

工事計画に明確には書かれてないが、凡例によれば駅の前に既に公園ができていたことが分かる。これはドイツ統治期に駅の移動によって形成された駅前の緑地で

表 3-2 青島市における公園と理想都市の公園の対照（『土木誌』より）

種別	青島市 (ha)	理想都市
天 然 林 野	784.2 (7 ケ所)	694.2
自 然 公 園	206.3 (5 ケ所)	396.7 (3 カ所)
小 公 園	78.5 (7 ケ所)	297.5 (30 ケ所)
小 遊 園 地	8.8 (6 ケ所)	99.2 (150 ケ所)
広 場 と 花 壇	1.9	49.6
計	1079.8	1537.1
公園千坪に対する人口	61	54.5

あり、日本統治期に千葉公園と命名された。千葉公園は 1914・1915 年の戦役に参加した千葉連隊が引き上げる際、記念するために造られたものである⁴⁰⁾。公園の中心部に記念碑が立ち、周りにマツが植えられ、日本式風の景観的特徴が現れていた(写真 3-9)。千葉公園ができた経緯とほぼ同様であった公園は若鶴公園である。若鶴公園は若鶴山の北東に立地し、ドイツ統治期に兵士たちの休憩する場所として建てられたという⁴¹⁾。ドイツ統治期には公園には正式の名称がなく、日本統治期に「若鶴公園」と命名され、公園としての役割が明確となった。

日本統治期に造られた最も重要な二つの公園は青島神社境内と新町公園であった。青島神社は新市街の中心である若鶴山(現貯水山)に位置している。神社は「国家中心」、象徴的施設として計画され、1919 年に本社青島神社は竣工したという。本社の青島神社の他、摂社金刀比羅神社、摂社稲荷神社も計画されたが、稲荷神社は 1932 年に落成した。境内には鳥居、拝殿、本殿などの施設だけではなく、弓場、角力場等の娯楽施設も設置されていたことがわかる。また、神社境内の南側に兎舎、熊舎、鳥舎、猿舎などが描かれており、小さい動物園が形成された。こうして、神社は公衆の信仰と遊興の機能を兼ねていた。そのため、青島神社境内は『土木誌』に普通公園として記されている。青島神社の建設の経緯と景観の特徴は本章第 6 節「貯水山公園の形成と変容」に詳しくのべている。青島神社と同様の記念施設として、戦死した陸海軍将卒を記念するために、1916 年に旭公園で忠魂碑が建設された⁴²⁾(写真 3-10)。毎年 4 月 30 日には忠魂碑の下で招魂祭が執行され、官吏や軍人だけではなく、一般市民と学校の生徒などまでも参拝することになっていた⁴³⁾。

新町公園は上海町に接し、周辺に三業指定地⁴⁵⁾、大和町住宅地、膠州町住宅という日本人が最も集中していた場所に立地している。ここは元々ドイツの煉瓦工場の土取り場であったため、東側が高く、地面より低い地形が形成された⁴⁶⁾。政府は花木を植えたり、池を掘ったりし、公園を造った(写真 3-11)。公園に加え、計画された通り、道路の交差点に小三角地も造られた。中華民国統治期の統計によると、江蘇路、徳県路と山東路の 3 カ所に三角緑地が造られた(表 3-3 に参考する)。



写真 3-9 千葉公園(『青島写真案内』より) 写真 3-10 忠魂碑(『青島』⁴⁴⁾より)

以上は第1期と第2期の工事に含まれた公園とほぼ改名だけによって形成された公園の建設状況である。中華民国統治期の記録によると、少なくとも大港公園と大和公園の2つの公園は第3期の工事に含まれていた。表3-3によれば、青島が接収されるときにこの2つの公園はまだ計画中であったことが分かる。

2-3. 公園の改善

公園を計画、構築したこと以外に、改善活動も多く行われた。1917年に本多静六が青島の公園を考察し、それぞれの公園の現状に基づいて改良案を提出した。本多静六は日本の「公園の父」といわれる。林学を専門とした本多静六はドイツに留学していた経験を持ち、日本で初めての洋風公園である日比谷公園を設計した。その後、日本の北から南にわたって、非常におおくの公園の設計や改善に携わった。日本とドイツの文化を熟知し、林学に関する専門知識と公園を構築する経験を持つ本多静六が青島の森林、公園を考察し、1917年には「青島森林ノ将来」に公園の改善に関する意見も述べている。

まず、ドイツ統治期に造られた公園、特に植林で形成された景観が比較的単調であり、施設が不足の公園に対し、改良案がそれぞれ提出された。大村公園（前アルブレット公園）はドイツ統治期の最後に谷を利用し、造られた公園であり、この公園に対し、次の如く主に植物を繁茂させるとともに、子供の遊び場を設置する意見だった。

四囲の並木（アセル、ネガント）十分に繁茂セシメ其下ノばらヲ増殖シテ生籬状ニナシ道路以外ヨリノ侵入ヲ防ギ中ハ青芝生と草花又ハ宿根草類ニナシ所々に大ナル日陰木（さくら杯）ヲ植エ凹所ニハ草花類殊ニあやめ杯を植ウコト。其一部ニハ子供遊び場ヲ設ケ日陰木ノ下ニ遊具ヲ置クコト現在ノアカマツ病木ハ除キ他ノ健康ナルモノヲ植込ムコト等。

この意見では植物景観の多様性と観賞性が主張されているのが注目され、高木、バラ、草花、芝生によって、ドイツ統治期には樹木が単調だった状況が改善された。



写真 3-11 新町公園

(<http://hi.baidu.com/qqhyyq/item/b1bf9d15beb6697e7b5f258f> より)



写真 3-12 深山公園（『青島写真案内』より）

大村公園の改善とほぼ同じように、ドイツ統治期に商業地域で造られた唯一のオープンスペースであった深山公園（ド・都市公園）に対しても植物景観を維持することに加え、子供の遊び場も設けられた（写真 3-12）。本多の改良案の中には、もっとも多く改良すべきは旭公園即ちドイツ統治期に造られた森林公園であるとの指摘がある。この公園は元来苗木を養成するために造られ、公園としては様々な欠点があった。普通の公園として使うならば、公園の道路や池、植物景観、果樹園、動物園、子供の遊戯場などを整理しなければならないと本多は建言した。旭公園の改良に関する詳細は本章第 6 節に述べてある。

ドイツ統治期に造られた公園だけではなく、日本統治期に造られた公園に対しても改良案が提出された。まず、青島神社の参道 4 列の並木の選択に関しては、本多は内側にソメイヨシノサクラ、外側にクロマツを植えるべきたとの意見を述べた。その理由としては「四列のさくら並木ニテハ神社の参道トシテ餘リニ華麗に過ギ莊嚴ヲ缺クノ虞アリ故ニクロマツにヨリテ此ノ缺ヲ補ハムトスルモノナリ」を挙げていた。そして、青島神社の社殿に幽鬱の森林背景を提供するために、そこにある生長不良のニセアカシア林に対し、まずクロマツの大苗で補植し、その後ビヤクシン、コノテガシワの類も補植する計画がたてられた。のちの神社の写真によれば、参道両側の並木はサクラとクロマツであったことから、本多静六の意見が採用されたことが分かる。

日本統治期に造られたもう一つの新町公園に対し、本多が日本の代表的な水景観の「滝」を中心とし、景観の改造の必要性をのべていた。

水道の餘水を利用シ（不足ノ時ハ止メル）溪流ニ沿フテ流レ瀧ヲ造ル即チ現在ノ岩谷ノ上方ヲ常緑樹ニテ植ツブシ（びやくしん、このてがしは、まさき、つばき、まさきかつら杯）其間ノ割目ヨリ水道ノ迸シリ出ル如クナシ谷川ノ岩ノ狭間ニ大石ヲ轉カシ其下ヲセメントシテ塞キテ上ニ淵ヲ造リ瀧ヲ落シ遂ニ大池ニ流レ込マシム又大池ノ周囲ハ岩ヲ崩レ積ニナスベシ。

瀧に加え、公園に植えられた植物に対し、「現在ノさくら、くろまつ、あをぎり、すすかけ、其他日陰木ヲ増殖スルコト」も建言された。瀧、サクラとクロマツによって、日本風の景観的特徴が造られた。

以上の改良案からみると、日本統治期には植物景観の観賞性と多様性が重視され、サクラやバラ、草花などの観賞できる植物が植えられ、ドイツ統治期にマツやニセアカシアなど速成樹種で形成された植物景観の単調性が改善されることになった。そして、普通公園の機能に定められたように、子供の遊戯場が多く建設され、公園は子供を含む市民に運動のスペースを供していた。

第3項 公園の特徴

3-1. 立地と分布

日本統治期には公園の種類と機能が明確に規定され、公園の理論が大きく進んだ。そして、理想都市のモデルが導入され、青島市を大公園に建設する目標が提出され、森林も公園系統に含まれることになった。これらの所謂天然大公園はおもに郊外にある水源地に分布していた。

普通公園においては、市街の拡大工事に伴って計画され、形成された公園とドイツ統治期に名称がなかった緑地を改善し、正式に命名され、形成された公園の2種類があった。前者は（実現されなかったものも含め）拡張された市街、特に日本人が集まっていた地域に立地し、日本人にリラックス、運動する空間を提供していた。神社の尊厳を強調するために、青島神社は若鶴山の中腹に立地していた。新町公園は煉瓦工場の土取り場に立地し、実現されなかった松坂公園は小学校と隣接する傾斜地に配置された。これらの計画された公園は日本人が集まった住居地域に立地する一方、地形がよくない場所を利用し、経済性と美観の両方が考えられた。

また、千葉公園と若鶴公園はドイツ統治期に造られた緑地を利用し、駅前の商業地域と若鶴山北東部の工業地域に立地し、日本統治期の拡大工事とはほとんど関連がなかった。

日本政府により多くの公園が計画され、市内外の公園を連絡し、青島市の全体を公園として建設する目標が提出されたが、計画された公園の立地からみると、すべての公園は新市街の日本人区に設けられ、ドイツ統治期から中国人区に公園がなかった状況は変わらなかった。この点はドイツ統治期とまったく変わらず、公園には植民地の特徴が現れていた。

3-2. 空間特徴

日本統治期の公園の定義における「市街ノ記念装飾」の機能はもっとも注目すべき特徴であったと考えられる。青島神社の施設、旭公園の忠魂碑と千葉公園の中心部に建てられた記念碑がこの機能をよく表していた。青島神社と忠魂碑の空間は軸線を持ち、ほぼ左右対称に設計され、記念的特徴が明らかであった。そして、山腹に立地し、山の高さによって、公園全体の雰囲気強く支配していた。その結果、戦後になると記念施設が取り壊され、参道両側の並木も伐採されることになった。ただし、記念施設がすでに撤去された現在でも、元来の参道と階段には、記念的雰囲気が残されている。

これらの記念・象徴する役割を果たしていた公園に対し、新町公園は土取り場の低地を利用し、池を中心とする公園が造られ、のち本多静六の提案によって瀧や石などの造園要素を用いられ、日本の伝統的な庭園の空間特徴が現れていた。写真に写されている子供たちが池の中で遊んでいるように、この公園は定義に規定された

「娯楽」、「運動」する場所を提供していたことが分かる。深山公園や大村公園にも運動する場所が設けられ、樹木だけによって形成された空間が徐々に豊富になった。

興味深いのは、この時期に日本国内でもうすでに洋風公園が造られており、本多静六もドイツの公園を真似て、日本最初の洋風公園の日比谷公園を造っていたことあったが、青島では洋風の公園ではなく、日本の伝統式の公園が造られたことである。おそらく、外国でこそ日本の伝統的庭園の特徴を強調するべきだという考えがあったと推測される。

3-3. 樹種の選定

ドイツ統治期とあまり変わらず、ニセアカシヤ、クロマツとサクラが植物景観の主角であり、もっとも多く公園に植えられた。だが、生態、観賞の顧慮だけではなく、クロマツとサクラに日本の独特の文化的意味が与えられた。特に青島神社と忠魂碑の参道両側に左右対称に植えられたサクラとクロマツ景観は本多静六の提案によって作り出され、「華麗」と「荘厳」のバランスまで考えられた。

ドイツ統治の初期に生産や生態の機能をメインとした公園には植物の種類が多かったが、主に苗圃の形で植えられ、観賞性が低かった。日本統治期には市民に娯楽する場所を提供するのも公園の主要機能の一つであったので、公園に植えられるべき樹種の特性としては、速成樹種だけではなく、観賞性と多様性も考えられることになった。旭公園ではツツジやモクレンなどそれぞれのゾーンをわけ、公園の面白さを増すようにした。

それには2つの理由があったと推定される。一つ目はドイツ統治期の初期改造によって青島の公園は徐々に多くの樹種の生長に適する場所になっていったからである。二つ目はドイツ統治期の2,000人ぐらいの移民と比べ、日本統治期には軍だけではなく、普通の日本人たちが遊べる場所を提供する責任が大きくなったからである。

第3節 中華民国統治期の公園建設と改善

第1項 都市の充実

中華民国統治期は中国政府の移動により、さらに北洋政府統治期（1922-1929）と南京政府統治期（1929-1938）の2段階に分けられる。1922年には中華民国北洋政府が青島を回復し、商埠地⁴⁷⁾として位置づけた。行政組織としては、最上位に膠澳商埠局があり、その下に内部組織、警察庁と附属機関が設けられていた。附属機関には工程事務所（総務課、土木課、水道課）と農林事務所が含まれていた⁴⁸⁾。ただし、組織も各部門の担当者も頻繁に変わり⁴⁹⁾、「青島市施行市自治制令」が公布されたが、自治の実施ができず、都市の建設もあまり進まなかった。

1-1. 沈鴻烈とその施政思想

1929 年には中華民国南京政府は青島を接収し、青島特別市を設置し、直接の管理を始めた。行政組織は青島市政府を最高の行政機関とし、その下に社会局、公安局、財政局、工務局、教育局、工務局、観象台（測候所）と農林事務所を設置した⁵⁰⁾。沈鴻烈は 1931 年から 1937 年まで青島の市長であり、中華民国統治期に青島の建設に与えた影響が最も大きかった人物である。彼は 1882 年に湖北天門に生まれ、18 歳に秀才試に受かり、23 歳（1905 年）の時に日本海軍学校に入り、卒業後帰国し、海軍に勤めた。1924 年に東北海軍司令となり、1927 年に東北渤海連合艦隊の総指揮となった。彼の経歴からみると、文化と軍事の両方に強い人ではあったようだが、都市計画や建築の専門教育は受けていなかったことが分かる。沈鴻烈が市長に赴任してから、市政綱領を公布した。

地方官の治績・行政を整え、内政を賢明且つ公正にする；自治をしっかりと施行し、民力を充実させる；悪習を禁絶し、風俗を改良する；農村を建設し、貧民に恵みを施す；教育を普及させ、実用を求める；国産の製品を提唱し、労働者を優待する；地域の業務を発展させ、市場を繁栄させる；軍隊と警察を整え、治安を固める；外交を重視し、外国人の居留民を保護する；建設を図り、文明を輸入する。

都市建設に関する専門知識こそ持っていないが、教育、経済、建設などそれぞれの面から考え、青島を経済が繁栄し、治安が良好で、文明的な都市しようとする建設する意図が明らかであった。しかも、都市と市民だけではなく、農村の建設、労働者と貧民の利益も考えられていた。そのため、沈鴻烈は市民たちに「業務に励み、人民を愛する」人物と評価されていた。

この時期の青島市の都市建設に大きい影響を与えたもう一人は邢契莘(1887-1957)であった。邢契莘は沈鴻烈市長とほぼ同時期に、青島の工務局局长に勤めていた。彼は 1910 年に清華大学の初めての国費留学生として、マサチューセッツ工科大学の造船学科で勉強していた。1914 年に卒業し、造艦と航空機械を引き続き勉強し、修士学位を得た。帰国後、天津大沽造船所、北京航空署、東北航空局、東北造船所に勤めたという⁵¹⁾。1931 年-1935 年の 5 年間、青島の工務局の局長に任命され、1935 年の都市計画でも主役を果たした。

沈鴻烈の「貧民に恵みを施す」思想に従い、1931 年から 1935 年に都市全体の計画が出されるまで、政府は着実に中国人区のインフラと貧民たちの住居の問題の解決に努めた。大鮑島の中国人区の住宅（里院）において、階段、通路、煙突、トイレなど共有施設と衛生施設が整備された。台西鎮で形成されたスラム街の水道、トイレなどを整理し、また、貧民の住居問題を解決するために、台西鎮附近で平民住宅を 8 カ所建築した⁵²⁾。そして、文化、教育、経済を発展させるために、図書館、博物館、学校、民衆教育館等それぞれの公共施設が計画された⁵³⁾。

市街の拡張において、工務局は分区計画と拡張計画を編成した。都市は行政地域、住居地域（甲、乙、丙の三種類）、商業地域、港埠地域、工業地域と農林漁地域に分けられた。拡張工事としては第1期は四方と浮山所まで、第2期は滄区口と大麦島間で拡張することになっていた。ただし、土地は民有地であり、買収の問題は財政局と工務局に任せたという⁵⁴⁾。その拡張は1932年-1934年の3年間で栄成路以東の特別建築地（別荘地）、台東鎮の南東部の商業地と北西部の工業地が新たに開拓されたという⁵⁵⁾。

1-2. 青島市施行都市計画方案初稿と公園の計画

1935年1月に青島市工務局は都市の全体に対し、「青島市施行都市計画方案初稿」



図 3-7 大青島市發展計画図（『青島地図通鑑』より）

⁵⁶⁾ (以下「施行方案」に略す)を編成した。この方案は第1章序言、第2章本計画の範囲、第3章本市全盛時代の推測、第4章本計画の原則、第5章都市中心地域の計画、第6章全市ゾーニング計画、第7章全市街路の計画、第8章全市園林空地の計画、第9章全市の一般交通(外部の鉄道交通、市内高速交通と電車・車)の計画、第10章全市衛生問題の解決、第11章公共建築物の配置と私有建築物の管理、第12章土地の整理と第13章都市計画の実施に分け、青島の現状、将来の予測をもとに、衛生、交通、公園緑地、公私建築の計画を詳しく論じている。

計画は「一、実用と美観を同様に重んずる。二、新旧市街を連絡し、一体化させる。なるべく旧市街は変えない。三、将来の拡張計画につなぎ合わせる。四、古蹟と名勝を保存する」の4つの原則に従い、行われた。注目されるのは計画が目前の拡張だけではなく、青島が全盛の時期を迎えるときに備えて、拡張・充実の段階も考え、大麦島の東側、張村河、李村河、源頭河と白沙河の5つの中心地域に商業、住居と工業機能を配置することを想定していたこと。「施行方案」の参考書目をみれば、計画が田園都市論、日本の近代都市計画、ソ連の都市計画、ドイツの土地整理、パリの交通など各国の先進理論と事例を参考にした上、青島の歴史、将来、合理的ゾーニングなどの要素をよく考え、編成されたものであることが分かる。

計画の範囲として北は滄口、李村まで、東は大麦島まで定められ、総面積は13,770haであり、総人口は100万人と予想された。各地域との連絡を考え、行政区は計画範囲の中心部、大港の東側に設けられていた。其の他、交通の利便性、地形などの要素が考えられ、商業、工業、住居、港埠、公園緑地に分けられた(図3-7)。

「施行方案」には「園林空地」(公園緑地)は「都市の肺臓」に例えられ、「園林空地」がないと都市は呼吸できなくなるという視点から、公園緑地の重要性を明確に指摘している。「園林空地」は面積5,000haが計画され、森林、公園、運動場、小運動場、競馬場、ゴルフ場、水面、広場と墓地森林の9種類にわけられた⁵⁷⁾。これは青島市で初めて考えられた全体的な公園緑地システムだといえる。公園緑地の配置原則として、港と工業地域では主に実用性を考え、商業地域では美観は実用性に従属し、住居地域では実用性は美観に従属することが規定されている⁵⁸⁾。この原則は南京政府統治期に多数の公園緑地が住居地域に分布していた重要な原因だったと考えられる。具体的な配置に関しては「施行方案」に次の如きのべている。

現在市区における公園の数はもう少なく、決して建築用地に変更させてはいけない。将来市区を拡張する際、0.5km²ごとに必ず小規模な公園1ヶ所を設置する。その位置は将来詳しく定める。大公園は今第一公園(中山公園)一ヶ所があり、将来一、二、三、四砲台一帯で公園を開拓する。森林を栽培し、空気を調節する。西呉家村の北丘は風景が非常によく、公園に開拓するつもりである。上四方の北にある山地は起伏が多く、平坦ではなく、しかも、深い溝と谷が散在しているので、公園に適する。それ以外、滄口工

業地域は空港の東、農場の北にあり、地形が起伏に富み、位置は滄口、李村、闫家山、沙嶺莊の中央にある。この敷地を用いて公園に建設すれば、各地域の需要が満たせる。

この記述から、公園の配置は自然風景、地形、各地域の需要即ち分布の均一性と合理性、古蹟と名勝の保護などそれぞれの要素が考えられ、この時点まで最も詳しく、合理性の高い公園計画だったことが分かる。

残念ながら、この計画案がまだ実施されていないうちに、日本が再び青島を占領した。しかし、この計画案の編成をリードした沈鴻烈と邢契莘には都市建設に関する思想がみられ、中華民国南京政府統治期の青島市の建設の理解に役立つ。

第2項 公園の建設と改善

2-1. 中華民国北洋政府統治期の公園の建設

青島が回復されたことに伴う変化はまず公園の名称が日本語から中国語に改名されたことであった。その後、政府が旧来の公園を改善したり、新たな公園を構築したりし、青島市の公園の質を向上させた。ただし、都市の建設はあまり進まなかったため、この時期に新たに構築された公園は少なく、公園の建設活動は主に旧来の公園で行われた再整備であった。

表 3-3 はこの時期に行われた公園の建設活動である。同表が示しているように、1 番～14 番の公園は接收の時に既にあった公園であり、政府が花木を補植したりして、公園を管理していた。たとえば、1 番の「第一公園（現中山公園）」では、前からあった溜池を利用し、池の中にあずまやを造り、「小西湖」と命名した。15 番の青島神社は日本人の保留地として日本人居留民団体に管理されていた。前述したよう



写真 3-13 総督署西公園（『中国におけるドイツ建築』⁵⁹⁾より）

に 16 番～18 番は日本政府によって計画されたが、接收後計画が解除され、公園は建設されなかった。19 番～23 番は日本時期に対応する名称がなかったことから、これらは中華民国統治期に新しく造られた公園と道路三角園であると判断できる。

19 番の総督署西公園と 20 番の栈橋前園が新たに構築された公園である。総督署西公園は総督署と徳県路に挟まれている三角地に位置し、面積は 2,001m² であっ

表 3-3 北洋政府統治期における公園の建設活動（『膠澳志』より作成）

番号	中華民国時期公園の名称	日本時期公園の名称	面積（m ² ）	接收後中華民国政府の仕事
1	第一公園	旭公園	1,100,550	「小西湖」と「清明」植樹地を開拓した。
2	第二公園	若鶴公園	16,008	荒れ果てられたので、接收後開拓した。
3	第三公園	新町公園	44,022	1923年に240本の木を補植し、1924年に100本余りの木を補植した。
4	第四公園	深山公園	6,003	1923年に86本の花と木を補植した。1924年に246本の花と木を補植し、花の苗圃を4個所を造った。
5	第五公園	千葉公園	1,000	花と木1178本を補植した。
6	第六公園	大村公園	8,004	花木300本を補植し、花圃を増設した。
7	総督宿舍公園	官邸公園	173,420	整備した。
8	天後宮公園	舞鶴公園	17,342	整備した。
9	総督署前公園	司令部前公園	3,335	整備した。
10	海岸公園	曙浜公園	11,339	整備した。
11	江蘇路三角園	万年町園	2,001	整備した。
12	徳県路三角園	治徳町園	200	整備した。
13	山東路三角園	山東町園	667	整備した。
14	安徽路三角園	大村町園	2,001	整備した。
15		青島神社	56,695	日本人の保留地
16		大港公園	54,694	接收する時に計画されているが、未成立。
17		松坂公園	87,337	接收前解除された。
18		大和町公園	3,335	接收する時に計画されているが、未成立。
19	総督署西公園		2,001	
20	栈橋前園		1,667	
21	奉天路三角園		333	
22	雲南路三角園		200	
23	常州路三角園		67	

た。1924年に花木が植えられ、公園が造られたという⁶⁰⁾。1930年代の航空写真によれば、そこには道路が設けられ、公園がいくつかの不規則の形に分割されており、植物景観を中心としていることが分かる（写真 3-13）。そして、航空写真からみると、この公園の空間特徴は同様に不規則な形に分割されている総督署前広場と非常によく似ている。また、現地調査によると、そこにはおもに常緑樹であるヒマラヤスギ、カイヅカイブキが基調樹種として植えられている。これも、総督署前の広場と一致している。栈橋公園に関しては、僅かに 1924 年にマツが若干植えられたという記録があった。その後、中華民国南京政府に引き続き整備されていった。

日本統治期と同様に、公園に加え、交通広場が多く造られ、道路の美観、修景の機能が重視されたことが分かる。この時期にまだ明確には記されていなかったが、後の中華民国南京政府時期に編成された「青島市施行都市計画方案初稿」「第八章全市の園林空地の計画」では交通広場を次のように論じている：

街路が集まる場所を街路集中広場という。（中略）。青島市にはこのような広場が多いが、一般的にその装飾がつまらなく感じられる。美術上の意味を加えるために、重要な道路交差点を空地として留め、花木を植栽するつもりだ。（中略）。交通の便利と美観の両方を同時に得られなかったら、美観を優先したうえで、交通の利便を改善すること⁶¹⁾。

この記述によれば、青島は「中国で一番美しい都市」の栄誉を保つために、道路の修景機能が交通機能の上におかれるほど重視されたことがわかった。おそらく、中華民国北洋政府もこういう視点から街路の交差点が綺麗に見えるように整備活動を行ったと考えられる。

以上、青島神社を除き、公園は合計 19 カ所、総面積 1,592,221m²に達した。ただし、植民地であったため、公園の分布は不均一で、特に労働者たちが集まっている台東鎮と台西鎮には全くなかった。政府もその点に気付き、農林事務所が台東鎮と台西鎮で場所を選び、1925 年に施工するつもりであったが、政治の不安定で実施されなかったという⁶²⁾。だが、少なくとも政府が中国人労働者たちのために公園を造ろうとする意図が見られるようになった。

2-2. 中華民国南京政府統治期の公園の建設と改善

この時期には公園の建設活動は主に 2 種類があった：1) 旧来の公園を改善する。
2) 新たに公園を造る。

2-2-1. 公園の改善

表 3-4 は中華民国南京政府統治期に行われた公園の建設活動を示している。公園の改造活動は主に 1 番の中山公園、3 番の第三公園と 10 番の海浜公園で行われた。しかも、遊覧の利便性が考えられ、花木の補植だけではなく、街灯、トイレ、腰掛、茶室などの施設が整備されることになった。

この 3 つの公園の中で最も現代的な公園に改善されたのは中山公園であった。

1929年5月22日に中国近代民主主義革命の先駆者である孫文を記念するために、第一公園は「中山公園」と改名された⁶³⁾。公園の面白さと利便性を増すために、西洋式の庭園が1カ所開拓され、噴水や花棚も構築され、そして商店も誘致されたという。中山公園に対して、行われた具体的な工事と景観の特徴は本章の第6節で詳しく述べている。ここでは第三公園と海浜公園の改造過程を述べておく。

第三公園は日本時期に新たに造られた新町公園であり、日本人が集中していた地域に位置していた。日本時期には樹木が植えられ、橋が架けられ、中華民国北洋政府統治期にも改善活動が行われたが、写真に見えるように、この公園は施設が少なく、全体的に質素だった。中華民国南京政府は公園をさらに改善するために、1934年に以下のような改善計画を編成した。

表 3-4 南京政府統治期における公園の建設活動

(『工務紀要』⁶⁴⁾ にと『青島市志』(園林緑化志)により作成)

番号	名称	年代	面積(m ²)	主要施設及び工事
1	中山公園	1898	1,100,550	洋式庭園を1カ所開拓し、花廊を造り、商店を招き、池を掘った。
3	第三公園	1915+	44,022	道路を構築し、腰掛を増やし、運動場を造った。
10	海浜公園	1904	—	1930年に石段を敷き、あずまやを三つ構築し、同時に「牌楼」を設計した。1932年1月20日に中国式の青島水族館が落成した。水族館の東側に「産業館」を建築し、1936年に竣工した。
24	棧橋西公園	1934	3,200	花木と芝生を植え、椅子や手すりを設けた。トイレを改造した。
25	小青島公園	1934	—	茶室とトイレを構築し、石テーブルをイスを設けた
26	山海関路公園	1934	—	道路を敷き、石段を造り、護岸を構築し、あずまやを建て、石テーブルとイスを設けた。
27	太平角公園	1934	—	道路を敷き、石の腰掛を設け、森林を整えた。
28	児童公園	1934	—	運動施設
29	東鎮公園	1934	30,000	土山を築き、蓮池を掘った。
30	西鎮公園	1936	5,290	花木を植え、石テーブルとイスを設け、円形の池を掘った。
31	四方公園	—	5,000	各種の花木を植え、築山を造り、「小西湖」という池をほった。日本式の家屋も建てられていた。
注：1番、3番と10番の公園に改善活動が行われた。24番-30番の公園が新たに造られたものである。31番の公園が造られた時間は不詳になっている				

- 1) 荏平路の交差点にある石炭の燃え殻を公園に移動し、低地を埋め立てる。
- 2) 前からあった池がかれないように、深く掘る。
- 3) 公園にたまっている雨水を池に導入する。
- 4) 公園内の道路と堀を修理し、曲線の道路を構築し、座る場所を増やす。
- 5) 入口の道路を改善する。
- 6) 長さ 60m、幅 45mの簡単な運動場を造る。周りは円形の競争路、中は運動、練習の場所として使う。

7) 園内の花や芝生は農林事務所と相談し、本局の設計によって、再び整える。

以上の工事は 1935 年 6 月に竣工したという⁶⁵⁾。これらの整備事項、特に 4 と 5 番の事項から日本統治期と中華民国北洋政府統治期の段階では道路の整備や腰掛などの施設が不十分であったことが分かる。第三公園だけではなく、これは多くの公園に共通する問題点であり、おもに改造工事の中心となっていた。

図 3-8 はこの時期の平面図であり、注意すべきはその運動場である。この時期に運動することが奨励されるようになり、市内に運動場（体育館）と小運動場を造る計画も立てられた。この公園で造られた運動場は「小運動場」にあたる。「施行方案」には、「小運動場は市民の朝晩の運動と児童の遊ぶ場所を提供する。このような小規模な運動場は大体育場のように交通便利の場所に立地しなくてもよいが、必ず空気が新鮮で、車馬が少ない場所に立地すること。（中略）。ここで遊ぶ児童に対する危険も少なくなる。このような環境を得るために、公園と一緒に設置した方がよい」⁶⁶⁾ とある。第三公園に造られた運動場はこの指導思想に完全に合致しているといえる。

海浜公園はドイツ統治期に海水浴場の背景として植えられた森林によって形成

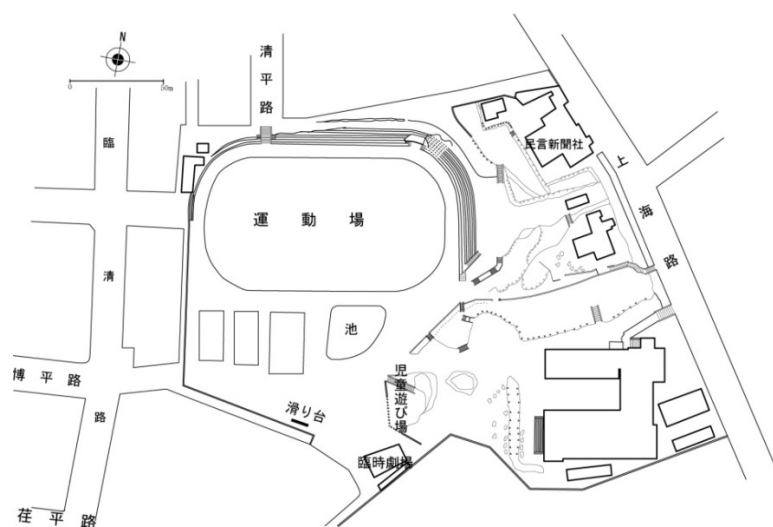


図 3-8 第三公園平面図（青島城市档案馆が所蔵図面より作成）

された公園である。1930年に青島工務局がそこに階段を敷き、あずまやを3つ構築した。そして、当時の市長であった胡若愚が北京から設計者を雇い、公園の入口の牌楼を設計し、その正面には「若愚公園」と書かれていた。同時に公園内に中国古典式の水族館が建設されはじめた。1931年に瀋鴻烈が青島の市長になり、公園を「海浜公園」と改名した(写真3-14)。1932年には水族館も落成した(写真3-15)。同年、水族館の東側に同様に中国風の「産業館」が建設され、1936年に竣工した⁶⁷⁾。このように、海浜公園には中華民族固有の様式の建物が建設されたことによって、中国の文化、景観特徴が現れるようになった。

2-2-2. 公園の建設

24番-30番は南京政府統治期に新築された公園である。新たに公園を構築したといっても、実際はおもに元来の森林景観を利用し、道路を敷き、茶室やトイレなどの施設を構築することが行われた。25番の小青島公園、26番の山海関路公園と27番の太平角公園は元来の森林、特にドイツ統治期に造られた森林が整備され、できたものであった。これらの公園の建設は1930年代に海水浴場が東の太平湾、湛山に拡大され、しかも太平湾の北岸に別荘地域が開拓されたことに促されたと考えられる。一方、これらの公園の建設では森林と公園の転換もみられ、緑地の機能が都市の拡大や地域の用途の変化によって転換されたことも分かる。

森林の整備以外にも、道路、空間、施設などの設計事業が行われた公園がいくつかあった。栈橋公園は栈橋によって東と西の両部分に分けられている。東側は華北洋政府統治期に整備されたので(写真3-16)、南京政府統治期には主に西の部分を中心にし、公園が構築された。1934年に工務局は市長から、栈橋以西の空地を公園に開拓し、トイレなどの施設を改善するという指示を受けた。図3-9は1935年4月に青島市工務局によって作られた設計図である。公園用地は円形、四角形と不規則な形により分割され、その中に芝生が植えられている。芝生の真中と角には低木と黒松が植えられている。このデザインでは、西側と東側の景観の一致性が維持された。具体的な工事と費用は以下のものであった⁶⁸⁾。



写真3-14 牌楼 (国際中国学研究センターホームページより)

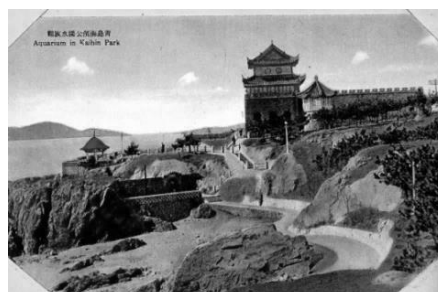


写真3-15 水族館 (『青島・済南絵葉書』⁶⁸⁾より)

一、公園を構築する工事。棧橋以東の公園は狭いため、施設は簡単である。今度は棧橋以西の空地を公園に開拓し、面積は 3,200m²、東公園の 5 倍以上である。護岸の工事費用は約 870 元であり、他の施設の費用と合わせ、合計 1,650 元となった。花廊、手すり、石階段と椅子などの費用は約 2,156 元が必要だ。花木、芝生（農林事務所担当）は約 870 元で、合計 4,684 元だった。

二、トイレの改造工事。前からあったトイレは棧橋にあり、上下水道がなく、臭いが外に出ていた。新しい計画では、トイレは公園に移転することになった。臭いの問題を解決するために、トイレの中には上下水道、通風口と換気扇が設けられた。トイレの形があらわれないように、屋根に音楽亭が構築された。トイレの建設費用は 2419.6 元、音楽亭の建設費は 2,183 元であり、合計 4602.6 元となった。

しかし、設計図の通りすべて実施されることはなかった。設計図によれば、棧橋の入口に牌楼が設けられ、南側には左右対称に記念亭が設けられている。そして、棧橋東側の拡大する部分にも含められ、「花廊」が計画されていることがわかる。残念ながら、この時期の写真と照らし合わせると、この部分が実際には設計どおり実施されなかったことが知られる。注意すべきはこれらの実現されなかった施設に

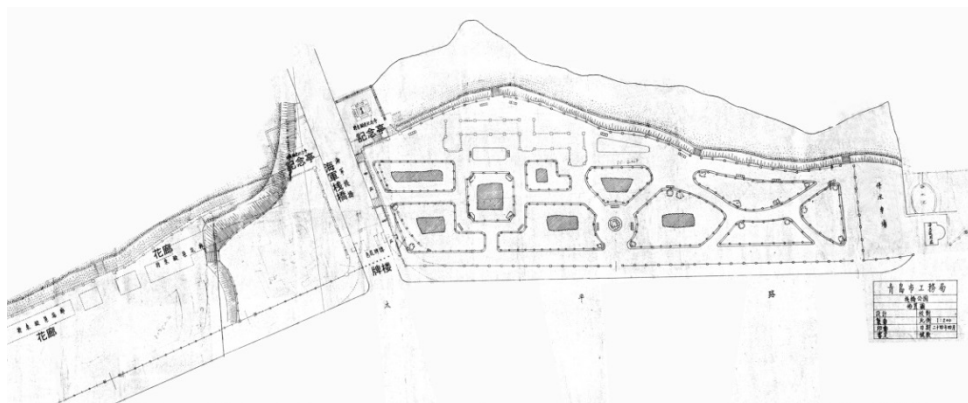


図 3-9 棧橋公園設計図（青島城市建设档案馆所蔵）



写真 3-16 棧橋公園東（青島・済南古葉書）



写真 3-17 回瀾閣

(<http://qd.sohu.com/20130528/n37732114.html>)

対し、1933 年 6 月には栈橋の一番南側に「回瀾閣」という中国式の八角亭が構築されたことである（写真 3-17）。海岸から 440m の場所にあり、中国伝統様式の「回瀾閣」は海の中に建っている焦点となっている。これは栈橋公園の施設として計画されたものではなかったが、公園から海を眺めると「回瀾閣」は一番早く目に入る構築物である。つまり、「回瀾閣」は公園の重要な「借景」の対象となっている。このように、海岸沿いの景観は栈橋公園の「回瀾閣」、海浜公園の牌楼と水族館の構築によって、自国の印を付けられることになった。

南京政府統治期に造られた公園の中で最も注目されるのは、中国の貧民街であった台東鎮と台西鎮に造られた東鎮公園と西鎮公園である。この 2 つの公園は青島が都市として建設されてからの 30 数年間の間で初めて中国人の貧民のために造られた公園である。台東鎮に住んでいる人々に、1934 年に市街の東北にある肥沃な傾斜地を公園用地として、土山を築き、蓮池を掘り、遊覧と憩う場所が作り出された⁷⁰⁾。西鎮公園は西康路、鄆城路、貴州路と城武路に囲まれている場所に立地し、1936 年に建設が始まった。図 3-10 は西鎮公園の設計図である。公園は東、西、南、北の道路にそれぞれ入口が設けられている。入口から中心部まで大通りが設けられ、東西、南北二つの軸線が形成された。南北の軸線により公園は幾何学式と自然式の両部分に分けられている。東側では菱形と三角形は基本要素をとって公園の空間を構成している。北に児童運動場と芝生があり、南に主に花木景觀がある。その真中に「鐘」と書かれており、おそらく植物で造られたものを示していると推測される。

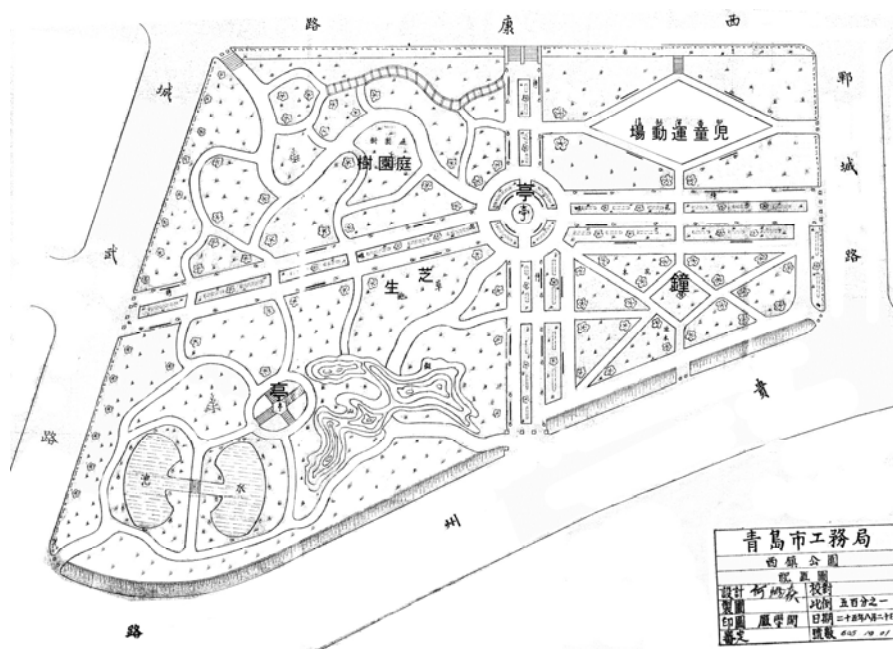


図 3-10 西鎮公園平面図（青島市城市檔案館所蔵）

東側に対し、西側は道路も池も柔らかい形で設計され、中国の伝統的な庭園の空間の特徴が現れていた。空間だけではなく、あずまや、築山と庭園樹も中国の造園要素とみなした方がよいだろうと考えられる。このように、西鎮公園は実際の空間の構成にも、造園要素にも中国風と西洋風が混在し、折衷式の公園として設計されることになった。

2-2-3. 実現されなかった児童運動場

図 3-11 は 1934 年 7 月に棧橋公園の東側に計画された児童運動場である。設計図には、ブランコ、滑り台、シーソーなどの児童が遊ぶ施設が描かれている。この児童運動場は楊林という市民によって提案され、計画されることになった。1934 年に楊林が工務局に手紙を送り、その中に「棧橋公園にあずまやや樹木を増加し、棧橋以東の砂浜に児童運動場を設け、そして、大学路口に工務局が原料を積んでいる場所を公園にすること」を提案している⁷¹⁾。工務局は楊林の提案を受け、上記の児童運動場を設計した。ただし、この方案は実施されなかった。その理由について、工務局は「棧橋以東の窪地は本局が他の場所の余土で埋め立て、棧橋東公園と同じ高さにして、公園の拡張地にするつもりがあるため、運動場にすることはできない」と説明した。そして、大学路口の倉庫も他の用途があるので、公園にするのは難しいという理由が挙げられた。そのかわりに、大学路の東方菜市場の隣の保留地に臨時的に児童公園を造ろうとした。担当者の見積もりによると 707.5 元が必要となり、既に予算を組み、実施に移すところであった⁷²⁾。この件から当時市民たちは都市の公園建設活動に強い関心を持ち、政府も市民の意見を重視していた社会の雰囲気の一部が分かる。

もう一つの児童運動場は海浜公園に設置された。平面図から、運動場は完全に幾何学式で設計されていた（図 3-12）。それは設計者の経験と関わっていると思われる。図面に書かれているように、この運動場の設計者は許守忠であった。彼は中国近代の建築家であり、1929 年に杭州で行われた勸業会の大講堂の設計者である⁷³⁾。のちに青島で聯益建業華行を創立し、河南路の中国実業銀行青島支店と中山路にあ

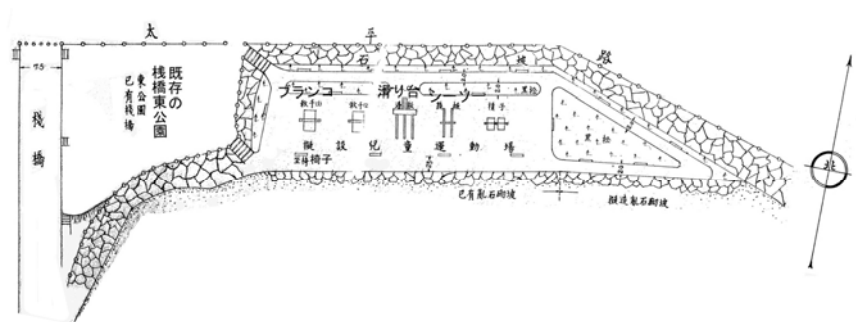


図 3-11 児童公園設計図（青島市城市档案馆所蔵。筆者加筆）

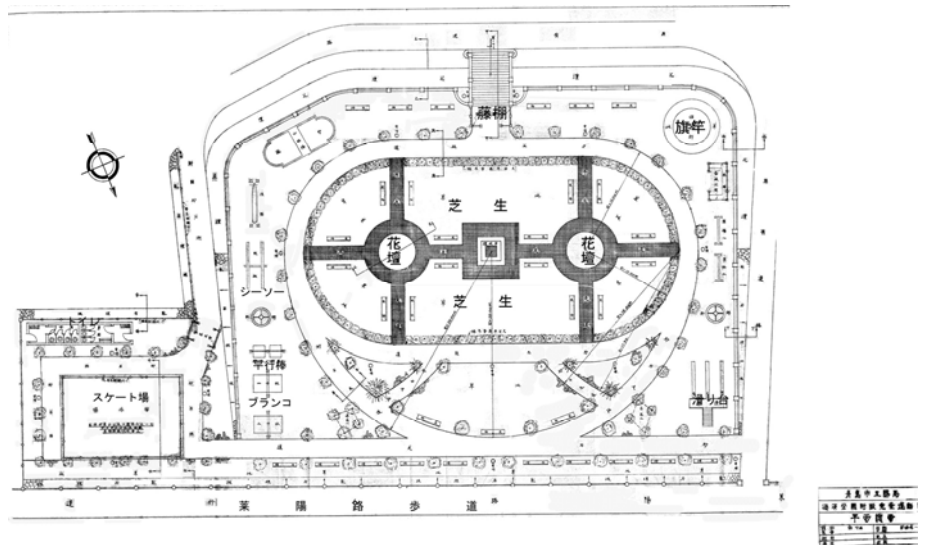


図 3-12 海浜公園附属児童運動場（青島市城市档案馆所蔵。筆者加筆）

る国貨公司（中国産の商品を販売する会社。この会社の成立は沈鴻烈が提出した国産の商品を提唱する方針による産物であった）を設計した。これらの経験から見ると、許守忠は決して公園緑地の専門家ではなかったと判断できる。此の時期のすべての公園の設計者が誰かは分からないが、おそらく多数の公園が建築家の手によって設計されたと推測される。ただし、この児童運動場が実現されなかった理由は不詳である。

第3項 公園の特徴

3-1. 立地と分布

図 3-13 は公園の分布図である。まず、公園の立地に関しては、北洋統治期の総督府西園と南京統治期の東鎮公園を除くと、すべての公園が海岸沿いに立地していた。これは海の景色を借りる意図と海岸がドイツ統治期に造られた森林の緑化基礎を有していたことが主要な理由だったと考えられる。都市の機能によるゾーニングの面から考えると、26 番の山海関路公園はこの時期に新たに開拓された別荘地にあり、29 番の東鎮公園と 30 番の西鎮公園はドイツ時期から建設され、中国人の労働者たちの住宅が集中している場所にあり、いずれも住宅地に立地していた。これが前述した「施行方案」に書かれている「住居地域では実用性は美観に従属する」という原則に合っている。

ドイツと日本統治期とくらべると、植民者から中国人へと支配が回復された青島では、中国人とくに労働者たちの利益が考えられ、公園が初めて台東鎮と台西鎮で造られ、労働者たちの日常生活も豊かにされることになった。これは沈鴻烈の「貧

民に恵みを施す」思想に合っているだけではなく、青島が植民支配から脱却し、外国人ではなく市民に本当に公平な公園を造ろうとした民国政府の意図が読み取れる。このように、ドイツ統治期から形成された公園の不均一な分布もすこし改善されることになった。

3-2. 空間的特徴

中華民国統治期には植物景觀が中心だった既存の公園にトイレや街燈や運動場などの施設が加えられ、利便性が全般に向上させられて、公園は一層現代的になっていった。少し意外なのは、中華民国統治期に造られた公園の空間構成が西洋式を忌避せず、逆に中国の文化、象徴の特徴が見られなかったことである。公園という都市空間はそもそもヨーロッパの国々で生まれ、中国と日本を含む多くの国に様々な形で広がっていった。その時に中国もヨーロッパのような民主的な国を創立する道を模索し、自ら西洋の民主性を表現する公園空間を中国の都市空間に取り入れたと考えられる。おそらく公園は沈鴻烈の「建設を図り、文明を輸入する」思想で示された「文明」に含まれたと推察される。

公園の空間に中国の文化や象徴は見られなかったが、空間より存在感が強く、注

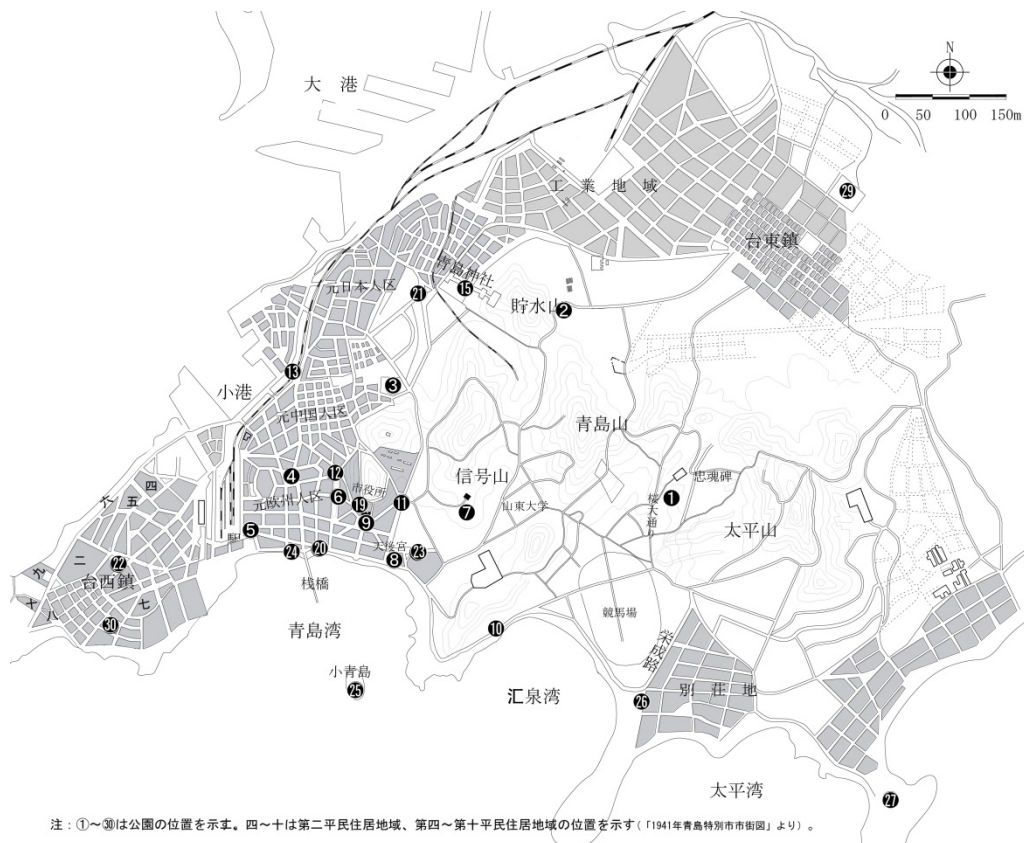


図 3-13 中華民国統治期の公園分布図（筆者作成）

目が集められる中国固有の様式の「回瀾閣」、「牌楼」と「水族館」を構築し、公園の景観に自国の印をつけ、中国の文化を強調することは行われた。現在でも、海岸沿い特に栈橋と「回瀾閣」が青島のシンボルになり、中華民国統治期の影響が強く残されている。

3-3. 樹種の選定

中華民国統治期の『青島農林』によれば、公園に植えられた植物の観賞性がさらに考えられるようになり、種類も徐々に豊かになった。花を観賞できる木はサクラだけではなく、ウメ、モクレン、ムクゲ、サルスベリ、ザクロなどの高木、そして、ユキヤナギ、ユッカ、ヤマブキ、レンギョウ、オウバイなどの低木も植えられた。花を観賞する植物に加え、葉を観賞するイチョウやモミジと実を観賞するカラタチも植えられることになった。驚くべきなのは 1930 年代に公園に植えられた観賞植物の種類が現在の公園に用いられているものと殆ど変わらないことである。

ただし、日本統治期にサクラとクロマツで造られた参道の景観とことなり、中華民国統治期には植物景観で中国の伝統的な造園文化を強調する意図はみられなかった。しかも、ニセアカシア、プラタナス、クロマツ、サクラなどドイツと日本統治期に移植された植物も引き続き青島の公園緑地に植えられた。特にサクラが青島市民に好まれ、1930 年代には中山公園の花見は中国全国で有名だった。これらのことから、支配者や市民たちは植物景観の象徴、文化的意味にあまり注意していなかったことが分かる。ドイツと日本統治期の植物景観と異なり、唯一中国の文化の影響が見られるのは中山公園で造られたボタン園であった。そこには各地から 60-70 種のボタンが収集されたという。ボタンは昔から王室の庭園に多く用いられ、清末に中国の「国花」に指定されたこともあった。ボタン園が造られたことによりのみ中国の植物文化のわずかな残存をみることができる。

第 4 節 第二次日本統治期の公園破壊

第 1 項 都市と公園の計画

1938 年に日本が再び青島を占領した。第二次日本統治期の都市計画案に携わった枢要な人物の一人は折下吉延であった。1937 年の「支那事変」以降、日本が中国の多くの都市を占領することになった。中国大陆での戦線が拡大し占領地域が増えたため、占領地に対する政務・開発事業を統一的に指揮するために、1938 年 12 月 16 日に興亜院を設けた⁷⁴⁾。翌年の 3 月に興亜院華北連絡部青島出張所が設けられ、6 月に青島市の福山路 2 号で「興亜院都市計画事務所」が設立され、その主要な担当者は満鉄の技師折下吉延であったという⁷⁵⁾。折下吉延は日本で有名な造園家と都市計画家であった。関東大震災後、帝都復興局建築部公園課長と任命され、隅

田公園、浜町公園、横浜の山下公園など復興事業の公園緑地の建設を進めた。日本国内の公園建設の事業が終わって、1932 年 7 月に満州国の調査に参加し、大連、長春、ハルピンの都市計画に携わった。1939 年に折下が満鉄の技師として青島に赴任し、1943 年に青島特別市公署地方計画諮詢委員会委員兼幹事となった⁷⁶⁾。終戦まで、折下は 6 年間青島に滞在し、青島の都市計画に大きな影響を与えた。

1941 年には興亜院青島都市計画事務所が「青島特別市地方計画（地方計画と略す）、青島特別市母市計画（母市計画と略す）要綱」を公布した。「地方計画」というのは青島市だけではなく、北側の即墨、膠県と膠州湾の西側の黄島も含む計画が策定されたことを意味している。そのため、元来の青島市の範囲は母市となった。図 3-14

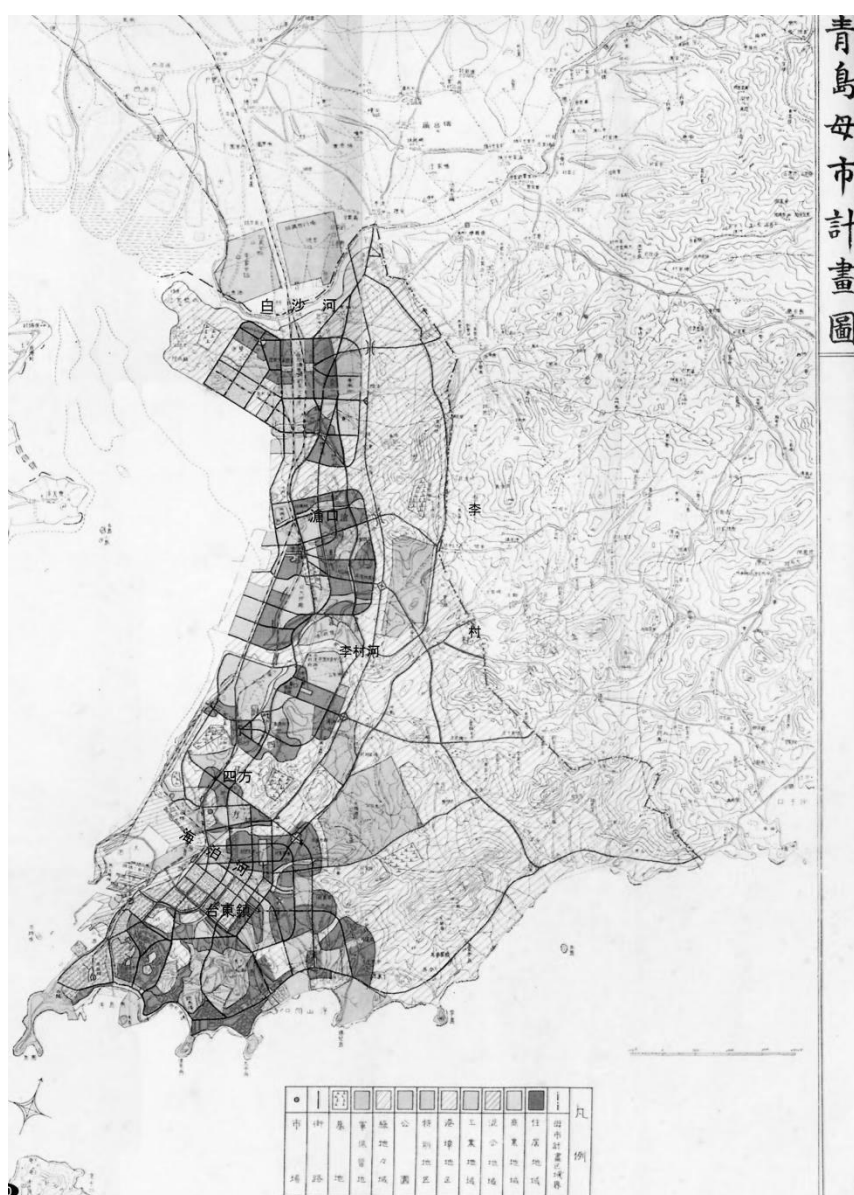


図 3-14 青島市母市計画図（『青島地図通鑑』より）

は「母市計画」の計画図である。計画区域は白沙河以南、棗園村、李村、午山の西側 200km の地域である。都心は海泊河の以北に設け、海泊河以南の青島市街地の一帯を商業と他の文化観光・住居と定め、台東鎮の一帯に商業中心を設置し、滄口の北側から白沙河の埋め立て地には工業地帯を設置した。

都市の外側に緑地帯が設置されているから、この計画は当時に流行っていた地区計画（regional planning）とグリーンベルトの原理の実践であったことが分かる。1924 年、アムステルダムで開かれた国際都市計画会議で大都市圏計画に関する 7 箇条の原則が決められた。その後、日本政府も国内で緑地帯の計画を行ったが、土地所有権の問題でなかなか実現できなかった。青島で土地の問題が日本国内より比較的簡単に解決できるためか、広い緑地帯が計画された。そして、「地方計画綱要」の要領の第一条「青島特別市の地方計画は本市の無秩序のスプロールによる経済上、社会上乃至都市防衛上の心配することの発生を予防し、その前に市域内の土地利用を統制し、その開発に計画をつけ、特別市の合理的発展の先導をなす」はアムステルダムの会議で決議された原則とほぼ一致していることがわかる。この計画が出された重要な原因の一つは当時青島が「大東亜共栄圏」に含まれ、「華北の玄関であり、水、陸、空の交通の要衝にあたり、軍事と華北開発の重要基地」として位置づけられたことにある。地域の中心として、上述の都市過大の防止、グリーンベルトの設置も一層理解しやすくなる。

公園の計画において、「大公園及び運動場は 1200 公畝（12ha）、小公園は 250 公畝（2.5ha）を設置する。川、高速道路と鉄道付近にも緑地を設置する。」と「地方計画要綱」に書かれている。図面によると、行政地域周辺、砲台附近、住居地域、住居地域と工業地域の間には、数多くの面積が広い公園が設置され、場所は 1935 年の計画案と殆ど変わらない。

一方、それまでの都市計画と比べ、最も違うのは此の時期に軍事保留地が広く設けられたことである。とりわけ沿海部と工業地域の近くに多く設置された。これに関しては「地方計画要綱」の第 3 条に「当該計画の時には華北の産業の配分計画に準據し、本地域内にある関連機関、関連産業及び人口の統制を重点とした。そのため、防衛上の考慮を重視した。」と、第 5 条「青島特別市に将来に相当の工業が集積する計画を予想し、工業地域は防空、用水及び他の方面が可能限り、青島母市と膠州附近に立地させる」とある。当時日本国内では 1941 年に改正された「第二次防空法」によって、防空緑地が指定され、東京にも多くの防空緑地が計画された。青島に計画されたこれらの軍事保留地は当時東京と同様に防空緑地として指定された可能性が高いと考えられる。

第2項 公園の破壊

前述したように、戦争のため、この時期の政府には都市建設に力を注ぐ余裕がなく、公園がまったく建設されなかった。それに対し、戦争や防御の需要によって、公園が転用されたり、占用されたりし、むしろ多くの公園が破壊された。図 3-15 は 1944 年に飛行機「報国号」の命名式々場として使われていた栈橋公園の配置図である。軍、神官、献納者などの人が集められていた場所は元来芝生であった。比較的広いオープンスペースを持っていたことが栈橋公園が集会の場所に選ばれた重要な理由だと考えられる。栈橋公園だけではなく、中華民国南京政府統治期に貧民たちのために造られた西鎮公園にも東側に鉄道職員の宿舎が造られ、西側は日本軍の露天倉庫になってしまったといわれている⁷⁷⁾。また、1920 年代に建設された四方公園は四方機車工場の拡張により占用されたという。青島が解放されるまで、無傷だった公園は総督府前の広場とその西側の遊園しかなかったという⁷⁸⁾。

また、各公園において約 10,000kg の各公園の鉄管、棚が取り壊され、花木が約 8,500 本伐採されたという⁷⁹⁾。1947 年に農林事務所によって造られた戦争の損失に関する報告によると、中山公園、海浜公園、栈橋公園と第五公園以外の公園は修復できないほどの被害を受けていた。

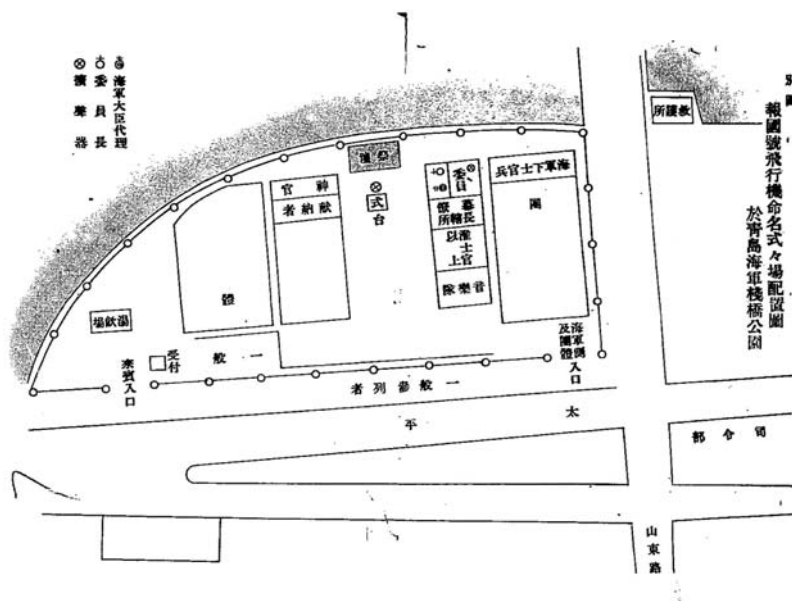


図 3-15 占用された栈橋公園（青島市档案馆所蔵）

第5節 公園の具体例

第1節から第5節まで、各統治期に造られた公園の建設活動や全体の空間、景観特徴を鳥瞰してきた。本節ではドイツ統治期の森林公園を基に形成された中山公園、日本統治期の青島神社を中心し、形成された貯水山公園と中華民国統治期に造られた中国海洋大学の構内をとりあげ、公園の空間、施設、植物景観の形成と変容を詳細に見てみることにする。そして、検討する時期を現在まで延長し、ドイツ統治期（1898-1914）、日本統治期（1914-1922）、中華民国統治期（1922-1938）、第二次日本統治期（1938-1945）、第二次中華民国統治期（1945-1949）、中華人民共和国時期（1949-）の6段階に分けることにする。

第1項 中山公園の形成と変容

中山公園は最も早く形成され、面積が最も大きく、しかも現在でも青島市で唯一の総合公園である。公園の北東に太平山があり、北西には青島山があり、南西部が匯泉湾と隣接し、風景がよい場所に立地している。公園に観賞樹木は約360種類があり、春には花見、秋には菊の展覧会などが行われている。植物景観に加え、動物園、児童遊樂園などの施設も設けられ、毎年200万人の遊覧客を迎えている⁸⁰⁾。

1-1. ドイツ統治期の苗圃

第2章で述べているように1898年にドイツは巨大な植林計画を定め、多量の苗木が必要になった。同年、「自分で育成した苗木が、日本から輸入された値段が高い苗木に取って代わるように、イルチス山の裾野で樹種園と苗圃を造り、小規模の試験を行う」⁸¹⁾という記録が残されている。植物試験場の立地に関しては、「ここは冬の乾燥し、冷たい北西の風が遮られ、海からの潮霧に襲われることもない。しかも、中央に縦横の谷があり、ダムを造ることによって、水を取りやすい」⁸²⁾と『備忘録』に記されている。

このように、イルチス山（後旭山、現太平山）が苗圃と樹種園の良い用地として選ばれ、そこで植林用の種と苗圃以外にも、並木と公共緑化用の苗木の苗圃も造られ⁸³⁾、植物試験場は青島の公園緑地の苗木を提供する重要な基地となった。1901年には植林の仕事量が増えていくと予想され、苗圃の面積は倍に増やされ、毎年300-400haの森林用の苗木を育成することが目標として定められた⁸⁴⁾。そして、苗圃用地を確保するために1901年6月にイルチス山の南麓にあった会前村が買収され、建物などが取り壊されたという⁸⁵⁾。その後、苗圃が何度も拡張され、1905年に苗圃には180万の苗木があり、青島の植林事業以外にも、済南政府や鉄道会社にも売っていた。

前章でも述べたように、ドイツ統治期に様々な樹種が外国から輸入され、ここで試験が行われていた。ここで見てみたいのは公園の植物景觀に非常に重要な役割を果たしていたサクラの輸入経緯である。1901年の『備忘録』「第六章 林業」には「今後使える樹種は日本のある種類のサクラ、アオギリ、ハコヤナギ、ドイツのトゲナシニセアカシアとキリである」と記され⁸⁶⁾、サクラが1901年前に青島に輸入されていたことが知られる。そして、これらの樹種のうちサクラが唯一の花を觀賞できる樹種であった。そのため、サクラが中山公園、青島総督府病院（後陸軍病院、現青島大学附属病院）、総督山に多く植えられることになった。ここにはサクラの種類が明確に記録されていないが、後の日本統治期の『青島二年』⁸⁷⁾に「八重」が陸軍病院に植えられていたという記述があることから、最初は青島に輸入されたサク

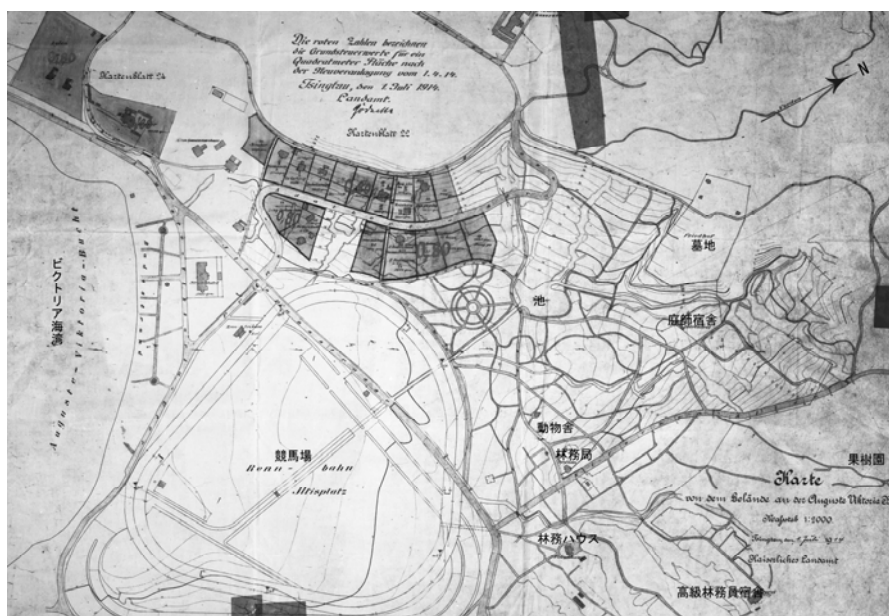


図 3-16 1914 年中山公園の一部（王棟氏の提供による。筆者加筆）



写真 3-18 4 列のサクラ（『青島写真便覧』より）



写真 3-19 2 列のサクラ（『青島写真便覧』より）

ラにはヤエが含まれたことが知られる⁸⁸⁾。

中山公園はサクラの試験が行われた場所であり、約2万本のサクラが植えられたという。植栽の形式が明らかではないが、おそらく多くのサクラは苗圃に植えられていたと考えられる。日本統治期に青島に赴任した泉対信之助という日本人は『青島二年』に「旭公園の桜、わけて桜大路の並木は恐らくは青島に残した施設中の白眉であらう、花の頃にはサクラのトンネルや一目千本の景色が現出する」と記述しており⁸⁹⁾、苗圃の形以外、サクラが並木としても使われていたことが分かる。そして、古写真によると、サクラが4列あるいは2列に植えられ、相当華麗な景観が形成されていた（写真3-18、3-19）。なお、現在では2列しか見られない。

森林や公共緑地用の苗木を養成する以外、青島の果樹を改良するために林務局はドイツ、アメリカ、日本などの国から様々な果樹を輸入した。1904年に青島市付近の山々での植林活動が終わり、苗圃栽培の中心は果樹に移された⁹⁰⁾。表3-5は1905年から青島に輸入された果樹の種類、本数と輸入国を示している。植林樹種とことなり、果樹はおもにアメリカとドイツから輸入された。これは隣の都市「煙台」でカリフォルニアの果物を栽培した経験から学んだこともあったであろうし⁹¹⁾、当時日本の果樹栽培も始まったばかりだったという原因もあったと考えられる。日本統治期の記録によれば、果樹の数はリンゴが16種、ナシが19種、サクランボが8種、桃が5種、スモモが2種、トックリイチゴが5種、ブドウが4種あり、生産された果実は一般に供給したところ好評であったという⁹²⁾。苗圃で繁殖された果樹の苗木は毎年個人にも提供され、青島市の果物が改良されることになった。のち中華民国統治期に描かれた中山公園の平面図によれば、公園の東側はほとんど果樹園として使われ、これらの果樹園はこの植物試験場の重要な構成要素となっていたこ

表3-5 青島に輸入された主要な果樹（『備忘録』により作成）

樹種	1905-1906（本数及国）	1906-1907	1907-1908	1908-1909
リンゴ	224（ド）	—	150（ア）	400（ア）
ナシ	640（ア）	80（ア）	50（ア）&400本の台木（二）	
スモモ	62（ド）	80（ア）	—	200（ア）
サクランボ	102（ア）	20（ア）	100（ド）&326（ア）	700（ド）&500（ア）
トックリイチゴ	30（ア）	—	1000（ア）	1000（ド）&1500（ア）
ブドウ	—	290（ア）&1000本の台木（二）	1000（ア）	—
モモ	175（サ）	—	—	—
アンズ	38（ア）	—	—	—
スグリ	395	—	—	—
カンラン	50（イ）	—	—	—

注：ドはドイツ、二は日本、アはアメリカ、イはイタリア、サは山東省である。

とが分かる（図 3-16）。現在でも公園にナシ園と桃園があり、ドイツ統治期の影響が見られる。

果樹に加え、ヨーロッパの野菜や観賞植物も公園で栽培されていた。のちの日本統治期の史料と中華民国統治期の図面によれば、公園の南東部に温室があり、それはおそらく野菜と観賞植物を栽培するために造られたものと推測される。植林樹種、果樹、野菜などの試験が行われる一方、1900 年にはドイツ総督府がイルチス山を買収し、周りに森林を造った。樹木が徐々に大きくなるとともに、野生動物が集まり、狩猟区域が設けられた。1907 年にイルチス山に設けられた狩猟地域の数が 8 つに及んだ¹⁷⁾。野生動物に加え、公園の南西部に豹や熊や鹿が囲い込まれ、小さい動物園が形成された。このように、森林公園は徐々に苗圃と狩猟地域を中心とする公園になった（図 3-16）。

図 3-16 は 1914 年の 1m²あたりの土地の価格の説明図であり、公園の南西部と東側の一部分が含まれている。図によれば、ドイツ統治期には、園内は林務に関するオフィスや宿舎などの施設を中心とし、それ以外の娯楽施設はほとんど見られない。西側の道路はほぼできていたが、道路網は秩序立ておらず、機能は林間の生産用だったと推定される。また、競馬場と公園をつなげる道路が破線で描かれており、未成道路であったことが知られる。東側が全て含まれていないが、西側と比べると、道路の密度は低かった。のちの中華民国統治期の平面図とあわせてみると、東側に谷が多く、果樹園の用地と溜池として使われていたことが分かる。

1-2. 公園への転換

1914 年に青島が日本に占領され、公園は「旭公園」と命名された。ドイツ統治期に苗圃と狩猟地域を中心とする森林公園に対し、本多静六によって路線、施設、植物景観の改良案が提出された。まず、公園の路線に関し、本多は次のように述べている。

元来苗木養成ノ為メニ設ケタル苗圃其ノ儘公園的ニ利用セルモノナルヲ以テ公園トシテ路線ノ按配其ノ他植物ノ選定植栽ノ方法等ニ缺点ナカラス故ニ先ツ現在ノ大ナル道路ヲ利用シテ大回遊道路ヲ造リ其ノ回遊道路ヲ大綱トシテ之ニ各種ノ設備ヲ連絡セシムルノ要アリ。（中略）。現在の各小道路ハ大体ニ於テ何レモ歩道ノ用ニ供スヘシ。

このようになるべく公園に既存していた道路を利用し、回遊道路が計画された。道路だけではなく公園として利用するためには観賞、遊行の場所を増やす必要があった。それに関しては本多静六が次のように述べている。

園ノ南西隅ニ存スル大池ハ之ヲ浚渫シテ風車井ノ餘水ヲ入レ漫々タル大湖ニナス必要アリ由来本公園ノ缺点ハ水ノ不足ナルニアレハ出来ル丈ケ水ヲ生カシテ用ヒサル可カラス池中ノ蓬萊島ハ元ト海中ノ島ニ象リタルモノナレハ岩組ヲナシ上ニまつ又ハびやくしん

杯ヲ植ウルコト必要ナリ。(中略)。池辺ニハ歩道ヲ設ケ樹陰ニ腰掛ヲ置キ其ノ堤防ノ一
二箇所ニハ手洗段ヲ設ケ池中ニハ鯉鯽鯉ヲ放ツヲ可トス而シテ本池ハ冬期以テ氷滑場ノ
用ニ供シ得ヘシ。⁹³⁾

こうして、水の問題だけではなく、公園の面白さも増加し、散歩、冬のスケート場
として使うこともでき、公園の機能が豊富になった。また、植物景観を含めて、他
の施設に関しては次のように建言されている。

現在ノ植物ヲ利用シ、各適当ナル区域ニ夫レ夫レ特徴ヲ持タシムヘシ即チ例ヘハ

一、さくら区、もみじ区、つつじ区、あやめ区、又ハはぎ区、ぎよりう区、山吹区、
れんぎょう区、もくれん区、花梅、花桃、海棠区等ノ花卉類区ヲ設ケ其局部ニハ特ニ其
植物ヲ多数集ムベキナリ

二、果樹園、草花苑等モ前ニ同シ

三、子供ノ遊戯場ヲ設クルコト

四、鶴、虎、鹿、山羊、雉鳥、山鳥等ノ動物木屋ヲ復旧シ、夫々適当ノ位置ニ配置ス
ルコト

このように、元来の苗圃にあった多様な植物を整備し、高木、低木、草花などそ
れぞれの特徴を持ち、季節の変化による多彩な景観を呈する植物景観が計画された。
施設や植物景観の改良にともない、苗圃を中心とした森林公園は市民の遊行や運動
などに使いやすい公園になった。

一方、以上の改善のほか公園における最も大きい変化は公園の北東に忠魂碑が構
築されたことである。忠魂碑は 1914 年から 1915 年の戦役で戦死した 1,004 名の
陸軍、海軍将卒を記念するために建てられたものである。碑体は全部花崗石よりな
り、高さは地上 26m、1916 年 3 月に起工して同年の 11 月に竣工した⁹⁴⁾。忠魂碑
は山の中腹に立地し、山の高さを借り、公園と忠の海を望むことができる。そして、
青島神社と同様に、忠魂碑の前にも参道が造られ、参道の両側にサクラとクロマツ
が植えられていた。毎年ここで行われた参拝も青島神社の恒例の儀式の一部となっ
ていた。1922 年には青島が中華民国政府によって回復されたが、忠魂碑は保留地
として、日本居留民団体に管理されていた。

図 3-17 は 1924 年の中山公園の平面図である。その時には青島が回復されたばかり
だったので、主要な道路が一本計画されているが、まだ建設がなにも行われてい
なかった。そのため、公園の道路や施設はほぼ日本統治期のままであったと判断さ
れる。この図面によれば、西側の道路がドイツ統治期と比べ、2 カ所しか変わって
いなかったことが分かる。1 カ所は競馬場と公園をつなげる道路であり、もう 1 カ
所は池の北東にある路地であった。前者はドイツ統治期に未完成の道路であり、後
者は本多静六の提案によって追加された散歩の道路であった。池の中にも計画通り
に島が造られた。

東側の道路が依然として密度が低いが、本多の提案通り、外側が環状になっている。公園の施設の面では、北東に建てられた忠魂碑が東側において最も大きい変化だった。忠魂碑にドイツ統治期から植えられ、日本統治期に花見活動が盛んになったサクラが加えられ、公園は日本式の景観特徴にあふれていた。南側には植物見本園と樹木見本園が設けられている。これもおそらく本多静六の計画案に従い、造られたものだと考えられる。こうして、日本統治期には園内の既存の施設がうまく利用され、ここは苗圃から転じて使いやすい公園となった。

1-3. 公園の充実

1922年に青島の支配が中華民国北洋政府に回復され、公園は「第一公園」と改名された。ただし、第2項に述べているようにこの時期に都市の建設はあまり進まなかったため、中山公園でも実施されたのは小西湖と清明植樹地の開拓しかなかった。図3-17では公園の西側に主要道路1本が計画されているが、図3-18によると、道路が計画された通り建設されなかったことがわかる。そのため、ここでは中華民国南京政府統治期を中心とし、中山公園の変容を検討する。

1929年に青島が中華民国南京政府に接収され、5月に公園は「中山公園」と改名

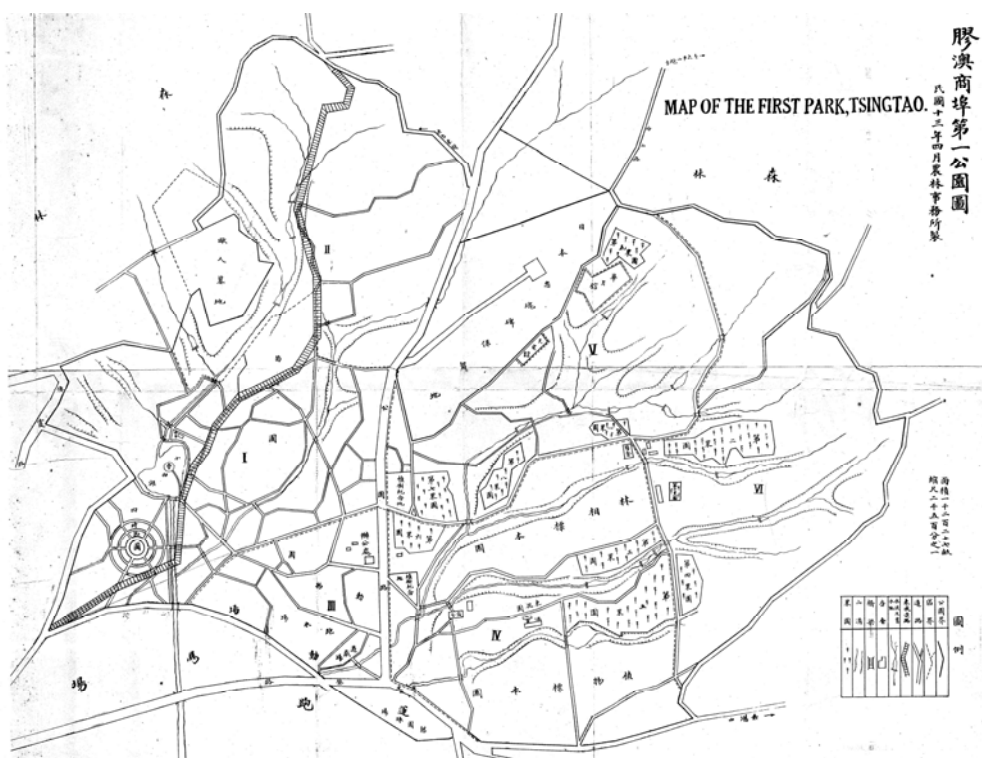


図3-17 1924年中山公園の一部（青島城市建设档案馆所蔵）

された。公園の名称と対応し、同年には公園で総理記念林が開拓され、1929 年と 1931 年にクロマツ、イチョウ、アメリカポプラ、アオギリ、タケなど多くの樹木が植えられた。

記念林を造るのと同時に公園の実測と計画も行われた。図 3-18 は実測図の一部である。図面にまだ「第一公園」と書かれていることから、この図面は公園が「中山公園」に改名される前に作成されたと判断される。そして、図面に実線と破線の両方が描かれ、実測した上で公園に対する計画も行われたと考えられる。幹線道路の北側にある苗圃に規則的な格子状の道路が計画され、苗圃と隣接する部分には小さい円形広場と放射状の道路が計画されており、元来秩序立てられていなかった道路網が改善されることになった。幹線道路の南側にあった動物園に細かい道路が加えられ、観光客にも使いやすくなったと考えられる。道路以外では、動物園の隣に温室、幹線道路の東側に庭園と金魚池などの施設も計画された。具体的な工事は以下のものであった。

一、新しい様式の庭園を開拓した。1933 年に幹線道路の北側で西洋式の庭園を 1 カ所開拓した。珍しい花木を植え、景観の美観度を増やした。そして、道路の南側に花圃が増設された。また、観光客の休憩のために、あずまやが構築された。

二、花廊と花棚を構築した。海棠路の北側に前から花圃があり、1933 年に新たに整備し、新しい様式の花廊を構築し、飾り付けた。冬には花廊の長さを増加し、攀縁植物を植栽し、公園の面白さを増した。

三、商店を誘致した。中山公園は広く、市区に遠いから、観光客の利便や公園の繁栄のため、商店を設けることは必要だった。幹線道路の東端及び桜通りにそれぞれ商人によって商店を設けた。溜池を構築した。海棠路の南側の庭園の趣致を増し、遊人が観賞するため、1933 年に溜池 1 カ所を構築し、清水を貯め、魚と藻を飼育した⁹⁵⁾。

これらの工事と公園の平面図や古写真を照らし合わせてみると、新たに構築された庭園、施設の位置と特徴が分かる。まず、主要な道路と施設の改善は主に公園の西側で行われたことが分かる。そして、公園の面白さを増すために、西洋式の庭園、噴水、花廊と花棚が構築された。西洋式の庭園、温室前の庭園（写真 3-20）と噴水（写真 3-22）が造られたことから、中山公園を改善する際、自国の文化を強調するために、わざわざ西洋式で造ることを避けることはなかったことが分かる。むしろ、公園の景観の豊富さと面白さを増やすために、中国政府が自ら西洋式の公園景観を造り出した。さらに、普通の観光客の利便性がよく考えられ、商店が誘致され、東西と南北の 2 つの主要道路の交差点に立地させていた。このように遊楽、商業施設が充実するようになった。

図 3-19 は 1930 年代の中山公園の平面図である。図 3-18 と比べると、計画案はほぼ実施されたことが分かる。そして、計画案に含まれていない東側にもボタン園が造られ、既存の第七果樹園を替えた。ボタン園には様々な貴重品種が収集され、種類は 60-70 種に達したという⁹⁸⁾。ボタンは中国の文化で「富貴」（財産と地位）の象徴であり、昔から庭園、特に皇帝や官僚の庭園によく使われていた。ボタンが公園に植えられたのは中国の伝統的な庭園文化の残存とみることができる。



写真 3-20 温室（『青島農林』⁹⁶⁾ より）



写真 3-21 噴水（『青島』⁹⁷⁾ より）

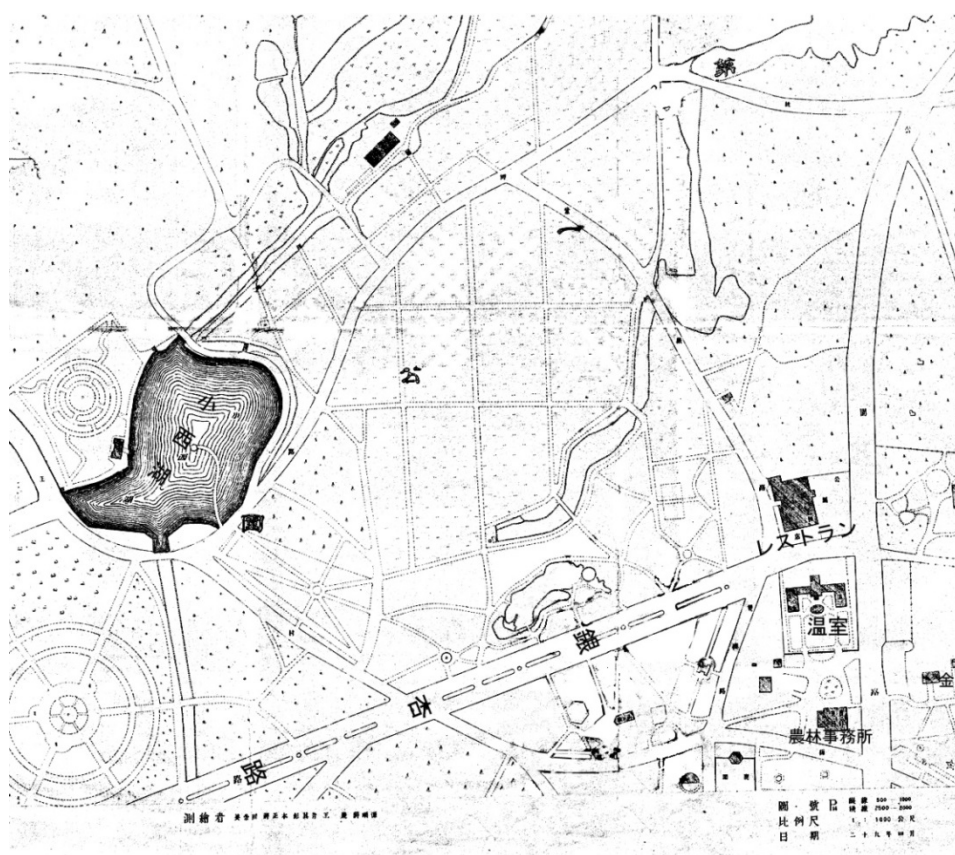


図 3-18 1929 年の中山公園の一部（青島城市建设档案馆所蔵）

公園の施設が改善され、遊人が増えていったことは当然だが、すこし意外なのはこの時期に行われた花見である。日本人の花見の影響を受けたのか、中華民国統治期には中国人の間でも花見が人気になった。そして、青島の観光業を発展させ、膠奥鉄道の乗客数を増やすために、1924 年から中華民国北洋政府は青島に観サクラに行く乗客へ安い電車のチケットを販売する政策を実行し始めたという⁹⁹⁾。このような政策により、中山公園の花見は大きな催しとなっていた。開花時には全国の観光客が青島に集まり、非常に賑やかだった。

1920、1930 年代には中国で有名な作家の多くが青島で教職に就き、青島のサクラがよく文学作品に見られるようになった。例えば、顧随の詩「青島の第一公園で観桜」、臧克家の「青島の花見」、老舍の作品集『桜海集』などを此の時期の作品として挙げることができる。このため、1930 年代から中山公園で創出されたサクラ景観は青島市の「十大景勝」となり、毎年サクラの祭りが行われ、青島の文化の一部となった。以上のように中華民国統治期に至り、中山公園は西洋、日本、中国の要素と形式が混在し、遊行を中心とし、生産の機能も兼ねている公園になった。



図 3-19 1930 年代の中山公園（青島城市建设档案馆の提供地図により筆者が作成）

1-4. 公園の破壊

1938年から1945年の間には中山公園も大きく破壊された。1947年の青島農林事務所の報告によると、戦時中に中山公園に収集されたボタンが全部日本人によって伐採されたという。そして、温室で栽培されていた145種類の盆栽が2500鉢損失し、種類も123に減少した。花木以外にも他の公園と同様に鉄管を持つ施設が取り壊された。

1945年に日本が敗戦し、青島はまた中華民国政府に回復されたが、国内戦争があったため、公園の建設もあまり進まなかった。混乱の中で、忠魂碑は一度「忠烈碑」に替えられ、のち青島神社と同様に取り壊された。

1-5. 公園の回復

1949年に中華人民共和国が成立し、その後需要の変化によって、中山公園で様々な工事が行われた。表3-6は1949年以降に実施された工事を示している。この中で公園の空間に最も大きい変化をもたらしたのは動物園の移動である。動物園はドイツ統治期から形成されたものであり、公園で最も長い歴史を持つ施設の一つであった。1970年代に文化大革命の影響を受け、動物園の管理が混乱に陥っていた。そのため、1976年に公園とは独立する動物園を構築する計画がたてられ、中山公園の北側に面積29.9haの動物園が造られ、1977年に青島市城市建设局に認められ、「青島市動物園」と命名された¹⁰⁰⁾。

図3-20は青島市中山公園の平面図である。公園の歴史・文化を強調するためにドイツ統治期に取り壊された会前村の遺跡の位置が記され、孫文の彫刻や孫文蓮が植えられている池も造り出された。そして、興味深いのは破壊されたボタン園の北側に新しい牡丹亭が構築されたことである。それは前から存在していた牡丹園を記念するためか、自国の文化を強調するために全く無関係に作ったのか不明である。

表3-6 1949年以降行われた工事（『青島市志』（園林緑化志）により作成）

1949年	動物園が修復され、猿舎2カ所が増築され、鹿舎と豹舎はそれぞれ1カ所が新築された。
1954年	シャクヤク園、モクラン園、コウシンバラ園等の植物園が建築された。
1956年	動物園に熊、狼、猿の数が増やされた。
1957年	元来のコウシンバラ園に対する改造が行われ、2,960m ² に拡張した。
1965年	面積10,400m ² の人工湖が造られたのと同時に、果樹園の附近にも3,300m ² の貯水池が構築された。
1970年	南西の入口が廃棄され、小西湖の南側に新しい入口が構築された。
1972年	南門が改築され、同年に面積3,400m ² の竹園が造られた。
1974年	公園の南側の入口近くに大規模な噴水が造られた。
1977年	桜花路の東側に面積500m ² の現代スタイルの茶室が造られた。
1986年	花木と芸術品を展示するために、面積1,500m ² の温室が建築された。
1987年	児童遊楽園が舗装され、滑り台、ゴーカート等の施設が設けられていた。
1988-1990年	元来の動物園が取り壊され、花木の展示区域が形成され、児童遊楽園も拡大された。

さらに大規模な噴水（写真 3-22）や児童遊園地（写真 3-23）等の施設の構築によって、公園に現代的な性格が与えられることになった。一方、公園の大通りである「桜花路」は殆ど変わらず、花見も相変わらず青島市民の好むところであり、公園東側の桃園にもドイツ統治期の苗圃の面影が見られる。

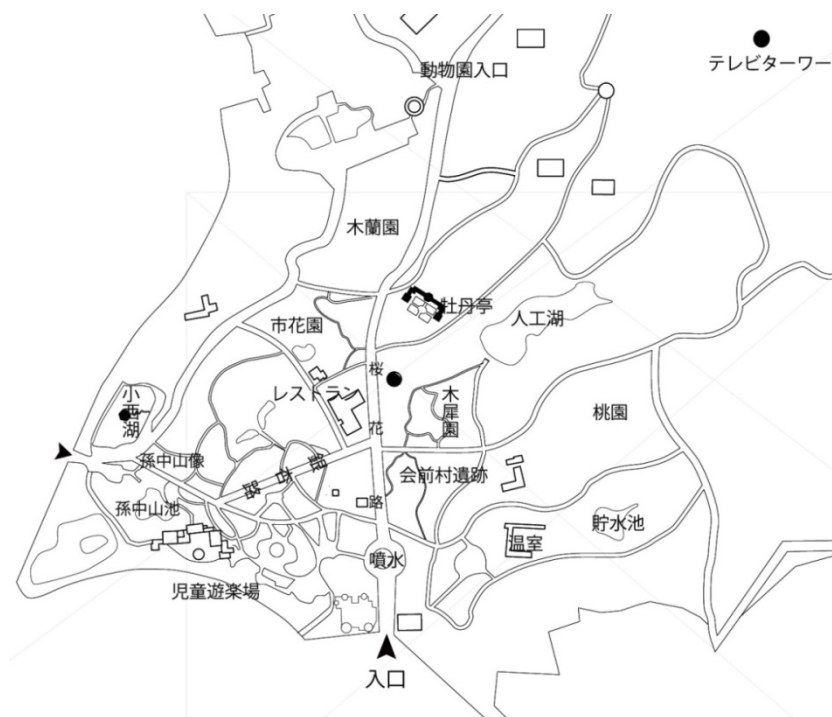


図 3-20 現中山公園平面図（公園案内図と航空写真より筆者作成）



写真 3-22 入口の噴水（筆者撮影）



写真 3-23 遊園地（筆者撮影）

第2項 貯水山公園の形成と変容

2-1. 貯水池と森林緑地としての役割

ドイツが青島を占領した後、都市の飲用水の問題を解決することが急務になった。各地で井戸を掘ることに加え、山中の谷に貯水池を造る計画も立てられた。1899年にモルトケ山（後若鶴山、現貯水山）の南東に延びていた谷に貯水池を造り、水道で市街地に水を提供する計画が造られた¹⁰¹⁾。このように、貯水山はまず飲用水を供する役割が与えられ、現在の山の名称の由来となった。

1900年にはドイツ総督府が第一期植林する用地としてイルチス山（現太平山）、ビスマルク山（現青島山）、モルトケ山（現貯水山）を購入した¹⁰²⁾。日本統治期に著された本多静六の「青島森林ノ将来」「青島神社」には貯水山山頂にある森林の状況を次のように描写している。

社殿ノ背部ニ当ル極メテ森厳幽鬱ヲ要スル部分ガ禿地及ビ生長不良ナルあかまつ林ナル事ハ頗ル遺憾ノ次第ニシテ之ヲ改良スルノ要アリ。

この記述によれば、貯水山の山頂に植えられたアカマツ林の生長状況がよくなったことが分かる。1906年には、軍事上の理由により、ドイツ膠奥地区砲兵管理部門は小鮑島山間の窪地（現貯水山の南）に移された¹⁰³⁾。これに関しては、1906-1907年の『備忘録』「第六章 建築業」「小鮑島谷地砲兵倉庫施設」に「小鮑島の谷地にビルが一棟、庫が二ヶ所、銃器工場及び附属施設が建設された」と記されている¹⁰⁴⁾。弾薬庫と大港を連結する鉄道も敷かれていた。建物と鉄道の工事爆破によって生じた石材は谷のダムと貯水池の建設に使用された。また、周辺には一年生トゲナシニセアカシア 26,400 株、二年生クロマツ 78,000 株及び数万株の広葉樹とサクラなど多くの種類の日本の観賞樹木が植えられた¹⁰³⁾。山の北東には兵営が設けられ、兵士が休憩、遊行するために公園が構築されたという。ただし、公園の名称は不詳であり、市民に「兵営公園」と呼ばれた。これは日本統治期の若鶴公園の前身であった。

このようにドイツ統治期には貯水山は貯水と公園の両方の機能をもっていた。ただし、ドイツ統治期には公園制度自体が未整備であり、公園は都市計画の中に位置づけられていなかった。

2-2. 青島神社の形成と景観特徴

2-2-1. 青島神社の創建

前述のように、日本が青島を占領し、1915年に青島市街に対する工事計画を編成した。青島神社は重要な公共施設であり、工事計画の第一期工事に含まれていた。神社が新市街と隣接し、若鶴山の西腹に立地していた（図3-21）。1919年の『神社協会雑誌』「各地通信欄」には青島神社社務所の通信を掲載しており、青島神社の

創立の経緯が次のように記述されている¹⁰⁵⁾。

大正三年十一月七日皇軍の青島を占領するや、青島守備軍司令官神尾大将、浄法寺参謀長、吉村軍政委員長などの間に於きて当地在住邦人の国家的中心と仰ぐべき一神社創立の議起り専ら調査準備を急ぎ、将来何時にても直に官弊大社と仰ぎ得べき程度の規模となさむとの方針の許に、建築設計は技師加護谷裕太郎氏主としてそれを担当することとなり、六年一月末建築設計完成す。

これによれば、日本の「国家的中心」、象徴的な施設として、青島神社の創立の議が起こり、調査の準備は青島が占領されたのち早いうちに始まったことが知られる。神社境内には本社青島神社とは別に、摂社金刀比羅神社、摂社稲荷神社も建て

表 3-7 計画と実現された施設の対照

計画された施設 ^{*1}			実現された施設 ^{*2}
建物	様式	建坪	
本殿	流れ造	六合	○
祝詞舎	切妻	六坪	?
中門	二タ軒切妻造	三坪	○
塀		長延四十五間	○
塀門（三ヶ所）	切妻造	柱真八尺	○
神饌所	入母屋造	七坪五合	○
神庫	校倉	八坪七合五勺	○
拝殿	入母屋造	十九坪五合	○
二の鳥居	神明造	柱真十五尺	○
玉垣	木造二タ越屋根	長延百貳十七間五分	○
玉垣門	二タ越屋根	柱真六尺一寸	○
金刀比羅神社	春日造檜皮葺	一坪六合七勺	○
同社玉垣	木造二タ越屋根	長延十九間	○
同社玉垣門	二タ越屋根	柱真六尺	○
手水舎	瓦葺切妻造	一坪七合五勺	○
守衛詰所	瓦葺入母屋造	貳坪貳拾貳勺余	○
社務所及連続建物	入母屋造	二十八坪九分五厘五	○
車寄	唐破風造り瓦葺き	三坪三分八厘	?
宿直室及廊下	瓦葺入母屋造	十坪	?
雑庫	切妻造瓦葺	七坪五合	?
洗面所及厠	切妻造瓦葺	二坪三分貳厘	○
稲荷神社	春日造屋根檜皮葺		○
同上鳥居	神明造	柱真九尺	○
同玉垣		長延六間五分	○
石柵		長延八拾二間	○
一の鳥居	神明造	柱真十八尺	○
社号標	木柱土台石垣		○
制札	土台石垣		○
下馬標	石造		○

^{*1}『欧受大日記』「神社創立ニ関スル件申請」¹⁰⁶⁾により作成、^{*2}『青島神社図絵』と青島神社の古写真で確認された。

られた。表 3-7 は神社に計画された施設を示している。計画がたてられてから五年後の 1919 年 11 月には本社青島神社は竣工し、鎮座の祭儀が行われた。神社創立事業に関する費用は総て臨時軍政費より支出し、概略銀十二万圓になったが、その後民営に移された¹⁰⁷⁾。1932 年の『神社協会雑誌』「青島神社及忠魂碑の近況」には、「六月十四日青島稻荷神社地鎮祭執行、十月四日青島稻荷神社上棟祭執行、十一月十四日鎮重祭執行」と稻荷神社の創立過程が記録されている¹⁰⁸⁾。

本社青島神社の中には天照大神、明治天皇と国魂大神が奉祀されていた¹⁰⁹⁾。創建時の神社の宮司は遠山正雄で、春と秋の例祭、歳旦祭、元始祭、成婚奉告祭、紀元節祭、明治天皇祭などが行われていた¹¹⁰⁾。「春と秋の例祭になると、青島全市から小学生（高学年）、中学生、女学生が教師に引きつけられて何百人とあつまる。青島日本中学校の四年生と五年生、合計約二百人ほどは、三十年式の銃を肩にし、銃剣をさげ、ゲートルを巻いて、集団参加する。神社は宗教的というより軍隊的である」と戦争の時に青島に住んでいたある中国人 S 先生の言説が記録されている¹¹¹⁾。しかも、青島市だけではなく、他の都市、満州国や日本国内の学校の見学団を多く迎え入れていた。例えば、「昭和二年八月二十六日大谷大学鮮満北支那見学団、十月二十日埼玉県教育視察団と満鉄教員北支那見学団が青島神社を参拝した」と記されている¹¹²⁾。青島神社の影響力が強かったことがうかがえる。

一般の日本人に対しては、神社が結婚やお産、病氣平復祈願等の信仰にも応えて



図 3-21 神社の立地（1919 年の市街地図より作成）

いたし、後述のように満開の桜が民衆に歓喜をもたらした。

2-2-2. 青島神社の特徴

まず、青島神社は日本人関係の施設が集まっていた場所に立地していた。参道のすぐ南側に高等女学校があり、女学校の「成績品」（課題作品か）は神社の繪馬殿に陳列されたこともある⁸⁾。前述のとおり、1899年からドイツ総督府がモルトケ山にも植林していたため、日本が青島を占領した時には森林は相当成長していたと推定される。森林は日本の神社に不可欠な要素であると考えられるから、これは若鶴山が選定されたもう一つの理由であると考ええる。

神社の入り口は若鶴二丁目（現遼寧路）に面する西側にあった。参道は西から東に伸び、拝殿、本殿も西側に正面が向けられ、日本の多くの神社が南側を正面としているのとは大きく異なっている。だが、ソウルにある朝鮮神宮と台北にある台湾神社の配置図¹¹³⁾を合わせてみると、植民地の神社の入り口が設置される際には一定のルールがあったと考えられる。ソウルは日本の北西部にあり、朝鮮神宮の入り口も北西部に設けられた。台北は日本の南西部にあり、台湾神社の入り口も南西部に設けられた。青島の緯度（北緯 36.06）は東京（北緯 35.41）とほぼ同じであり、東京の西に位置している（図 3-21）。そして、神社の入口も西側に設けられていた。この三つの大規模な神社の入り口の方角を合わせて考えると、おそらく日本人は自国への求心的な地理認識を有し、日本の方向に向って神社に参拝するために、神社の入り口をそれぞれの方位に設けたのではないかと推測される。

神社の入り口から西へ真直に伸びている道路は「宮前町」（のち神社町、現包头路）と名付けられた。道路の名前と位置を考えると、宮前町の中心の街路は青島神社の参道として計画された可能性が高い。1948年の雑誌 LIFE に掲載された写真には神社町の南側にある店の看板に「CAFÉ」と書かれている。写真の説明文として「American named bars and restaurants lining the street（米国人がこの道に沿うバーやレストランに名前を付けた）」という記述がある。おそらく日本統治期には既に宮前町を中心として、コーヒーショップ、レストランが多く立ち並ぶ、にぎやかな門前町ができていたと推測される。

次いで、全体の構成については「神社は上下の二段となす。上段は二千七百坪、下段は一千六百坪、両者と連絡する花崗石の階段は幅員八間、百二十段である。建造物は本殿、中門、瑞垣、拝殿、玉垣、仮神饌所、仮倉庫、神庫、第二鳥居、仮社務所、守衛社、第一鳥居、手水社、社号標などがあつた」とある。第一鳥居から、本殿背後までまっすぐな軸線に貫かれており、これに沿って上記の施設が左右に並べられていた。軸線の景観は山の高さを利用し、神社の秩序、礼儀、尊厳の意味を強調した。図 3-22 は青島神社の復原図である。「青島神社創立ニ関スル件申請」に記載された計画段階のものと比べると、おおむね実際に建設されていたことが分かる。

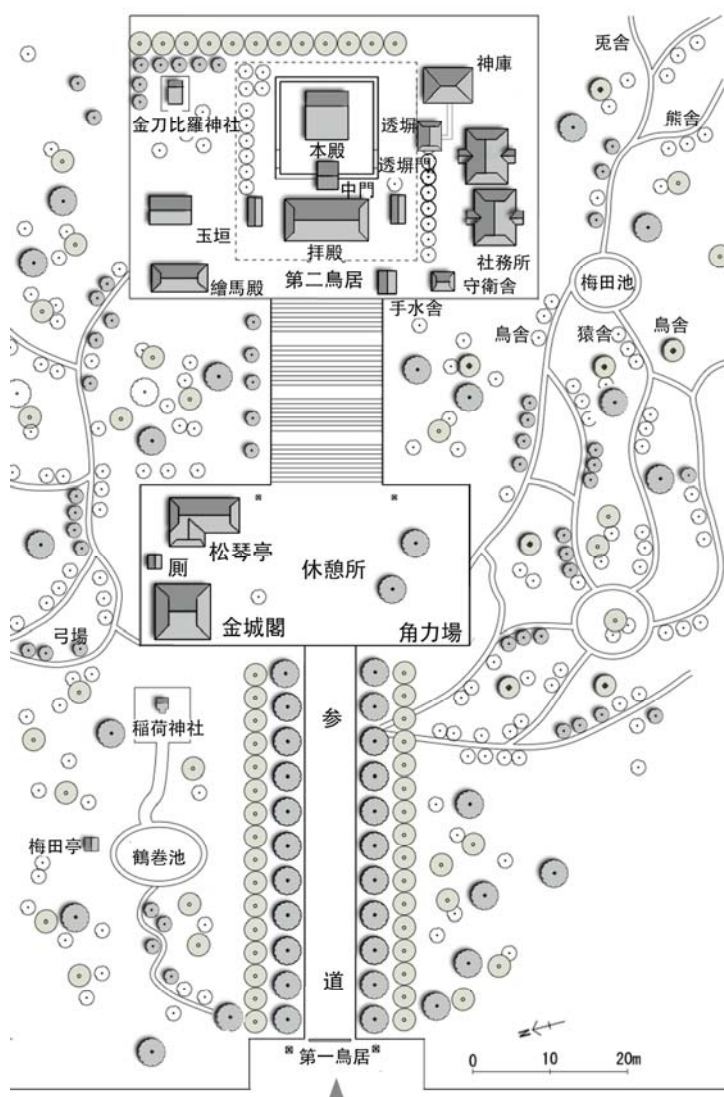


図 3-22 青島神社の配置復原図

(『青島神社図絵』¹¹⁴⁾ と「青島神社創立ニ関スル件申請」と古写真により作成)



写真 3-24 青島神社 (『青島写真帖』より)



写真 3-25 包頭路と神社 (LIFE 雑誌写真档案から)

日本は神社境内に自国の象徴とする桜を大規模に植えた。特に注目すべきは、参道の両側に桜並木が対称に配置されていたことである（写真 3-24）。それに加え 1924 年 3 月には境内の女学校上方一帯の境内林 6,000 余坪が開拓され、全て桜樹が植えられた。『神社協会雑誌』には「神苑植込桜樹高さ一丈内外のもの二百十一本及高さ五尺以内の物（三年生、五年生）三千七百十七本植込みを了せしが、大木二百余本の方は悉く開花参道並木の桜と爛漫を競う。満開の前後に亘る一旬間は、団楽の家族、各種団体、同家族会、各町内運動会等始め日本在住者の観桜催しは悉く境内に集まりて甚盛なり」と桜満開の賑やかな情景が記録されている¹¹⁵⁾。桜だけではなく、『青島神社図絵』によると、マツ、ヒノキ、ウメ等多くの種類の樹木が配置されており、季節により変化する豊かな植物景観が形成されたと推測される。

また、境内には日本の伝統的な武術や遊興のための施設が数多く建設された。「大正十三年四月十三日神社敷地下段南方に周囲に並植、中に野天土間で、「鞍馬式」と呼ばれていた剣術道場が設けられた」と記されている¹¹⁶⁾。そして、相撲場、弓場が神社に造られたし、参道両側には池、亭、散歩道も設けられ、遊興の場所が作り出された。また、神社境内の南側に兎舎、熊舎、鳥舎、猿舎などが描かれており、小さい動物園が形成された。こうして、神社は公衆の信仰と遊興の機能を兼ねていた。

詳細は不明だが、第一次日本統治期には公園の整備計画がたてられていたものとみられ、「遊覧休養、娯楽、運動並びに市街の記念装飾を主目的となす」緑地は普通公園として、「風景調和、水源涵養」の森林は天然公園あるいは森林公園として位置づけられていた¹¹⁷⁾。青島神社境内は公園の名前が与えられていなかったが、観賞樹木、運動する場所、動物舎などが設けられたため、『土木誌』に普通公園として記録されている。したがって、この時期には貯水山公園が成立していたと考えられる。

2-2-3. 支配の変遷に伴う貯水山の変容

1922 年には中華民国政府が日本政府から青島の主権を回復した。農林事務所が日本統治期の公園を基にして、青島市内の公園を再整備、新規開設し、大小公園 19

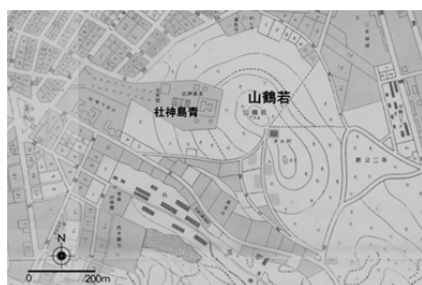


図 3-23 青島神社及び周辺
(1937 年の「最新青島市街一覧図」より)



図 3-24 貯水山及び周辺 (1935 年
の「大青島市発展計画図より」)



図 3-25 中国公園及び周辺
(1947 年の「青島市街道図」より)

ヶ所が形成された¹¹⁸⁾。しかし、日本人居留民は引き続き青島に滞在していた。そのため、日本人の日常生活に必要な施設も日本の財産として保留されていた。「山東懸案解決に関する条約」の第七条には「膠州ドイツの旧租借地の公共財産の中の日本居留民団体の公益に欠くことのできない学校、寺院、墓地などは、日本の保留財産として居留民団が管理する」と書かれている。附約によって、面積 56,695m² である青島神社は日本居留民の公益地として保存された（図 3-23）¹¹⁹⁾。

1935 年 1 月には青島工務局は「青島市施行都市計画方案初稿」（以下、「施行方案」）¹²⁰⁾ を編成した。「施行方案」の第八章の「全市園林空地の計画」には「園林空地は水面など家屋、街路がない、市民たちが遊興、休憩と運動する空間を提供する場所である。」と定義されている。これらは森林、公園、運動場、小運動場、競馬場、ゴルフ場、水面、広場に細かく分けられて、面積 5,000 ヘクタールで、都市全体の 36.4% をしめるように計画された。森林については「海拔が六十メートル以上の山地は森林保留地に指定する」と規定されている。此の規定によれば、貯水山は森林保留地になって、性格が変わらなかったものと推測される。公園の計画については「市区内の公園が少ないので、現在の公園は建築地にしてはならない。将来市区を拡大する時には、面積五十ヘクタールの範囲内には必ず小公園一ヶ所を設ける」と述べている¹²¹⁾。

しかも、此の段階の計画によって、都市の範囲は日本統治期よりさらに北側に拡張され、シビック・センターが大港の東、貯水山の北側に移され（図 3-24）、山は都市の中心緑地となり、その地位が一層上がるはずであった。しかし、「施行方案」が未だ実施されていない段階で、中日戦争が勃発した。

1938 年に日本は再び青島を占領した。1941 年、日本政府は「青島母市計画図」を公布したが、1947 年の市街地図と 1940 年の市街地地図を比較すると、都市の建設はあまり進められていなかったことが分かる。青島神社は変わらずに 1945 年まで市街地図に描かれている¹²²⁾。

1945 年の日本の敗戦後、中華民国政府は戦死者を供養するために、青島神社を忠烈祠として使用した¹²³⁾。1947 年の市街地図によると、神社の場所には「忠烈祠」、隣には「中国公園」と書かれている（図 3-25）。公園の名前を変えることによって、おそらく日本の景観と区別し、中国の尊厳を強調したかったためと考えられる。1948 年 12 月のアメリカ雑誌 LIFE¹²⁴⁾ には青島の都市景観、人々の生活などに関する特集写真 42 枚が掲げられている。その中には神社の写真が 2 枚含まれている。其の一枚は包頭路からとられた神社の写真である（写真 3-25）¹²⁵⁾。この写真によると、第一鳥居、第二鳥居、附属施設及び参道両側の樹木は既にとり除かれていたが、階段の上にある拝殿など重要な建物はまだ残されている。しかし、後述のように、1956 年には公園の道路、植生が整理されたことから、神社の建物はその前にもうすべて

撤去されたと判断される。

2-3. 児童公園の成立と特徴

2-3-1. 児童公園の成立

中華人民共和国が成立してからの青島市の公園の建設活動は、回復（1951-1955 年）、建設（1956-1964 年）、破壊（1966-1976 年）、回復（1978-1982 年）、大規模建設（1984 年-）の五段階に分けて理解されている¹²⁶⁾。1950-1951 年には続けて二回大規模な植樹活動が行われ、市内の山が緑化されたが、貯水山もこの中に含まれていた¹²⁷⁾。1956 年には公園の主要道路が修築され、元参道の両側にはヒマラヤスギが補植された。そして、山頂にはクロマツ、ニセアカシア、ハコヤナギが植えられ、山麓には池が整備され、池の側にはヤナギが植えられた。同年、公園の名称は「貯水山公園」に定められた¹²⁸⁾。

児童公園として建設が始まったのは 80 年代である。1982 年に青島市政府、婦人連合会が資金を寄せ集め、子供たちの娯楽施設、十二支の動物の彫塑が設けられた¹²⁹⁾。1984 年の「青島市全体都市計画」には青島市の園林緑化について「海岸緑化に重点を置いて、山頂の風景を強調し、点、線、面を合わせ、(中略)、青島の緑化システムを全体化させ」と目標が提出された¹³⁰⁾。同年 3 月 12 日と 6 月 4 日には青島市政府が「山を閉鎖し、植樹・造園するお知らせ」と「山頂公園十ヶ所¹³¹⁾」を建設するお知らせを出し、青島の山々で植林し、公園を作る活動が始まった。

貯水山は山頂公園の一つとして植林されたほか、子供センターが建てられた。公園は「青島市児童公園」と命名された。1986 年 7 月 6 日にはさらに「青島市貯水山児童公園」と改称されている¹³²⁾。『青島市志』(園林緑化志)によると、80 年代の青島市の公園は総合公園、動物園、植物園、児童公園、記念公園と地区公園に分けられており、貯水山公園は青島市唯一の児童公園として記録され、また、現在でも唯一の児童公園である位置づけは変わっていない。

2-3-2. 公園の特徴と神社の影響

貯水山児童公園の施設や植物景観は中国風に改変されたが、青島神社からのいろいろな影響が見られる。

まず、貯水山公園は遼寧路（日本統治期の若鶴町）の東、貯水山に立地しており、公園の入り口は神社当時のまま西に設置されている。ただ、第一鳥居の位置には現在、広場、噴水と彫刻、アーチの門が立っており、現代公園の雰囲気を示している（写真 3-26）。次に、貯水山公園は入り口から、山腹にある階段までまっすぐの軸線を持っており、記念的な景観の特徴が強く感じられる。これは神社の空間構成からの影響である。また、前述のように、桜並木は神社の一部とみなされ、1948 年頃既に伐採されていた。サクラの代わりに、1956 年に、道路の両側にヒマラヤス

ギが植えられた（写真 3-27）。ヒマラヤスギはマツ科に属し、寿命が長くて寒さに耐えられる特徴を持っている。マツは昔から中国人に特に詩人や画家に愛され、徐々に「強靱」「節操」の文化的象徴になった。現在、中国の陵墓などの記念景観には松が多く使われている。貯水山公園のサクラがヒマラヤスギに替えられたのは日本の文化的象徴を中国の文化的象徴に変える意図があったと推測される。

軸線の北側にある池の位置は、神社の鶴巻池の位置と大体一致し、それは神社の池をもとに整備されたと考えられる。池のそばに中国風の亭、棧道が設けられ、中国古典庭園の要素が加えられた。元参道の南側にあった公園、動物園も建て替えられ、子供センターが建設されている（図 3-26）。一方、貯水山の西側には P. C. モール、レストラン、アパートなど新たな商業施設が多く立地している。宮前町を中心としてできた神社の門前町の商業街的性格は変わっていないが、新たな建物の高



写真 3-26 公園の入口



写真 3-27 参道両側のヒマラヤスギ

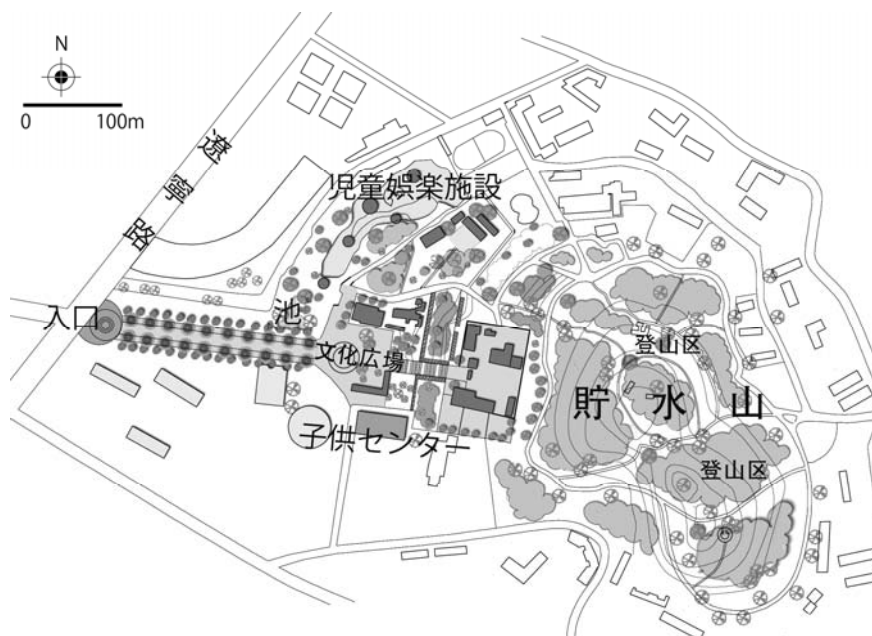


図 3-26 貯水山児童公園及び周辺（公園の案内図と航空写真により作成）

さは山の高さを超えており、神社が元来持っていた神聖感は著しく減じられた。

現在、貯水山公園は市民に開放され、都市の重要な公共空間として使われている。毎日市民たち、特にお年寄りの方々がここで散歩したり、ダンスをしたりして、のんびりと過ごしている。また、毎年、毎年の正月にここで一週間の大根祭りが行われており、貯水山公園は新しい形式で青島市民の生活に適合している。

以上のように貯水山ではドイツ、日本、中国三国の文化の影響を受けつつ、現代都市公園が形成されてきた。その中では日本の影響が最も強かったと考えられる。前述のように、日本統治期の都市計画によって、貯水山の周辺には商業、工業、住居など様々な施設が集まって、ドイツ統治期の郊外地から市街の中心になった。そして、日本の文化では山が神聖な場所と見なされるため、貯水山は青島神社の鎮座地として選定された。その後 1945 年までの間には青島神社はずっと日本人に管理され続けた。このように長い時間存在した青島神社は現在の公園の立地、入口、構成に大きな影響を与えた。一方、中国人にとって神社は中国の寺廟と似ているから、青島神社が「日本大廟」と呼ばれ、山も「大廟山」の名称を与えられた。神社はその後取り除かれたが、「大廟山」という名称は現在まで通称として用いられている。青島神社の影響が強すぎて、ドイツの文化の影響はほとんど見られなくなった。ただ、初期に水源の役割を果たしたと言う事実は現在でも貯水山という名前にその名残りをとどめている。

新中国が誕生して以後、緑地の機能が重視され、何度も再整備されて、現在の貯水山公園が形成された。入り口の彫刻、古典風の庭園、参道両側のヒマラヤスギなどの施設と植物景観で中国の文化が強く示されている。しかし、象徴的な施設は撤去されたものの、空間構成から神社の面影が見られるし、山頂の緑化の基調樹種であるトゲナシニセアカシアとクロマツも認められ、公園には三国の文化が映っている。

第3項 中国海洋大学構内景観の形成と変容

中国海洋大学は中国山東省青島市に位置し、海洋と水産学を特色とする総合大学である。大学本部は大学路キャンパスと魚山路キャンパスの2つのキャンパスを持ち、南に匯泉湾の第一海水浴場があり、北側に青島山があり、東側で小魚山と隣接しており、風景が絶好の場所に立地している。一方、構内に兵舎や青島日本中学校などの近代建築が今でも残っており、樹木も繁茂しているため、「中国十大美しいキャンパス」に選ばれた。キャンパスは一般市民に開放され、半公共的なスペースに属し、青島市の緑地空間の重要な一部であると考えられる。

3-1. 大学路キャンパスの建設と景観の特徴

3-1-1. ビスマルク兵舎の建設

ドイツの租借地となり、青島は何よりも艦隊基地として位置付けられた¹³³⁾。このような軍事上の戦略により、青島に駐在していた軍隊は青島の欧州人口の半分以上を構成していた。1898年-1914年の間にはドイツ青島守備軍の人数は1,499人(1899年) - 3,528人(1907年)¹³⁴⁾の範囲内で変動していた。それに対し、1902年に軍人以外の欧州人の総人口(含ドイツ人)はわずかな688人であり¹³⁵⁾、1907年に青島に住んでいたドイツ人は1,412人に増加したが¹³⁶⁾、軍の1/2弱であった。このように多くの兵士が駐在していたため、兵舎を造るのはドイツ総督府が青島を占領した段階で一番重要な仕事の一つとなった。

1902年に兵舎の一つとして、ビスマルク山で兵舎の構築が始まった。兵舎の立地に関しては「場所が絶好であり、絵のような美しい風景を持つ、海と珠山が眺められる」と記されている¹³⁷⁾。ここには元々清朝政府によって建てられた「東大営」という兵舎があったが、空間と衛生の問題で新しい兵舎には取って代わるようになった。新しい兵舎に専用の洗濯室と水洗トイレが配備された。大規模な水洗トイレが配備されたのは東アジアで初めてであった。1903年の夏に兵舎は使用に供され¹³⁸⁾、工費は75万マルクがかかった¹³⁹⁾。1906年-1909年の間には、機械補修工場、鍛鉄工場、貯蔵室、接待室と競馬場が相次いで建てられ、兵舎の施設が完備されることになった¹⁴⁰⁾。1914年に日本が青島を占領すると、ビスマルク兵舎は日本守備軍の兵舎となり、「万年兵営」に改称された。このように、この建物と施設はドイツ統治期から日本統治期まで兵舎として使われていた。

図3-27は1907年のビスマルク兵舎の配置を示しているものである。図によれば、兵舎が二列で建てられ、真中に訓練場が設けられていることが分かる。平面図と古写真(写真3-28)を合わせてみると、主要な建物は軸線を持つ、対称的なデザインとされたことが分かる。主要建物の他、訓練場の左側と道路の北側にいくつかの比較的小さい建物が建てられている。これらはおそらく上記の工場と所蔵室だと推測

される。

兵士を訓練するスペースが必要だったためか、庭園は造らずに、樹木もほとんど植えられなかった。ドイツ統治期の写真 3-28 と日本統治期の写真 3-29 によれば、わずかに訓練場の南側と東側に木が植えられていたことが知られる。現在、大学のキャンパスには100年以上のプラタナスが21本現存することから(写真 3-30)¹⁴¹⁾、当時植えられた樹木はプラタナスだったと判断される。

3-1-2. 学校への機能転換

1922 年には中華民国北洋政府は青島の支配を回復した。都市が建設されてからの 24 年間でドイツと日本の教育ばかりを受けた青島に対し、政府は中国の教育システムを構築することの重要性を強調した。この点に関して、『膠澳志』（教育志）は下のように論じている。

国家を強大させ、民衆を善良にすることの基本は教育にある。教育は民衆の徳を涵養し、知恵を啓発し、民族の發育を強健にするものだ。膠澳地域は租借地になる前に科挙が廃止されておらず、学校も建設されておらず、文化事業が非常に少なかった。ドイツの租借地となり、その後日本に占領されてからの 20 余年中国人が受けた教育は組織によるもので

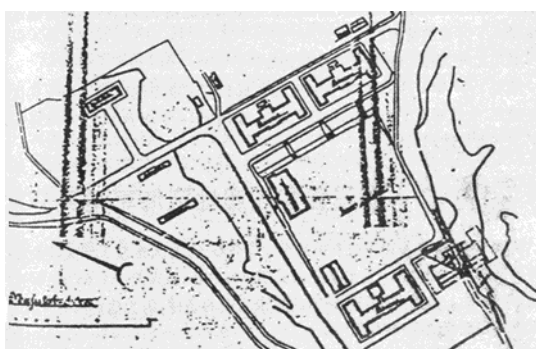


図 3-27 ビスマルク兵舎の平面図（『青島城市
与军事要塞建设研究（1897-1914）』より）



写真 3-28 1907 年ビスマルク兵営（『青

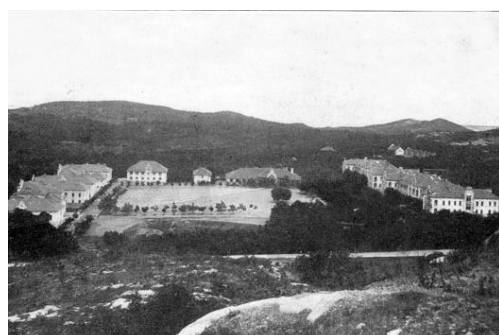


写真 3-29 1907 年ビスマルク兵営（『青
島古葉書』より）



写真 3-30 現存のプラタナス（筆者撮影）

はなかったし、システムは混乱しており、外国の植民政策に縛られた。(中略)。青島は気候が温暖であり、中国沿海の中心点にあり、水陸交通は極めて便利であり、その社会風習は北京、天津、上海などの各地とかなり異なる。旧式の腐敗した慣習が付着しておらず、政治の潮流への接触にも薄い。そして、山東省はもともと中国文化の発祥地であった。地方教育を改良すべきであり、中央政府がここに国立大学を特別に設置して中国の従来の徳を發揚し、新しい知識を注ぎ込むべきだ¹⁴²⁾。

このような指導思想に従い、1924年に当時の膠澳商埠の監督であった高恩洪によって大学の設立が発起され、兵舎の施設は校舎として使われた。学校の董事会の開設費用は董事会によって募集され、通常費用は監督公署と膠濟鉄道局によって補助され、同年の10月に私立青島大学が成立した¹⁴³⁾。大学に商業と工業の二学科が設置され、80人の学生が入学し、高恩洪が学長を兼任した。

1925年5月には中国国内の軍閥であった直隸と奉天派の間に戦争があり、直隸軍閥の敗戦によって、膠澳の監督から高恩洪が退職した。このような事情により、私立青島大学の経費は影響を受け、1925年-1927年の間には学生を募集していなかったという¹⁴⁴⁾。1928年には学校の経営自体が停止された。

1929年には中華民国南京政府が青島を接收し、青島は特別市として中央政府に管轄された。同年、国立青島大学委員会が成立し、済南にあった旧山東大学を接收し、私立青島大学の施設、財産をもちい、国立青島大学の設立を準備し始めた。国立青島大学は青島に設置され、工場と農事試験場が済南にも設置され、学校の規模も力もかなり大きくなった¹⁴⁵⁾。1930年4月に国民政府教育部は楊振声を学長に任命し、国立青島大学が正式に成立した。1931年9月18日の「満州事変」のあと、学生の抗議活動があったことを理由にし、楊振声が学長を辞職した。1932年9月国立青島大学は国立山東大学に改名され、趙崎が学長に赴任した¹⁴⁶⁾。1937年に日中戦争が勃発し、1938年には国立山東大学が停止されたが、日本敗戦の翌年の1946年に、国立山東大学は青島で回復されることになった。

3-1-3. 景観の特徴

図3-28は1928年の私立青島大学の平面図である。図3-27と比較すると、施設の配置はほとんど変わっていなかったことが分かる。ただし、訓練場の左側に建物1棟、左側の三角形の敷地内に1棟、左上の四角形の敷地内に2棟が増加した。主要な建物の上に百号から六百号、図書館、「大礼堂」(ホール)との建物の名前が書かれ、学校の基本施設を構成していたことが分かる。そして、大学路に学校の入口が設けられ、入口から教室まで道路が構築された。この道路と並行して、隣の建物と外部の道路をつなげる道路一本も敷かれた。この時期に建物がいくつか増加したが、平面図によれば外部空間の景観は全く変わっていなかったことが分かった。

図 3-29 は 1935 年の国立山東大学の平面図である。図 3-28 と比べると、学校の施設も訓練場であった庭園の部分もかなり充実させられたことが知られる。施設の面において大きい変化は 1934 年の 11 番科学館の落成である（写真 3-31）。科学館は 3 階建て、左右対称にデザインされた石造りの建物であり、高さでも様式でも周辺の建物と調和している。科学館の建築によって、その前にある道路も庭園も整備された。校舎以外にも、体育館に加えボール場、運動場が 4 つ設けられた。道路に



写真 3-31 科学館（1935 年の『国立山東大学一覽』より）



写真 3-32 1931 年の図書館（『国立青島大学一覽』より）

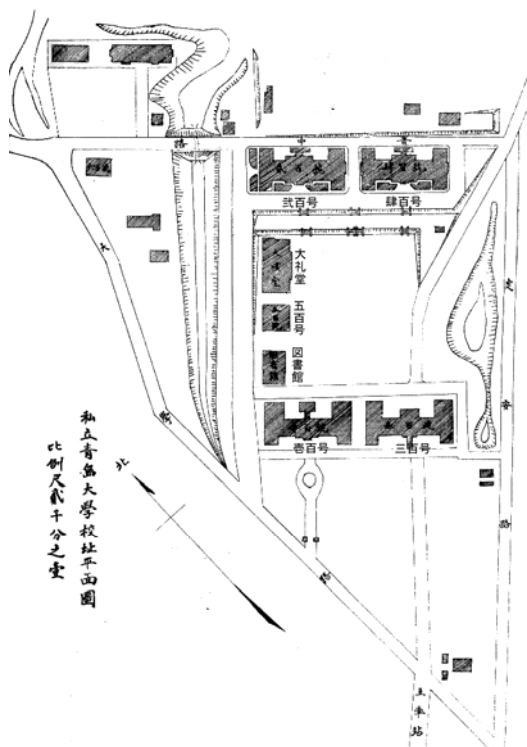


図 3-28 私立青島大学平面図（『私立青島大学一覽』より）



図 3-29 国立山東大学平面図（『国立山東大学一覽』より）

関しては学校の入口の部分に図 3-28 と同様に 2 本の道路があるのが、南東部にある道路の位置が 4 番の第三校舎の中央への軸線から、第一校舎と第三校舎の間に移動された。その道路の南東側、第三校舎の前は運動場として整備されることになった。道路の位置が変わった原因は二つあると考えられる。一つは運動場を構築するために、一定のスペースが必要になったことである。もう一つは訓練場であった空地に庭園が造り出され、校門からの道路は庭園の軸線の延長線として新たに構築されたと推測される。

前時期と比べると最も大きく変化していたのは訓練場であった庭園の部分だった。具体的な時期は不詳であるが、1928 年の私立青島大学の平面図にかかれていないのに、1931 年の国立青島大学の図書館の写真 3-32 に庭園の一部が写されていることから、この庭園は私立青島大学から国立青島大学に転換された時に造られたものだと推測される。これも中華民国南京統治期に多数の公園が構築された時期と合致している。建物に囲まれている四角形の中心軸線と対角線に沿って、道路が造られた。道路が交わる場所に、4 つの半円形広場と 1 つの円形広場が造られた。放射状の道路（写真 3-33）、広場、整えられた生垣は整形式の庭園の特徴が現れている。本章の第 3 節に中華民国統治期に造られた公園の空間は全体的に西洋風の特徴が現れていると述べているが、少なくとも公園には中国式の建物が建てられ、中国の文化を強調している面も認められた。これに対し、中国海洋大学のキャンパスは建物も庭園の空間も、さらにドイツ統治期に植えられたプラタナスもすべて西洋に出自を持つものしか見られない。それはもともと学校が兵舎の施設を利用し、既存のドイツの建物が景観全体のスタイルを主導し、庭園も建物の形式に従って作られたからと考えられる。ただし、現地調査によると、円形広場の中には中国式の築山が設けられ、視線の焦点になっている（写真 3-34）。築山が構築された時期は不詳であるが、この洋風の庭園で唯一の中国の伝統的な造園要素であり、中国の庭園としての符号としてみた方がよいだろう。



写真 3-33 バロック式庭園（筆者撮影）



写真 3-34 築山（筆者撮影）

3-2. 魚山路キャンパスと景観の特徴

3-2-1. キャンパスの建設

前述したように日本が青島を占領するとともに青島に住んでいた日本人が 1913 年の 316 人から 1915 年の 11,009 人まで急激に増加した。このような背景により青島に住んでいる日本人の教育のために、多くの小、中学校が造られた。

青島中学校は 1917 年 2 月 8 日青島守備軍（その当時の軍司令官は大谷喜久蔵大将）軍令第 3 号をもって青島中学校規則を公布した¹⁴⁷⁾。同年 2 月 21 日青島軍政告示第 11 号により「青島ニ青島中学校を設置シ旭町旭兵営ヲ以テ校舎に充テ大正六年四月四日ヨリ開校ス」と告示され、旭兵営（旧イルチス兵舎）校舎として青島中学校は開校した¹⁴⁸⁾。ただし、校舎は、外観も堂々としており、建築も極めて堅牢であったが、あくまでも兵舎であり、学校施設として中学校令施行規則による設備の規定に適合しない点も種々あり、一方、生徒数の増加にともなってその収容は困難となることが予想され、大正八年（1919 年）頃から校舎新築の計画が検討された。

1919 年、校舎新築の敷地として、元来中国の兵舎であり、ドイツ統治期には気球格納庫が置かれ、その後、日本統治期に石油倉庫と通信部寄宿舍として使われた場所（有明町、後に魚山路に改称）が選定された。最初に運動場の工事が着手され、1920 年 3 月 5 日に校舎建設の地鎮祭が举行された。1921 年 6 月 27 日に新校舎（桜ヶ丘校舎）は落成し、8 月 25 日に寄宿舍も落成し移転した¹⁴⁹⁾。桜ヶ丘新校舎は、総工費約 45 万円、敷地面積 14,890 余坪（約 49,223m²）、総建坪は 1,200 坪（約 3,967 m²）、煉瓦造二階建で室内にはスチーム暖房、水流式の下水道が完備された「日本内地にも稀ニ見ルカ如キ宏荘ナルモノ」であった。

1922 年に中華民国北洋政府が青島を回復したが、日本人居留民は引き続き青島に滞在し、学校と寺院、神社、病院などの施設は日本人の日常生活に必要な施設として日本人居留民団体に保留された。1923 年 3 月に日本と中国青島行政の引き継ぎは完了した。それ以後、在外指定校としての青島日本中学校の経費は、外務省の特別会計から支出されることになった¹⁵⁰⁾。1937 年日中戦争によって、学校は一時的に閉鎖されることになり、1938 年 3 月には学校の経営が戦争によって停止されたという¹⁵¹⁾。

3-2-2. 景観特徴

図 3-30 は青島日本中学校の配置図である。正門は魚山路に設けられ、構内に新築された校舎、寄宿舍、温室と工作室の施設が配置されている。建物の周辺には庭球場、弓道場、射撃場、バスケットボール場などの運動施設も多く設けられている。中央に位置している校舎は一番重要な施設として設計され、「中」字の形の平面を持つ。建物の正面は塔を中心し、左右対称の特徴が現れている（図 3-31）。塔の前に三角形の妻壁が造られ、下の入口が強調されるようになった。壁体は煉瓦造、外

部は花崗岩で装飾され、屋根は赤色の瓦に覆われている。建物の様式も色彩も日本との伝統的な建物とことなり、隣の兵舎とドイツ統治期に造られた建物との共通性がみられ、都市景観の連続性が守られることになった。

建物は非常に立派であり、「門柱一基が内地の農村の小学校の施設に匹敵すると言われていたほどであった」。これは都市景観上の配慮だけではなく、日本人にとって、学校は文化を普及させる場所であり、日本国の象徴であったから。この点については、1939 年から敗戦で引き上げるまで国語と漢文を担当した石井守教諭が学校の象徴的意味について次のように書いている。

青島日本中学校は、異国にある日本の外地における国威発揚の文化的砦であった。(中略)。

あの天を突く尖塔を中心に、煉瓦造りの校舎左右対称、鳳のように両翼を大きく豊かに張った豪華な威容の象徴であった¹⁵²⁾。

庭園に関しては、配置図と鳥瞰写真(写真 3-35) が示しているものは若干異なっている。まず、写真 3-35 によれば、学校の正門から建物の入口まで、道路一本が敷かれ、庭園は道路によって東西の两部分に分けられていたことが分かる。東の部分には道路も築かれておらず、植物も植えられていなかったが、西側は円形を基本要素とし、顕著な西洋の庭園が創出されている。しかし、1935 年の配置図(図 3-30) に描かれている庭園はそうではなかった。配置図には正門から校舎までの道路がなく、建物の玄関の真正面に一つの島のように「風致園」が設置されている。

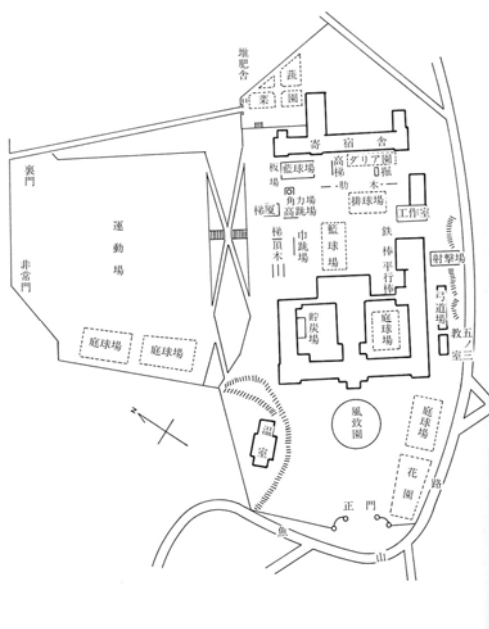


図 3-30 1935 年青島日本中学校の配置図
(『青島日本中学校校史』より)

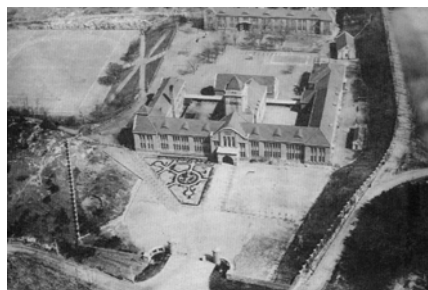


写真 3-35 青島中学校の鳥瞰図(『青島日本中学校』より)

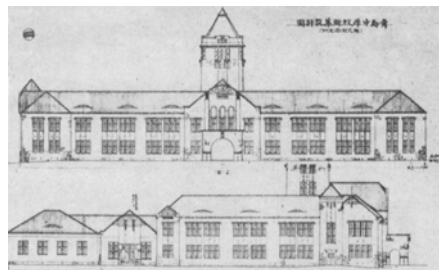


図 3-31 青島中学校の設計図(『土木誌』より)

庭園がいかに変化したのかを究明するために、写真と配置図の前後を検討しなければならない。一つ重要なヒントとしては配置図の西側に温室が描かれているが、鳥瞰写真ではそこはまだ更地のままになっている。そして、校舎の後ろにある運動施設も配置図の方が多いので、鳥瞰写真は学校の主要な施設が竣工した早いうちに撮られた写真だと判断される。だとすると、学校が竣工してから 1935 年までの間に庭園は一回造り替えられたと推定される。ただし、庭園が造りなおされた理由と具体的な時間は不詳である。

写真 3-36 には当時風致園の一部が写されている。写真から、風致園にクロマツが多く植えられていることが知られる。それは現在でもほとんど変わらなかった(写真 3-37)。クロマツだけではなく、サクラも構内に植えられた(写真 3-38)。現地調査によると、校舎の西側に一列のサクラが植えられており、日本統治期に植えられたものと推測される。日本統治期には学校の庭園景観にも自国の植物を用い、クロマツとサクラはほぼセットで使用されることが分かる。

3-3. キャンパスの合併と構内景観の現状

1949 年 6 月 2 日には青島が解放され、国立山東大学が日本中学校を合併し、青島で復校した。1958 年の 10 月に国立山東大学の主体は済南に移転し、青島に残ったのは海洋系、水産系と生物系の海洋生物専門と物理、化学などの学科であった。1959 年 3 月に残された学科で山東海洋学院が創立され、中国教育部に属する独立の総合大学になった¹⁵³⁾。1988 年に山東海洋学院は「青島海洋大学」に改名され、2002 年 10 月 10 日には「青島海洋大学」が「中国海洋大学」に改称する申請が中国教育部に認められ、現在では国レベルの総合大学になった¹⁵⁴⁾。1980 年代以降、学生数が次第に増えたことに伴い、青島市の浮山と労山にもキャンパスが造られている。

図 3-31 は現在の中国海洋大学本部キャンパスの平面図である。前の時期と比べると、建物の数は特に青島日本中学校だった部分で学生宿舎や行政用の建物が非常に増えたことが分かる。これは 1980 年代の後半から学生数が大幅に増加した結果



写真 3-36 風致園 (『青島日本中学校』より)



写真 3-37 風致園現状 (筆者撮影)



写真 3-38 学校のサクラ

だと考えられる¹⁵⁵⁾。そして、日本中学校の「中」字形の校舎の後ろの部分が増築された。前にあった運動施設が撤去され、四角形の緑地が設けられている。玄関の前にある黒松を中心する植物景觀と異なり、ここにはヒマラヤスギを中心とする植物景觀が創出された。ヒマラヤスギは 1980 年代に青島の市樹になってから多く使われることになった。これもおそらくヒマラヤスギで青島市の文化を強調するつもりだと推測される。東側に対して、西側キャンパスの入口に建物 2 棟が建てられたが、内部の建物と庭園の空間もほとんど変わらなかった。

以上、中国海洋大学はドイツ統治期に建てられた兵舎と日本統治期に造られた中学校の施設を利用し、発展してきた。校舎や庭園がそれぞれの主体によって造られたが、意外に日本政府も中華民国政府も既存のドイツ風の建物と都市景觀を尊重し、調和した景觀が形成された。それも中国海洋大学のキャンパス景觀が全国で多く評価されている一つの原因だと考えられる。

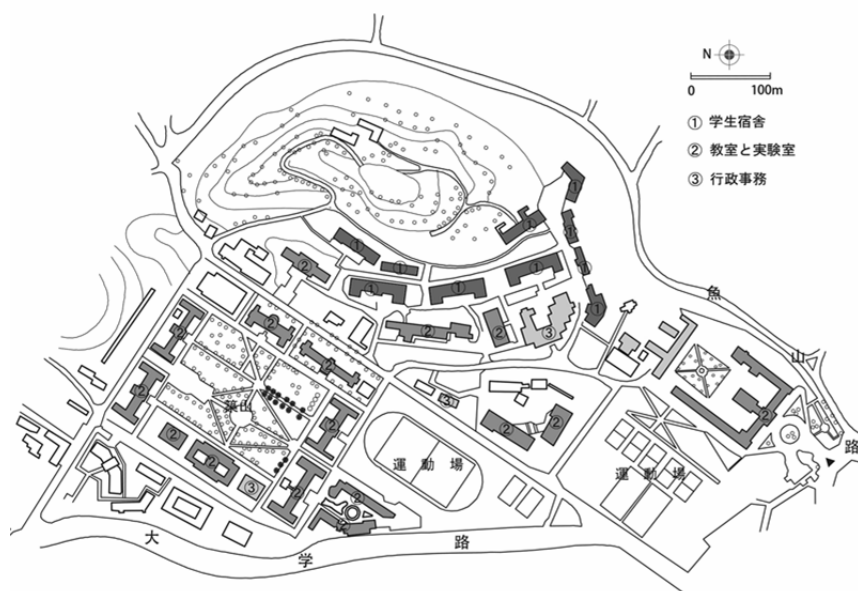


図 3-31 中国海洋大学平面図（研招網に載せられている平面図によって作成
<http://yz.kaoyan.com/ouc/zixun/03/367447/>）

第6節 小括

近代の都市計画理論の浸透によって、世界各国で公園の建設が重視されることになった。このような認識は、異なる統治者間でもほぼ一致していたため、ドイツ統治期から中華民国統治期まで衛生都市や公園都市、「中国一番美しい都市」の榮譽を保つなどの目標は共通して提出され、公園は市街における重要な緑地空間として、引き続き建設されていった。とりわけ旧来の公園の改善において、生産の機能の強かった公園から、運動施設が設けられ、多様な植物景觀に改善され、さらに西洋風の庭園、商業施設が設置されて、現代的な公園に改善されているものの、公園の立地・植物景觀自体には強い継承性がみられる。

一方、森林景觀に現れた比較的単純な継続性とことなり、市街に存在する重要な施設であった公園では、植民地の特徴と文化の衝突が強烈だった。ドイツ統治期には公園の理論が未整備であったが、公園は重要な施設の付属空間として配置され、西洋風の建物・町によって強い西洋の色を塗りつけられた。日本統治期には「市街ノ記念」の機能によって、巨大な青島神社と多くの記念物が建てられ、公園は日本の文化と支配者が青島で取得した功績の展示場となっていた。象徴の意味が強過ぎたので、戦後これらの施設は全部取り壊された。そして、日本統治期まで、公園はすべて欧州人区と日本人があつまった地域に設置され、植民地の特徴が現れた。

最も興味深かったのは中華民国統治期に造られた公園であった。都市として建設されてから、ドイツと日本の影響ばかりを受けていた青島に対し、中華民国政府が自国の文化を強調したいという意図を持つ一方、公園は文明の装置として取扱ったため、公園の空間や多くの施設は西洋式にした。ただし、公園にある重要な建物であった回瀾閣、水族館、牌楼など中国の伝統的な様式で建てられ、自国の文化を刻印する意図を示した。

このように戦前までの青島市の公園にはドイツ、日本と中国の施設が混在し、建設の連続性と文化の衝突の双方が現れていた。しかし、戦時中になると公園が多く転用、占用され、建物などと比較すると、公園は弱者の地位にあったことが分かる。

注：

- 1) 青島市統計局・国家統計局青島調査隊（2013）：2012 年青島市国民經濟和社会發展統計公報。青島統計信息網：
<http://www.stats-qd.gov.cn/statsqd/news/2013379565164310.asp?id=230&parentid=968&videos=&typeid=990> 最終閲覧日 20140402
- 2) 公園は都市公園、新公園、場所の名称あるいは機能によって海岸公園と森林公園の通称で呼ばれていた場合が多かった。また多くの緑地はそこまで命名されなかった。
- 3) 華納の『近代青島的城市計画与建設』に天後宮と老衙門付近に「園林」が造られた記録があったが、古写真やのち日本統治期にこの二つの緑地の記録がなかったため、ここで公園として取扱わないことにする。
- 4) 華納著・青島市档案馆訳（2011）：近代青島的城市計画与建設、東南大学出版社、115
- 5) 華納著・青島市档案馆訳（2011）：近代青島的城市計画与建設、東南大学出版社、72-73
- 6) 華納著・青島市档案馆訳（2011）：近代青島的城市計画与建設、東南大学出版社、96
- 7) 同上
- 8) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、4
- 9) 青島市档案馆（2007）：膠澳發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、13
- 10) 華納著・青島市档案馆訳（2011）：近代青島的城市計画与建設、東南大学出版社、97
- 11) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、13
- 12) Heinrich Hildebrand は鉄道技師として、1891 年にビスマルク首相によって中国に派遣された。湖北省漢陽から大冶までの鉄道と松滬鉄道の構築に参加した。
- 13) 華納著・青島市档案馆訳（2011）：近代青島的城市計画与建設、東南大学出版社、122
- 14) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、80、127
- 15) 『近代青島的城市計画与建設』に載せられている 1906 年の青島市中心及び街路の最終方向の地図によれば、教会の位置は現江蘇路と沂水路の交差点の近くに移動されたことが分かる。
- 16) 華納著・青島市档案馆訳（2011）：近代青島的城市計画与建設、東南大学出版社、126
- 17) 王建梅（2012）：『諾曼龍』鏡頭、山東友誼出版社、9
- 18) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、540
- 19) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、21
- 20) 陸游・徐曉梅（2005）：青島老明信片(1897-1914)（青島古葉書）、青島出版社
- 21) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、158
- 22) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、383
- 23) 青島市档案馆（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、602
- 24) 最初に林務局のリーダーは Thomas であり、1902 年から Malte Hases が林務局を引き続きリードしていた。

- 25) 青島軍政史：自大正3年11月至大正6年9月、第5巻、98
- 26) 青島市档案馆（2007）：膠澳發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、127
- 27) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、276
- 28) 大谷喜久蔵は（1915.5.24-）、本郷房太郎は（1917.8.6-）、大島健一は（1918.10.10-）、由比光衛は（1919.6.28-）相次いで青島の守備軍司令官となっていた。
- 29) 関東局文書課『関東局施政三十年業績調査資料』1937年、584-588。『中国東北都市計画史』（越沢明著、黄世孟訳、大佳出版社、1986）、56に載せられている。
- 30) 華納著・青島市档案馆訳（2011）：近代青島の城市計画と建設、東南大学出版社、73
- 31) 青島守備軍大正四年度第一統計年報、第三人口。
- 32) 青島軍政史：自大正3年11月至大正6年9月、第5巻、445
- 33) 同上
- 34) 青島軍政史：自大正3年11月至大正6年9月、第5巻、446
- 35) 料理屋、待合、芸妓屋の三業が集まって営業している地域の俗称である。
- 36) 日本統治期前後の市街地図を比べれば、忠の海の海岸に計画された住宅地（別荘）が造られたことが分かる。
- 37) 青島守備軍民政部土木部（1920）：土木誌、56
- 38) 青島守備軍民政部土木部（1920）：土木誌、57
- 39) 青島守備軍民政部土木部（1920）：土木誌、58
- 40) 和気六郎（1919）：青島写真案内（附官民便覧）、青島写真案内発行所、181
- 41) 著者不詳（2008）：廃棄された公園。青島市城市園林局政務網に載せられている。
<http://www.qdyuanlin.gov.cn/news/ylz.aspx?newsid=164&type=show&style=最終閲覧日20140331>
- 42) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、130
- 43) 泉対信之助（1922）：青島二年、帝国地方行政学会、19
- 44) 出版者不明（年代不明）：青島、光陽社
- 45) 三業は料亭、待合茶屋と芸者置屋の三業種の総称である。
- 46) 青島市档案馆（1991）：青島旧事、青島出版社、101、
- 47) 商埠地とは1905年に「日清満洲善後条約」第1条に準拠して、清が外国人居留地として自ら指定・開放した地域である。
- 48) 趙琪修・袁榮（1928）：膠澳志（政治志・設官）、成文出版社、2
- 49) 熊炳琦（1922.12-1924.3）、高恩洪（1924.4-）、王翰章（1924.11.5-）、温樹徳（1924.11.15-）、趙琪（1925.7-）らは青島の督辦に任命された。工程事務所所長には唐恩良（1923.3-）、王鴻訓（1924.4-）、周迪評（1924.6-）、趙藍田（?）、王超（1925.1-）、唐恩良（1925.7-1928）らが就任した。（『膠澳志』（政治志・設官）より）
- 50) 青島市政府招待所（1937）、青島概覧

- 51) 除友春、蔡鴻源、周興培 (1991) : 民国人物大辞典、河北人民出版社
- 52) 青島工務局 (1935) : 青島市施行都市計画方案初稿、第二章社会、11-12。ここに平民住宅が 11 カ所書かれているが、1934 年に第 9-11 平民住宅はまだ計画中であった。
- 53) 青島市三年間行政概要 (1932-1934) 青島市政府秘書処、6
- 54) 青島市三年間行政概要 (1932-1934) 青島市政府秘書処、3
- 55) 青島市三年間行政概要 (1932-1934) 青島市政府秘書処、11
- 56) 青島工務局 (1935) : 青島市施行都市計画方案初稿
- 57) 青島工務局 (1935) : 青島市施行都市計画方案初稿、37-44
- 58) 青島工務局 (1935) : 青島市施行都市計画方案初稿、9
- 59) 華納 (1994) : German Architecture in China、Ernst&Shon、211
- 60) 趙琪修・袁榮 (1928) : 膠澳志 (民社志・遊覧)、成文出版社、122
- 61) 青島工務局 (1935) : 青島市施行都市計画方案初稿、40-41
- 62) 趙琪修・袁榮 (1928) : 膠澳志 (民社志・遊覧)、成文出版社、123
- 63) 青島市史志事務室 (1997) : 青島市志 (園林緑化志)、北京新華出版社、15
- 64) 青島工務局 (1934) : 工務紀要
- 65) 青島工務局 (1934) : 工務紀要、113
- 66) 青島工務局 (1935) : 青島市施行都市計画方案初稿、38
- 67) 青島市志事務室 (1997) : 青島市志 (園林緑化志)、新華出版社、54
- 68) 出版者不明 (年代不明) : 青島・済南絵葉書、出版地不明
- 69) 青島工務局 (1934) : 工務紀要、113
- 70) 青島工務局 (1934) : 工務紀要、103
- 71) 青島工務局 (1934) : 工務紀要、114
- 72) のちに児童運動場が実現されたかどうか確認できなかった。
- 73) 中国近代建築研究と保護 (五) (張復合主編、清華大学出版社、2010) に載せられている徐蘇斌 : 近代中国建築的芸術運動—「美術建築」的思想和実践、739
- 74) 福永文夫 (2008) : 太平正芳…「戦後保守」とは何か、中央公論新社、38
- 75) 楊蕾 : 日本第二次占領時期対青島及其腹地的調査—日本対青島及其腹地実施調査的機構和主要内容的調査、青島档案情報のホームページに載せられている :
<http://www.qdda.gov.cn/front/qingdaofengqing/preview.jsp?subjectid=12259376671099767001&ID=1810262>。最終閲覧日 20140408
- 76) 前島康彦 (1968) : 折下吉延先生業績録、都市計画協会、127
- 77) 青島市城市園林政務網 (2008) : 園林志 (廃棄された公園)。
<http://www.qdyuanlin.gov.cn/news/ylz.aspx?newsid=164&type=show&style=最終閲覧日20140331>
- 78) 国内戦争の時壊された公園も含まれているかもしれない。

- 79) 青島特別市建設局農林事務所民国三十年二月分工作報告、青島市檔案館に所蔵される
- 80) 青島市史志事務室（1997）：青島市志（園林緑化志）、北京新華出版社、13
- 81) 青島市檔案館（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国檔案館出版社、56
- 82) 青島市檔案館（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国檔案館出版社、108
- 83) 青島市檔案館（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国檔案館出版社、158
- 84) 青島市檔案館（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国檔案館出版社、210
- 85) 青島市史志事務室（1997）：青島市志（園林緑化志）、北京新華出版社、94
- 86) 青島市檔案館（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国檔案館出版社、158
- 87) 泉対信之助（1922）：青島二年、帝国地方行政学会、108
- 88) ドイツ統治期に何種類のサクラが輸入されたのは不明である。
- 89) 泉対信之助（1922）：青島二年、帝国地方行政学会、19
- 90) 青島市檔案館（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国檔案館出版社、383
- 91) 青島市檔案館（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国檔案館出版社、63
- 92) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、243
- 93) 本多静六（1919）：青島森林の将来。現在、東京大学農学部の小野良平研究室に所蔵されている。
- 94) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、130
- 95) 青島工務局：工務紀要、1934
- 96) 青島市農林技術所（1932）：青島農林
- 97) 著者不明（年代不明）：青島、光陽社
- 98) 農林事務所（1947）：青島市農林事務所対日戦時遭受損失最重区域及損失一覧表、青島市檔案館に所蔵されている。
- 99) 青島市志事務室（2012）：青島市のサクラ
<http://www.qingdao.gov.cn/n15752132/n20546576/n26095442/n26148503/26148580.html>
- 100) 青島市史志事務室（1997）：青島市志（園林緑化志）、北京新華出版社、22
- 101) 青島市檔案館（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国檔案館出版社、57
- 102) 青島市檔案館（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国檔案館出版社、81
- 103) Jork Artelt（2011.5）：Tsingtau, Deutsche Stadt und Festung in China 1897-1914.
青島檔案館訳、青島都市と軍事要塞建設研究（1897-1914）、青島出版社、65。140p には
1907 年のモルトケ山とビスマーク山の防御施設平面図が掲載されている。1913 年の青島
市街地図にモルトケ兵營が描かれている。
- 104) 青島市檔案館（2007）：膠奥發展備忘録全訳、中国檔案館出版社、532
- 105) 神社協会（1919）：神社協会雑誌、第十八年、第十二号、33。『神社協会雑誌』は神社
協会が 1902 年に創刊、1938 年に終刊した神社研究に関する雑誌である。その中の「各地
通信欄」には日本が海外で建設した神社も掲載されている。

- 106) 青島守備軍『欧受大日記』第五三七号、「青島神社創立に関する件申請」。
- 107) 青島守備軍：欧受大日記第五三七号、青島神社創立に関する件申請。
- 108) 前掲 20) (1932)、第三十一年、第二号、64. なお、金刀比羅神社の創立過程は記述されていない。
- 109) 青島守備軍：欧受大日記第五三七号、青島神社創立に関する件申請、0893
- 110) 神社協会 (1924)：神社協会雑誌、第二十二年、第六号、72
- 111) 日高六郎 (2005. 6)：戦争の中で考えたこと—ある家族の物語、筑摩書房、107
- 112) 神社協会 (1927)：神社協会雑誌、第二十六年、第十二号、78
- 113) 青井哲人 (2005)：植民地神社と帝国日本、吉川弘文出版社、147-159
- 114) 辻子実 (2007. 2)：侵略神社、新幹社、103
- 115) 神社協会 (1924)：神社協会雑誌、第二十二年、第 6 号、72
- 116) 神社協会 (1924)：神社協会雑誌、第二十二年、第 6 号、72
- 117) 青島守備軍民政部土木部 (大正九年五月)：土木誌、56-57
- 118) 1922 年中日「山東懸案解決に関する条約」及び附約が『膠奥志』『沿革志』『中国回復の顛末』に掲げられている。その第七条には日本保留財産が規定されていた。(甲) 日本領 事館に必要な財産と (乙) 日本人居留民団に必要な財産に分けられている。乙は日本人会、化学試験所、青島病院、中学校、高等女学校、第一小学校、青島神社、忠魂碑、青島斎場、火葬場、墓地を含んでいる。
- 119) 趙琪修・袁榮 (1928)：膠奥志、成文出版社、122
- 120) 青島工務局 (1935)：青島市施行都市計画方案初稿。この中で序言、計画の範囲、都市発展の推測、計画の原則、中心部の計画、街路、公園システム、交通、衛生、土地整理、実施について詳細に論じている。
- 121) 青島工務局 (1935)：青島市施行都市計画方案初稿、37
- 122) 折下吉延は青島特別市の都市計画の仕事を委嘱され、1940 年に青島に移った (都市計画協会 (1967)：『折下吉延先生業績録』、126。1941 年には折下が青島市青島神社境内を設計した (佐藤 昌 (1977)：『日本公園緑地発達史』(下巻)、都市計画研究所、391)。しかし、戦争があったため、実施されたかどうか不明である。
- 123) 青島市档案馆 (2010. 8)：青島通鑒、中国文史出版社、157
- 124) 『LIFE』雑誌は 1936 年に発刊されたアメリカの雑誌である。2007 から内容は google に移された (<http://images.google.com/hosted/life/7fcf6e591cfe6816.html>)。
- 125) 二枚の写真のうち一枚は論文の中に掲げられており、もう一枚の写真はアメリカの兵士と神社の灯籠を写している。
- 126) 青島市志事務室 (1997)：青島市志 (園林緑化志)、新華出版社、79
- 127) 青島市志事務室 (1997)：青島市志 (園林緑化志)、新華出版社、6
- 128) 青島市志事務室 (1997)：青島市志 (旅行志)、新華出版社、39

- 129) 青島市志事務室 (1997) : 青島市志 (園林緑化志)、新華出版社、24
- 130) 青島市志事務室 (1997) : 青島市志 (旅行志)、新華出版社、71
- 131) 山頂公園十ヶ所は觀海山、觀象山、信号山、青島山、太平山、貯水山、嘉定山、北嶺山、樓山、烟敦山である。
- 132) 青島市園林政務ホームページ <http://www.qdyuanlin.gov.cn/news>
- 133) 青島市档案馆 (2007) : 膠澳發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、3
- 134) 约尔克・啊泰而特著・青島市档案馆全訳 (2011) : 青岛城市与军事要塞建设研究 (1897-1914) (青島の都市と軍事要塞の建設に関する研究 (1897-1914))、青島出版社、56
- 135) 青島市档案馆 (2007) : 膠澳發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、193
- 136) 青島市档案馆 (2007) : 膠澳發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、515
- 137) 青島市档案馆 (2007) : 膠澳發展備忘録全訳、中国档案馆出版社、206
- 138) 同上
- 139) 田久江南 (1921) : 青島要覧、新極東社発行、271-272
- 140) 约尔克・阿泰尔著、青島市档案馆编译、青岛城市与军事要塞建设研究 (1897-1914)、青島出版社、54、2011
- 141) 青島市史志辦公室・青島市林業局・青島市園林局 : 青島古樹名木志、中国海洋大学出版社、162
- 142) 趙琪修・袁荣 (1928) : 膠澳志 (教育志)、成文出版社、1
- 143) 趙琪修・袁荣 (1928) : 膠澳志 (教育志)、成文出版社、2
- 144) 李耀臻 (2004) : 中国海洋大学、浙江大学出版社、10
- 145) 国立山東大学 (1935) : 国立山東大学一覽
- 146) 李耀臻 (2004) : 中国海洋大学、浙江大学出版社、11
- 147) 青島日本中学校校史、3
- 148) 青島日本中学校校史、33
- 149) 青島日本中学校校史、33-34
- 150) 青島日本中学校校史、8
- 151) 李耀臻 (2004) : 中国海洋大学、浙江大学出版社、12
- 152) 青島日本中学校校史、21
- 153) 李耀臻 (2004) : 中国海洋大学、浙江大学出版社、13
- 154) 李耀臻 (2004) : 中国海洋大学大事記、中国海洋大学出版社、412
- 155) 1982 年に 366 名の学部生だけが採られたが、1986 年には学部生、修士、専門学生などを含め、1379 人が採られることになった。現在、中国海洋大学には 39,500 人の学生がいる。

第4章 並木道の形成と変容

並木は車道と歩道を分離し、延焼をとめ、空気を浄化するなどの機能を持っている一方、緑地システムの一部として、公園どうしを繋げるとともに、都市美化の重要な手段ともなっている。中国では秦朝から皇帝の専用道路と普通の道路を区分するために、道路の両側にマツが植栽されたことが知られるが¹⁾、都市の全域にわたって並木道を作るのは、中国近代の租界や租借地から始まり、他の都市に広がっていったとみられる。今日では他の国々と同様に並木は都市緑化の欠かせない要素となり、地域により、様々な樹種が選定され、それぞれの都市の景観の特徴が現れている。

青島市はドイツ、日本、中華民国に相次いで支配されたため、並木道もきわめて複雑な歴史を持っている。その影響は青島市の旧市街に植えられているトゲナシニセアカシア、ニセアカシア、クロマツ、プラタナス、イチョウなどの並木の樹種に見られる。一方、現在では青島市の市樹であるヒマラヤスギが徐々に植えられ、前からあった並木道とのコントラストが形成されている。本章ではまず青島の並木道

表 4-1 用いた写真の出典

番号	タイトル	景観年代	発行年代	発行	発行所	総数	町並枚数
①	青島古葉書 (1897～1914)	ドイツ時期 (1898-1914)	2005	陸遊・徐曉梅	青島出版社	263	37
②	青島写真案内 (附官民便覧)	第一次日本時期 (1914-1922)	1918	和気六郎	青島写真案内 発行所	711	69
③	青島市街写真帳	同上	1919	鈴木友二郎	高橋写真館	66	25
④	青島概覧	第一次中華民国 時期 (1922-1938)	1937	—	青島市政府接 待処	54	3
⑤	青島農林	同上	1932	—	青島市農林技 術所	20	4
⑥	青島指南	第二次日本時期 (1938-1945)	1939	曲佩光	青島特別市社 会局礼教科	58	10
⑦	青島指南	第二次中華民国 時期 (1945-1948)	1947	伊致中	中国市政府協 会青島分会	68	10

がいつ頃から建設され、如何なる樹種が選定され、地域に配置されたかを明らかにする。そして、政治と都市計画思想により、各時期の並木道の建設が如何に積み重ねられ、植民地の景観を形成したかを究明する。各統治期には並木道の建設が重視されたが、並木の植栽に関する記録は少なかった。記録を補足するために、本章で各統治期の写真を多く用いることとする。表 4-1 は本章で用いた写真の出典と枚数を示したものである。

第 1 節 最初の並木道

第 3 章で述べているように、ドイツの租借地になる前の青島地域には青島村、大鮑島、会前村などの村落が散在し、人々は主に農業や漁業に従事していた。漁民たちの安全を守るために、1467 年に海の近くに天後宮（寺院）が建てられた。1891 年に海防のために、清朝政府が青島に衙門と兵營を建設した。衙門は天後宮の東側に位置し、政治上の地位によって、この地域でもっとも重要な施設となっていた。この時点の青島には道路がまだよく整備されておらず、馬車が通る道路は僅かに 4 本、手押し車が通る道路も 6 本があるだけだった²⁾。

古写真（写真 4-1、4-2）によると、衙門と兵營の近くにある道路はよく整備され、建物のすぐ側に、ほぼ等距離で木が植えられていたことが分かる。これは青島市の最初の並木道である。ただし、この 2 本の道路では、片側だけに木が植えられていたし、衙門と兵營の近くにしか並木が見られなかった。それはおそらく政府と軍隊の権威を強調するために作られたものだったからと推測される。また、『青島市志』（園林志）の記録によれば、これらの並木にはイチョウ、エンジュ、ポプラの 3 種類の木が混在していた³⁾。イチョウ、エンジュ、ポプラはいずれも中国に古来からある樹種であり⁴⁾、四合院形式で建てられた衙門、兵營と合わせ、中国の伝統的な景観の特徴が現れていたと考えられる。



写真 4-1 清朝衙門の並木（『見証青島』⁵⁾より）

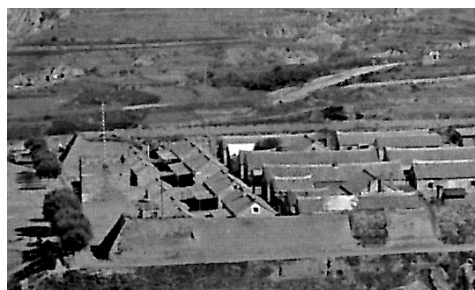


写真 4-2 清朝兵營外の並木（『見証青島』より）

第2節 ドイツ統治期の並木道の造成

第1項 樹木の保護条例

ドイツは近代に林業の先進国となり、樹木の保護を非常に重視していた。1898年に青島を占領した3ヶ月後の6月1日には衙門と兵営附近の樹木の保護を呼びかけ、「樹木を保存する」という告示を公布した⁶⁾。告示には「樹木が大きくなると観賞でき、日陰をつくり、雨を防ぐ」などの利点を宣伝している一方、樹木を損害する行為に対しては「外国人だと罰金を命じること。中国人だと罰金または労働の懲罰すること」という懲罰方法が規定されている。これは青島市最初の樹木の保護条例であり、市内の既存の樹木が保存されることとなった。

第2項 道路の建設

前章に述べたように1898年と1899年には「新都市の開発計画図」とその修正案が相次いで公布された。計画案に従い、市街地の中国人区と欧州人区が分けられていた。そして、従来の家屋が取り壊された中国人と外来の労働者に住む場所を提供するために、台東と台西で二つの中国人住宅地が建てられていた。欧州人区の中にはさらに住居地域、商業地域と工業地域に分けられていた。1906年の大港の開発と共に、附近の道路網も計画され始めた。こうして、青島では欧州人区、中国人区、台東鎮と台西鎮の住宅区、港埠区が建設され、都市の基本的なレイアウトが決定された。

都市の建設に伴い、道路は従前より発達し、1914年に道路の延長は80,650mに達した⁷⁾。ただし、欧州人と中国人の居住区が分けられたため、欧州人区の道路幅は20mで構築されたが、中国人区の大鮑島地区における道路幅は10mで、中国人住宅区ではさらに狭い幅の6mで構築された⁸⁾。これも当初大鮑島、台東鎮と台西鎮に並木が植えられなかった原因の一つとなった。

第3項 並木の植栽

青島市で最も早く竣工した道路はハインリヒ皇子街（現広西路）とされている⁹⁾。この道路は西側で駅につながっており、これが道路が一番早く完成させられた理由だと考えられる。道路の竣工を記念するためか、ドイツ総督府はベルリンから当時の市樹であったトゲナシニセアカシアの樹苗を青島に運び、並木として道路の両側に植えた¹⁰⁾（図4-1③）。ベルリンの市樹を植えたのはおそらくドイツ総督府が自国の街路景観の特徴を再現しようとしたからと推測される。しかし、現地調査によると、現在ではトゲナシニセアカシアはほとんど青島の市樹であるヒマラヤスギに替えられ、2本しか残っていなかった。

フリドリヒ街（後静岡町・現中山路南）とヴィルヘルム皇帝浜は洋行¹¹⁾、ホテル、レストランなどの商業施設が多く集まる、青島で有名な商店街であった。フリドリヒ街とその北側に連続する山東街は欧州人区と中国人区を貫き、両者をつなぐ重要な街路であった。しかし、欧州人区におけるフリドリヒ街には並木が植えられていたが、中国人区における山東街には並木が植えられていなかった（図 4-1⑤、⑥）。無論、中国人が住んでいた場所の他の道路にも並木は植えられていなかった。一方、図 4-1①と写真 4-3 によれば、ヴィルヘルム皇帝浜の西の部分に並木が両側で植えられたが、東の部分は片側だけに並木が植えられていたことが分かる。そして、フリドリヒ街にも海岸沿いのヴィルヘルム皇帝浜にもドイツから輸入されたニセアカシア類が植えられていた。

不可解なのは総督府の前に南北に延びているヴィルヘルム街（のち不入斗通）には並木が植えられていなかったことである。地図によれば、ヴィルヘルム街の幅員は他の道路より太く計画され、視覚上重要な軸線となっていたことが分かる。海岸と総督府をつなぐ街路が壮麗に見えるように、そこに緑地帯と並木が設けられたと推定される。この手法はロシア統治期の中国大連におけるサムソン路（現民生街）や居留地時代の日本横浜にある日本大通にも見られる。しかし、『土木誌』の記録によれば、この道路は日本統治期の 1918 年 3 月に完成されたという¹²⁾。1922 年頃の写真によれば、この道の中央に花壇が設けられており、両側には並木が植えられていた（図 4-2⑩）。並木の幹が非常に細いので、ドイツ統治期ではなく、第一次日本統治期に植えられたと判断できる。視覚上に重要であったが、交通上はさほど重要ではないので、その建設が遅くなったのかもしれない。

また、日本統治期の記録によると、欧州人区におけるミュンヘン街（ハインリヒ皇子街、太子街間）、イレネ街（キール街、フリードリヒ街間）、ルイトボルト街（ヴィルヘルム皇帝街、イレネ街間）、ベルリン街（キール街、ダンチヒ街間）、ブレーメン街もドイツ統治期に完成させられずに、日本統治期に完成させられたと分かる¹²⁾。道路が完成させられていなかったため、これらの道路にも並木が植えられていなかったと判断される。1924 年の調査によると、総督府前にあるティルピッツ街とビューロー街にはイチョウが植えられていたという¹³⁾。ただし、これはドイツ統治期に植えられていたものであるかどうか不明である。

図 4-1 はドイツ統治期の欧州人区における並木道の分布図である。同図によると、フリドリヒ街の東側の並木の配置密度は西側のよりも高かった。都市計画図によると、東側に住居と商業地域が設置されており、西側の鉄道附近には工業地域が設置されていた。おそらく、良い生活環境を提供するために、人々が集まっていた地域に並木が植えられたと推測される。しかも、住居地域の中心には総督府が立地していた。並木が植えられたのは政府の権威を強調し、都市の海側の正面に相応しい景

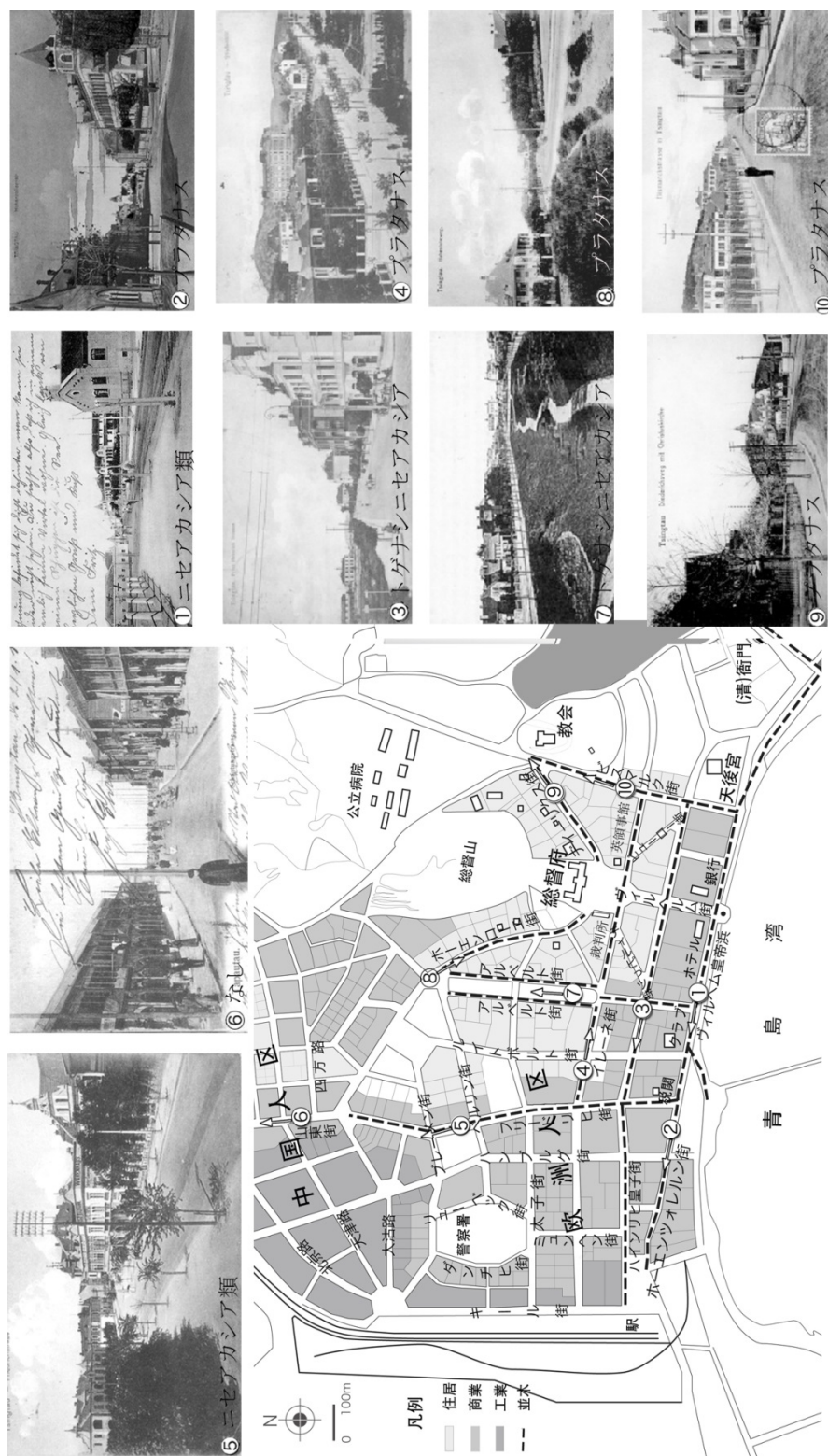


図 4-1 ドイツ統治期の並木道の分布と樹種 (『青島古葉書』と『青島市志』(園林緑化志)より作成。写真⑦のみ『近代青島的城市計画と建設』による)

観を作り出す目的もあったと推定される。

樹種としては、主にドイツから輸入されたトゲナシニセアカシアとプラタナスが並木として用いられていた。その理由についてはドイツから輸入されたニセアカシアが青島の土と気候に非常に適合し、1年で3mに伸び、山の斜面の緑化に有効であったからとされている¹⁴⁾。そのため、ニセアカシアが極めて多く植えられ、青島はイギリスの出版物で「ニセアカシア半島」と呼ばれた¹⁵⁾。ニセアカシア類は生長のスピードが速いことに加え、白い花が咲く、観賞性の高い樹種である。プラタナスに関しては「林業には用途がないが、この気候に適合しているし、形が大きくて奇麗で、並木と公園緑化樹に非常に適する」と『備忘録』に記されている¹⁶⁾。ニセアカシア、トゲナシニセアカシアとプラタナスはいずれもヨーロッパの樹種であり¹⁷⁾、ドイツ語の地名、洋風の建物と合わせ、全体として洋風の都市景観が創出された。泉対信之助は「五月となった、行路樹のニセアカシアプラタナスの青葉が初夏の強い日ざしに光る、白いニセアカシアの花が青い葉隠れにぶんぷんと香ふ、(中略)、市街の後方にある一帯の丘山の農緑は海の藍碧に相映する、(中略)、夏の青島は真に天下の極楽境であり、パラダイスである」と高く評価した¹⁸⁾。

第3節 日本統治期の並木道の整備と造成

第1項 道路の建設

1914年11月には日本が青島を占領した。元来の欧州人区と新市街地における海湾・山・街路等のドイツ語の名称はすべて日本の地名に変えられた。ただし、中国人区の大鮑島市街地、台東鎮と台西鎮の名前はそのまま使われている。日本統治期から道路の名称が何度も替えられているため、各時期の道路名称と並木の樹種を対照するために表を作成した(表4-2)。

第3章に述べているように、日本統治期には人口の激増にともない、市街の拡張計画が編成され、3期にわけて、拡張工事が行われた。ただし、第1期と第2期の一部分が実施されたが、大港付近の市街地は実施されなかった。新市街の建設はおもに上海町と所澤町の近く、ドイツ統治期に計画された港埠地域と若鶴山西側の間に行われた。ここには神社、小学校、様々な商業施設が集中し、日本人の生活中心地となっていた。

都市計画が実施されるとともに、道路の建設も進められた。前述したように、日本政府はまずドイツ統治期の未完成道路の完成を図っていた¹⁹⁾。元欧人区における未完成道路が1915年に、最も早く完成させられた。次いで1916～1918の3年間で第一期の都市計画で指定された区域にある上海町、所澤町、大和町、松根町、薄雲町、軽藻町などの道路が完成した。1918年の日本統治期の青島市街図と1913

表 4-2 道路の名称対照と並木の種類（筆者作成）

独	日	中	並木	出典	独	日	中	並木	出典
ヴィルヘルム皇帝浜	舞鶴町	太平路	A	①	北京街	北京町	北京路	△*	②&④
皇族街	姫路町	蘭山路	B	①&④	済南街	済南町	済南路	A*	②
ハインリヒ皇子街	佐賀町	広西路	B	①	山東街	山東町	中山路	C*	③
イレーネ街	久留米町	湖南路	C	①	李村街	李村町	李村路	×	②
フリードリヒ街	静岡町	中山路	Ã	①	芝罘街	芝罘町	芝罘路	×	②
アルベルト街	大村町	安徽路	B	⑤	易州街	易州町	易州路	×	②
ホーエンローエ街	治徳通	徳県路	C	①	即墨街	即墨町	即墨路	×	②
ディーリクス街	赤羽町	沂水路	C	①	滄口街	滄口町	滄口路	×	②
ビスマルク街	万年町	江蘇路	C	①	×	中野町	聊城路	A*	③
ビューロー街	熊本町	日照路	D-	④	×	新町東通	清平路	A*	②&④
ティルピッツ街	曙町	莒県路	D-	④	×	新町西通	臨清路	A*	②&④
ヴィルヘルム街	不入斗町	青島路	A*	⑥	呉淞街	呉淞町	呉淞路	A*	②&④
太子街	濱松町	湖北路	C*	②	上海街	上海町	上海路	A*	②&④
ベルリン街	麻布町	曲阜路	C*	②	フェリング街	松根町	恩県路	C*	②
プレーメン街	馬関町	肥城路	△*	②	ドイツ街	大和町	熱河路	A*	②
ルイトポルト街	高瀬町	浙江路	A*	④	フラオンロト街	青柳町	青城路	×	②
キール街	横須賀町	泰安路	A*	②&④	レイセン街	早霧町	冠県路	A*	③
ハンブルク街	深山町	河南路	A*	②&④	ヴィルヘルム王子街	若葉町	陵県路	A*	②&④
ミュンヘン街	英町	蒙陰路	—	×	皇帝街	所澤町	館陶路	A*	③
大沽街	大沽町	大沽路	△*	②	コルモラン街	軽藻町	甘肅路	C*	③&④
天津街	天津町	天津路	△*	②	アウグスタ皇后街	花咲町	武定路	A*	③&④

注:①～③表4-1に参考する ④『青島市志』(園林緑化志) ⑤『近代青島の都市計画と建設』 ⑥『見証青島』
Aニセアカシヤ Bトゲナシニセアカシヤ Cブラタナス Dイチョウ Ãニセアカシヤ類 *日本時期 -時期不明 △樹種不明

表 4-3 1916 年と 1917 年に造られた並木道（『青島軍政史』²⁰⁾ より）

町名	並木種類	植樹数（本）	町名	並木種類	植樹数（本）
高瀬町	胡藤	164	天津町	唐楓	105
馬関通	同	84	英町	同	62
深山町	同	223	麻布町	鈴掛	97
河南町	同	485	濱松町	同	167
横須賀町	同	293	直隸町	同	185
中野町	同	277	久留米町	銀杏	119
豊橋町	同	33	熊本町	同	42
早霧町	同	185	忠海町	同	39
早舟町	同	119	北京町	梧桐	127

注：注胡藤はニセアカシヤ、鈴掛はブラタナス、梧桐はアオギリである。

年のドイツ統治期の青島市街図を比較すると、新たに構築された道路は主に若鶴山の下、台西鎮の高地、すなわち第一期と第二期工事で指定された地域に集中していたことが判明する。日本統治期に延長された道路は 56,480m であり、ドイツ統治期の道路を加えると、総長 136,480m に達した⁷⁾。

第2項 並木の補植と植栽

前述したように日本統治期には青島市全体を大公園にする計画が作成された²¹⁾。並木道は公園を連結し、青島市街の美を発揮していたと記されていることから²²⁾、日本統治期には並木道の建設が重視され、既に一定の成果が現れていたと考えられる。まず、旧市街で枯死していた並木、或いは並木が植えられていなかった道路には並木が補植された。このうち、最も興味深いのはドイツ統治期に並木が植えられていなかった中国人区の山東町にも日本統治期にプラタナスが植えられたことである(図 4-2⑩)。これには二つの理由があると考えられる。一つは日本統治期に入ってから、この町には日本人が経営していた商業施設が徐々に増加し、単純な中国人商店街ではなくなったことである。もう一つは新市街が開発されたことに伴い、山東町が新市街と旧市街をつなぐ重要な街路となっていたことである。また、中国人区の西側に位置する北京町(図 4-2⑬)、天津町、大沽町などの道路にも並木が植えられていた¹⁵⁾。これらの道路にも山東町と同じように、日本人の会社や店舗が建てられ、重要な商業地域となっていた。これに対し、山東町東側にある中国人が住んでいた場所における道路には相変わらず並木が植えられていなかった(図 4-2⑪)。表 4-3 は 1916 年と 1917 年に旧市街の道路に補植された並木及び並木が新たに植え付けられた道路である。

旧市街に加え、新市街でも並木が道路の開発とともに植えられるようになった(図 4-2)。新たに造られた並木道は主に滄口町と大和町の間に集まっていた。ここには住宅、学校、商店、郵便局などが集まり、日本人の生活の中心となっていた。特に小港と大港の間に伸びている葉桜町、所澤町と葉桜町の両側には青島取引所や横浜正金銀行、高橋商会など数多くの金融機関が分布し、新市街で最も重要な商業地域だったと考えられる。

並木の樹種としては表 4-2 が示しているように、ニセアカシアとプラタナスが引き続き採用され、旧市街にも新市街にも最も多く植えられていた。これは日本政府が新市街と旧市街の景観の連続性を保とうとしたためと考えられる。同時にイチョウ、アオギリ、トウカエデ、カシワ、ギンドロ、などの全部で 15 種、8,000 本の樹が並木として植えられ、ドイツ統治期より並木の種類が豊かになっていった²²⁾。図 4-2⑪-1 と ⑪-2 が示しているように、所澤町にはおもにプラタナスが植えられている一方で、寶栄洋行の前の道路にはマツも植えられていた。そして、街路の角

にもマツの姿がよく見られた。また、『青島市志』（園林志）によると、万年町と大村町の一部にはサクラも植えられていたという。これらマツやサクラに日本の伝統的な景観の特徴が現れていたとみて良いだろう。この他にも、そして、所澤町でプラタナスとマツ、安徽路でトゲナシニセアカシアとサクラが混在していたことから、この時期には同じ道でも並木の樹種が統一されていなかったことが分かる。



図 4-2 日本統治期の並木道の分布と樹種（『青島写真案内（附青島官民便覧）』^{23）}、『青島市志』（園林緑化志）により作成）注：写真⑪は『見証青島』^{24）}より、⑫⑬⑭⑰⑱⑳-2㉑㉒㉓は『青島写真案内（附青島官民便覧）』より、⑮⑯⑰⑱⑳㉑-1は『青島市街写真帳』^{25）}（1919）より

日本統治期にはドイツ統治期とほぼ同様にヨーロッパの樹種が用いられ、青島で西洋風の街路景観が造られた。これは日本政府がドイツによって構築された街路景観の影響を受けたからと考えられるが、実際同時期に日本国内でも樹種の生長の速さや洋風の建物との調和が強調され、外来種が重視されていた傾向と一致していた²⁶⁾。1874年に八重洲通り堀端に植えられたニセアカシアが失敗したためか、その後街路樹として多く植えられることはなかった。それに対し、プラタナスは最も多く用いられ、1921年に東京の街路樹の34%を占め、のちの震災復興によりさらに45%に至った²⁶⁾。日本国内の街路樹の選択からみると、むしろ青島の並木道の建設は単純なドイツの影響ではなかったと推定される。

第4節 中華民国統治期の並木道の整備と造成

第1項 道路の計画と建設

1922年には中華民国北洋政府が青島を回復し、商埠地として位置づけた。商埠地で自治を実施するために、政府は同年「青島市施行市自治制令」を公布した。しかし、政治上の不安定性により、自治の実施ができず、都市の建設もあまり進まなかった²⁷⁾。1928年に出版された『膠澳志』（交通志・道路）「膠澳市街道路の名称と番号一覧表」によると²⁸⁾、道路はすべて中国の地名に変えられており、都合三度命名されたことが知られる。そして、新たに与えられた道路名も若干ある。これらの道路はおもに台西鎮の東南部、台東鎮と大港の間、南海湾の東側に分布している。これはおそらく市街建設の計画が策定された時に命名されたと推測される。しかし、1928年の「青島市街地図」²⁹⁾には計画された道路は未だ破線で書かれており、道路の建設はあまり進められなかったと推定される。

前章で述べたように、此の時期の青島市の本格的建設は1931年から始まった。1933年³⁰⁾と1934年³¹⁾の『工務紀要』によると、旧市街の道路が整備されたのに加え、栄成路以東の地域が特別建築地（現八大関別荘地）として開発され、新しい道路も構築された。そして、湛山附近、台東鎮の北西工業地、台西鎮における道路の路盤が計画され、順次に建設されることになった。新市街の開発に伴い、新たに建設された道路は41,128mとなった³²⁾。

第2項 並木の補植と植栽

北洋政府時期には道路の新規開通はあまり進められなかったが、旧市街では並木が植えられたと考えられる。なぜなら、『青島農林』³³⁾の記録によれば、1929年と

1930 年の 2 年間に元中国人区の李村路には 46 本の並木が植えられていたからである（表 4-4）。しかし、李村路の延長は 465 m であり、並木の間隔は 5m とすれば、片側で 94 本、両側 188 本が植えられていたはずである。この 3 倍の差からみると、初めて道路全体に並木が植えられたのではなく、部分的に補植された可能性が高い。李村路とほぼ同様の長さを有する四方路、即墨路、済寧路もおそらくそうだったと推測される。並木の補植だけではなく、政府は都市の既存の並木に対する保護を重視し、1923 年 5 月 20 日に「膠澳商埠の並木の保護規則」を公布した³⁴⁾。規則により、並木を伐採すること、並木の支柱を抜くこと、並木の下で火をおこすことなどが禁止されていた。これで既存の並木はよく保護されることになった。

1929 年に青島は中華民国南京政府に回復されたが、道路の名称はほとんど変わらなかった。ただし、5 月 22 日に、中国の政治家・革命家である孫中山を記念す

表 4-4 中華民国統治期に植えられた並木（『青島農林』より）

道路 名称	樹 種	株数			合計	道路 名称	樹 種	株数			合計
		1929	1930	1931				1929	1930	1931	
大鮑島中国人区						太平湾付近の新市街					
李村路	A	29	17		46	湛山一路	A	149	69		
四方路	A	35	11		46		B			113	331
即墨路	A	25	12		37	湛山二路	A	108	89		
芝罘路	A	51	47		98		B			142	339
易州路	A	45	35		90	湛山三路	A	95			
博山路	A	51	34		85		B			148	243
済寧路	A	21	30		51	湛山四路	A	57			
台西鎮							B			58	115
単県路	A	17	24		41	湛山五路	B	99			
雲南路	A	47	61		108	太平岬一路	B			224	224
觀城路	C	60	30		90	太平岬二路	B			79	
東平路	C	44	21		65		A	58			137
滋陽路	C	34	15		49	太平岬三路	A	68			
寿張路	C	75	27		102		B			62	130
費県路	C	82	38			太平岬四路	B			50	
	A	12			132		A	133	22		155
台東鎮及び大港付近						太平岬五路	B			38	38
遼寧路	A	51	89	58	198	太平岬六路	B			33	33
威海路	A	26	30	31	87	湛山大路	B			316	316
昌樂路	A			52	52	旧市街の補植					
益都路	A		41		41	中山路	B	16	14		
濱県路	A		58		58		A			50	80
曾県路	A		53		53	安徽路	B	18	7		25
華陽路	A		55		55	蘭山路	B	6	4		10

注：Aニセアカシア Bトゲナシニセアカシア Cプラタナス

るために、「青島の銀座」と呼ばれていた静岡町は山東路に改称され、さらに「中山路」と再命名された³⁵⁾。このようにドイツ統治期から非常に重要だった商店街に記念的な機能が与えられた。しかし、道路両側の並木の樹種は替えられなかった。

それに対して、もう一つ重要な商店街であった海岸沿いの太平路では植栽の形式が改変され、並木の樹種も替えられた。写真 4-3 と写真 4-4 を合わせてみれば、並木の下にある花壇がよく整備され、花壇の間にはベンチが設置されていたことが分かる。こうして、並木の形式は変化に富むようになった。道路の片側だけではなく、両側に並木が植えられていたことが分かる。しかも、花壇内の並木はニセアカシア類ではなく、プラタナスが植えられていた。また、写真 4-5 と写真 4-6 を合わせてみると、海岸通りの並木はさらにクロマツに替えられたことが分かる。『青島・済南絵葉書』の出版年は不明だが、手前の部分に栈橋公園が写されているので、写真は 1934 年以降に写されたものだとは判断できる³⁶⁾。ただし、クロマツは中華民国統治期に植えられたものであるか、第二次日本統治期に植えられたものか不詳である。これはおそらく海岸の強風に対応するためだったと考えられる。現在、海岸沿いの松林は青島市独特の優れた景色になっている。

図 4-3 は中華民国統治期並木道の分布を示したものである。ドイツ統治期・日



写真 4-3 日本統治期の海岸通り（『青島市街写真帳』より）



写真 4-4 1932 年の海岸通り（『青島農林』³⁹⁾より）



写真 4-5 1947 年の海岸通りの西側（『青島指南』³⁷⁾より）



写真 4-6 海岸通り（年代不明、『青島・済南絵葉書』³⁸⁾より）

本統治期と比べ、もっとも異なる点は旧市街の中国人区の道路に並木が補植されたことである。1932年に出版された『青島農林』には1929年、1930年、1931年の3年間に植えられた並木が詳細に記録されている。この記録によれば、大鮑島、台西鎮、台東鎮と大港の間、太平湾海岸における道路すべてに並木が植えられていたことが知られる。そして、日本統治期に造られた貯水山下の市街にも並木が補植された。

1931年以降、新市街の開発が徐々に行われ始めた。新市街の開発とともに並木は「道路の建設とともに進めるべきだ。そして、損害によりなくなった並木も補植すべきだ」という政策が取られていたことが『三年間の行政概要』に書かれている⁴⁰⁾。それだけではなく、並木の管理もよく強調されていた。例えば、青島で最も多く植えられたニセアカシアの景観を維持するために、毎年の夏と秋には並木が切り整えられていた⁴¹⁾。そして、ニセアカシアは根が浅く、倒れやすいため、支柱で支えることもよく行われていた。



図 4-3 中華民国統治期の並木道（筆者作成）

並木の樹種は引き続きニセアカシア、プラタナス、トゲナシニセアカシアであった。ドイツ統治期、日本統治期と同じ樹種が使われ、都市の道路景観の統一性確保が図られた。これには、中国人区の道路も含まれ、青島市の並木道網は初めて全体的に考えられた。

第3項 実現されなかった並木道

ここまで造られた並木道は都市を美化する重要な要素として、その建設はドイツ、日本、中華民国政府に重視されたが、都市計画上の位置づけはとくに見られなかつ



図 4-4 幹線道路系統図（「青島市施行都市計画方案初稿」より）

た。1935 年の「青島市施行都市計画方案初稿」ではロンドン、ニューヨーク、ベルリンとパリの交通幹線を参考にし、青島の交通システムが計画された。この計画には道路が林蔭大道（ブールバール）、交通幹線（隣の都市とつながる道は 30m・50m、市内交通線は 25m・40m）、次要幹線道路は 16・22m、支路は 10m・16m、里衛は 3m・5m に分けられ、設計された。図 4-4 は都市の幹線道路系統図である。都市計画図（図 3-7）にも見えるように、「幹線道路の両側に細長い空地を留め、中に草と木を上、道路景観を飾り付ける。（中略）。ただし、その幅は少なくとも 1.5m 設置するのが適する」とあって、幹線道路のオープンスペースとしての機能が重視されていたことが分かる。都市中心部と中山公園、海水浴場、砲台につながる軸線道路の飾り付けは「必ず壮麗に見えるように」と述べられている。並木道は都市の景観軸線として計画され、これはおそらくパリのシャンゼリゼブールバールの軸線景観の影響を受けたと思われる。中心軸線だけではなく、北側の四方、西側の旧市街と東側の浮山所の各中心部につながる道路も幹線道路として設定された。このように、ここまでの並木道の建設と異なり、並木道とくに都市交通の軸線となっている幹線道路の計画は都市計画に位置づけられることになった。しかも、公園や風景が優れた地域を連絡し、公園緑地のつながりとしての役割が明らかになった。ただし、残念ながら、この計画案は実現されなかった。

第 5 節 第二次日本統治期の並木道の破壊

前述したように、1938 年には日本が再び青島を占領し、1941 年には興亜院青島都市計画事務所が「青島特別市母市計画」を公布した。しかし、1945 年に戦争が終わるまで、新たに計画された道路は 13 本だけであった。これらの道路はほぼ太平山の北側に集まり、全長 4.5km に過ぎなかった⁴²⁾。1947 年の青島市街地図によると、これら 13 本の道路も建設は実施されなかったことが分かる。しかも、青島の公園が占用されたり、破壊されたりし⁴³⁾、新たな建設はなかったことから、並木道の建設も進められなかったと推定される。

さらに、労西、李村、夏荘、四滄各区において合計 27,113 本の並木が全部損失したという⁴⁴⁾。

第 6 節 小括

青島では清朝に既に並木道の原型が出現していたが、本格的な並木道の建設はドイツが青島で近代的な交通道路を構築してから始まって、各統治期の市街開発に伴い、さらに拡張されていった。しかし、1935 年以前に並木道は都市美観上におい

て、重要な要素として引き続き建設されていたが、重要な道路しか並木は植えられなかった。しかも、ドイツ統治期に中国人と欧州人の居住区が分けられていた結果として、第一次日本統治期までには中国人が住んでいた場所には並木が全く植えられておらず、並木道の分布は植民地的なゾーニングの影響が顕著であった。

その状況は青島の支配が中華民国政府に回復されてから、徐々に改善され、並木が都市全体を覆うようになった。そして、青島市全体に対して都市計画が行われ、その中に並木道は都市の軸線や公園緑地相互の繋がりとして、都市計画案と結びつけられることがなかった。並木だけではなく、幹線道路の両側に 1.5m の緑地帯も設けられ、街路のオープンスペースの機能も重視されることになった。

一方、第 3 章で明らかにしたように、ドイツが建設した総督記念碑、日本が建設した青島神社と忠魂碑のような記念的機能と強烈な民族文化的特徴を持っていた施設が統治期間の終了と共に、すべて壊されたことと異なり、並木道の景観は統治の主体にかかわらずに、連続性が保たれていたという特徴がある。ドイツは最初にトゲナシニセアカシア、ニセアカシア、プラタナスを輸入し、青島で自国の景観的特徴を再現した。このように、並木は単純に都市を美化する機能に文化的象徴の機能が加えられたと考えられる。しかし、ドイツと異なり、後の日本と中華民国は自国の樹木を並木としては用いず、ドイツ統治期の樹種を引き続き青島に多く植えていた。これは文化的特徴を強調することよりも、並木道では新旧市街のつながりを考慮し、都市景観の統一感を維持する意図と、樹種の生長の速さや西洋の樹種の世界中での普及の現実と関係があったと考えられる。そのため、ドイツから輸入された樹種は青島の並木の基調を決定し、その影響が現在までも見られる。ただし、1988 年にヒマラヤスギが青島の市樹となっただけからは、並木として多く植えられ、新たな道路の景観が作り出されつつある。

注：

- 1) 汪菊淵 (2006)：中国古代園林史、中国建築工業出版社、38
- 2) 趙琪修・袁榮 (1928)：膠澳志、成文出版社、873
- 3) 青島市史志事務室 (1997)：青島市志 (園林緑化志)、北京新華出版社、74
- 4) 『青島古樹名木志』によれば、青島市には樹齡が 1000 年以上のイチョウとエンジュノキ、
280 年のポプラが現存していることから、これらの樹木は中国で古来から植えられていた
樹種だと判断できる。
- 5) 青島市档案馆 (2009)：見証青島 (上巻)、青島出版社、11-12
- 6) 謀楽 (1912)：青島全書、青島印書局刊、70
- 7) 田久江南 (1921)：青島要覧、新極東社発行、207
- 8) 趙琪修・袁榮 (1928)：膠澳志 (道路志)、成文出版社、1-2
- 9) 青島市史志事務室 (1997)：青島市志 (園林緑化志)、北京新華出版社、74
- 10) 青島市志事務室・林業局・都市園林局 (2007)：青島古樹名目志、中国海洋大学出版社、
66
- 11) 植民時期に外国人が経営していた会社のことを「洋行」と言う。
- 12) 青島守備軍民政部 (1920)：土木誌、36
- 13) 青島市史志事務室 (1997)：青島市志 (園林緑化志)、北京新華出版社、74
- 14) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、208
- 15) 華納著・青島市档案馆訳 (2011)：近代青島的城市計画と建設、東南大学出版社、188
- 16) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、448
- 17) 青島市档案馆 (2007)：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、158
- 18) 泉対信之助 (1922)：青島二年、帝国地方行政学会、19
- 19) 田久江南 (1921)：青島要覧、新極東社発行、208
- 20) 青島軍政史：自大正 3 年 11 月至大正 6 年 9 月、第 5 巻、道路並木
- 21) 青島守備軍民政部 (1920)：土木誌、56
- 22) 田久江南：青島要覧、新極東社発行、240、1921
- 23) 和気六郎 (1919)：青島写真案内 (附官民便覧)、青島写真案内発行所
- 24) 青島市档案馆 (2009)：見証青島 (上巻)、青島出版社、45
- 25) 鈴木友二郎 (1919)：青島市街写真帳、高橋写真館
- 26) 武内和彦・米瀬泰隆 (1996)：東京における街路樹の樹種変遷と環境思想、国際交通安
全学会誌、Vol. 22、No. 1、24-31
- 27) 趙琪修・袁榮 (1928)：膠澳志、成文出版社、74
- 28) 趙琪修・袁榮 (1928)：膠澳志、成文出版社、3-24
- 29) 山東案内発行所 (1928)：山東案内、附図
- 30) 青島市工務局 (1933) 工務紀要、55-57

- 31) 青島市工務局（1934）：工務紀要、62-69
- 32) 青島市政府接待処（1937）：青島概覽、 66
- 33) 青島市農林技術所（1932）：青島農林、133-147
- 34) 『青島全書』にはドイツ時代に公布された告示・法規が収集されている。
- 35) 李明・張岩（2009）：中山路-街と都市の歴史、中国海洋大学出版社、6
- 36) 著者不明：青島・済南絵葉書，出版地不明，出版年不明。青島 64 枚，済南 32 枚の絵葉書がある。1934 年の『工務紀要』によると、棧橋公園は 1934 年に竣工したという。絵葉書に棧橋公園が写されているので、この本は 1934 年以降に出版されたものと判断できる。
- 37) 伊致中（1947）：青島指南、中国市政府協会青島分会
- 38) 出版者不明（年代不明）：青島・済南絵葉書、出版地不明
- 39) 青島市農林技術所（1932）：青島農林
- 40) 青島市政府秘書処（年代不明）：三年間行政概要（1932-1934）、24
- 41) 青島市政府接待処（1937）：青島概覽、132、
- 42) 青島特別市建設局（1942）：大青島市を建設する 5 年計画、道路建設付表
- 43) 青島市史志事務室（1997）：青島市志（園林緑化志）、北京新華出版社、79
- 42) 青島市農林事務所（1946）：青島特別市建設局農林事務所民国三十五年二月分工作報告、青島市档案馆に所蔵される。

第5章 結論

これまで、青島の都市計画・建設と結び付け、森林（面）、公園（点）、並木道（線）を取り上げ、青島の公園緑地の形成と変容の過程を考察してきた。その結果、まず戦前まで青島の公園緑地は、各統治期に支配者たちが継続的に理想都市を追い求め、都市建設において獲得した巨大な成績であると結論することができる。とくに森林は近代青島において「港」と「鉄道」と同様に重要な施設だったとされ¹⁾、広域で近代青島の禿山の状況を大幅に改善した。それに加え、公園と並木道は町を飾り付け、健康、快適、調和の景観を構成していた。そのため、青島は「中国のブライトン」²⁾、「パラダイス」³⁾、「一番美しい都市」のように非常に高く評価されていた。

一方、戦争によってグローバル化は青島市に公園緑地理論をもたらしたが、その建設は支配者の都合によって行われ、公園緑地の分布の不均一が発生し、植民文化どうしが衝突したことも無視できない。それは青島市だけではなく、近代に租界、租借地として発展してきた都市の共通点でもある。本章の第1節では森林、公園、並木道の要素ごとに現れていた特徴・傾向及びその共通点と相違点を比較する。第2節では3要素を統合し、各統治期に用いられた都市計画・建設理論と結び付け、青島市の公園緑地は一体いかに取り扱われ、如何なる特徴をもち変化したのを明らかにする。第3節では、青島市の都市としての一般性と独自性を見ていくこととする。つまり、青島市における公園緑地の取り扱い方法はどの程度に他の近代都市に適応するのかを検討しようとする。

第1節 要素ごとの変容の特質

森林、公園、並木道は面、点、線の要素として共に青島市の緑地を構成していたが、そのネットワーク中でそれぞれの役割が与えられ、一つの時期においても植民

地の支配や国々の伝統・文化から受けた影響が異なっていた。戦前までの各統治期を重ねてみれば、各要素には継承あるいは破壊という異なる傾向が現れていた。

1) 位置づけの変化

少し意外だったのは3つの要素の中で、最初からもっとも明確な位置づけを持っていたのは森林であったことである。ドイツ統治期から森林は保水、衛生状況の改善と風景の向上など生態や景観上の役割が与えられ、のちの日本時期と中華民国時期にこの位置づけはあまり変わらなかった。ただし、都市建設上解決の急務によって、森林建設の重点は時代ごとにすこしずつ異なった。ドイツ統治期に森林は保水、衛生状況の改善、外国人に夏の滞在する場所を創出するために、水源涵養林、市街地の山林、海水浴場の背景林など異なる目的の森林が造られた。日本統治期には人口が急激に増加したので、森林は主に水源付近で造られ、水源涵養林は植林全体の半分以上を占めていた。中華民国統治期に造られた森林から見ると、前の時期より、風景林の割合がたかくなって、森林は風景の調節上の機能が重視されたことが分かる。第2次日本統治期には計画案が実施されなかったが、その中に森林は都市の無秩序の拡大を抑制する緑地帯として都市の外側に設置され、その位置づけは最も明確だった。

公園はこの3つの要素の中で、唯一都市計画図に含まれた緑地空間だった。しかし、最初に森林のように機能や役割がはっきり与えられたことがなかった。ドイツ統治期には公園の定義は特に定められず、しかも、樹木だけが植えられた場合もあったし、最初の段階では苗圃として使われたことも多かったので、森林との境が不明確だった。一方、ドイツ統治期に形成された公園特に都市計画図に含まれた公園は殆どが総督府や教会、駅など重要な施設の周辺に立地し、公園分布の均一性や住民の利便性を考慮した施設というよりは、重要な施設の附属空間の性格が強かった。その後、公園の定義が不明の状況は日本統治期に改善されることになった。青島市を一つの大公園として建設する目標が提出され、森林は郊外の公園として位置づけられるとともに、公園は当然市街地内部を公園化する役割を担うことになった。それだけではなく、公園は「運動、娯楽、市街ノ記念」とはっきり定義され、神社や記念碑、娯楽の公園が構築された。このうち、注目すべきは「市街ノ記念」であり、それは日本時期に造られた公園の一番の特徴であり、公園の緑地に象徴の意味が加えられた。中華民国統治期の前期に公園の位置づけは不明確だったが、公園の構築活動と1935年の「施行方案」を合わせてみると、公園は主に市民に遊行、運動する場所を提供する機能を果たしていたことが分かる。そして、この時期に公園の機能はあまり日本統治期と変わらなかったが、その分布から公園は市民とりわけ中国市民の娯楽空間としての位置づけが明確だった。

これに対し、各要素をつなげるものとしての並木道の位置づけは中華民国統治期まで曖昧だった。ドイツ統治期から重要な道路だけに並木が植えられてから中華民国統治期に並木道が普及するまで、「衛生都市」や「公園都市」など都市建設の目標を実現するために、並木道は重要な要素として引き続き建設されていった。だが、都市計画において、並木は公園緑地の繋がり或は都市景観の軸線としての位置づけが与えられなかった。日本統治期に「青島市内外ノ諸公園と連絡シ所謂青島大公園ヲ大成セムトスル計画アリ」⁴⁾ という記述があったが、並木道で連絡することは明確には指摘されていなかった。一番明確に並木道（林陰路）の位置づけが見られたのは1935年の「施行方案」だったが、残念ながら、計画案は実現されなかった。

2) 分布と空間の変化

全体的に言えば、青島の公園緑地は地形を尊重し、自然景観をうまく利用した優れた例だと考えられる。まず、青島市全体を一つの公園として見てみれば、森林は高い山々と低い海岸を緑化し、地形の変化に富む場所で大きいみどりの背景を構成し、公園は町を飾り付け、重要な施設の周辺あるいは建築しにくい場所に点在し、並木道が部分的に緑地施設どうしのつながりを強めた。青島に2年住んでいた泉対信之助が次のように青島の景色を描写している。これらの丘山を背景にした市街の全景は恰も一幅の油絵である、舞鶴濱に寄せては返す藍碧の波濤を前にして、全然西洋風の家屋がづらりと並んで居る、街路樹があり、公園や広場や庭の中に木立があり、それに丘や平地のところどころの林がある、この緑樹の間に点綴された建物は赭い瓦に白か卵黄色又は褪紅色など色とりどりの壁であり、(中略)、まことに一幅の油絵である！」⁵⁾。

具体的にいえば、森林は殆ど海岸、山々、河に分布していた。ドイツ統治期の市街から徐々に近郊、郊外と労山名勝風景区に拡大されていった。市街から遠く、しかも主に環境の改善や水源の涵養の役割を果たした森林は継続的に建設され、景観の連続性が高かった。そして、森林の分布は3つの要素の中で、唯一植民地的な特徴が見られない緑地施設であった。

並木道は市街の緑地施設であるが、公園ほど目立つことがなく、多くの人々に無意識的に使われている緑地施設だと考えられる。ドイツ統治期でも日本統治期でも並木は総ての道路に植えられたわけではなく、交通上、景観上或はつながりとして重要な道路だけに植えられた。ゾーニングからみると、並木道は殆ど住居、商業と観光の用途の地域に設けられ、工業地域には植えられなかった。ただし、中華民国統治期に普及するまで、並木道はすべて欧州人と日本人が集中していた地域に造られ、中国人区には並木道がつくられず、植民地の緑地ならではの特徴が強かった。

変化がもっとも大きく、文化的衝突が最も激しかった緑地施設が公園だった。ま

ず、その分布は重要な施設の周辺、建築しにくい場所と風景の良い場所に配置される傾向が現れた。政治、文化の要素をおいておくと、公園の立地は青島の地形と自然景観をうまく利用していたといえる。ただし、並木道と殆ど同様に、公園は主に欧州人と日本人の住居地域と商業地域に設けられ、中国人区とりわけ中国人労働者の住居地域には一つも設置されなかった。このような背景を前提とすると、中華民国統治期に初めて台東鎮と台西鎮で造られた公園は憩う、運動する場所を提供する場所だけではなく、寧ろ政治上の脱植民地化、公園で本当の公平と平等を実現する意図が込められていた解釈することができる。

空間においては、全体的に言えば、ドイツ統治期と日本統治期には公園の形式は自然式に偏っており、海岸や谷や煉瓦場の跡地などの地形を利用し、自然的な空間が作り出された。ただし、政府や宗教などの重要性を強調するために、ドイツと日本がそれぞれ総督府前の広場と青島神社のような軸線を持つ空間も作り出した。政治施設と記念施設の尊厳と神聖を強めるためにこの二つの緑地は軸線を持っていた広場の空間は完全に左右対称に設けられ、秩序を持つ空間を創出し、青島神社には参道のサクラとクロマツで造られた参道景観が記念・象徴の雰囲気盛り上げた。

すこし意外なのは、中華民国統治期に造られた多くの公園（改善された中山公園、新たに開拓された棧橋公園、西鎮公園）と唯一の大学であった国立山東大学の庭園は平面幾何式の構図で設計され、西洋式の空間が創出されたことである。西洋式の公園空間に加え、芝生や噴水などの西洋の公園要素も輸入され、完全に西洋式の公園が造り出された。中華民国統治期には脱植民地化のために、自国の教育を発展させ、外国特に日本の製品を拒むなどの活動を奨励した。建築界にもナショナリズムの波があり、中国伝統式の建物或は外国の技術を利用する折衷式の建物が多く建てられた。しかし、これらの愛国主義の活動とことなり、公園の地割や空間構成には西洋風の幾何学的な特徴が現れていたことに驚かされる。ただし、公園の入口には牌樓、水族館や「回瀾閣」など重要な建物は中国の伝統的な様式で建てられ、中国の文化のシンボルとなった。

3) 樹種の選択の変化

植民支配されていた都市の建築や町並みが植民文化から受けた影響はよく注目されているのに対し、植物景観に蓄積された植民文化はあまり注目されていない。実際、植民支配の結果の一つとして青島市の公園緑地を構成している植物の大多数が外国から持ち込まれたことを指摘することができる。森林の章で述べたように日本統治期に青島の森林には地元の樹種は十分の二三しか占めていなかった。植民支配の影響は植物景観まで浸透しており、しかも、形だけではなく、景観を構成する材料である樹種まで大きな影響を与えたことが分かる。建物の形式は伝統的な形と

違うが、少なくとも建物を造る材料は地元で調達された。こういう視点からみれば、植物景観が植民支配からうけた影響は建物より圧倒的に大きかったと考えられる。

当然、持ち込まれた樹種のはドイツと日本からのものがもっとも多かった。ただし、森林、公園と並木道に用いられた樹種への影響の程度は少し異なっている。森林においては、ドイツのニセアカシアと日本のクロマツが多く植えられ、両国の影響は大体同様だった。それはこの2つの樹種は厳しい生態環境に適応性が高かったからである。ドイツから輸入されたニセアカシア類は瘠せた土地に適応性が高く、生長が速く、しかも針葉樹と混植するには一番よい選択肢だった。クロマツは「遷移初期種の陽樹」であり、青島の岩石土、強風、海岸の塩気などに強いので、青島の山と水源涵養林に最も多く用いられた。このように、植えられた樹種の面積からみると、日本とドイツからの影響はほぼ同じだったと考えられる。

公園においては日本の樹種の影響は完全にドイツに勝っている。しかも、その状況は寧ろドイツの支配者によってもたらされた。樹種の包装、種の保存と運送する費用など様々な原因で、日本から多くの樹種を青島に輸入した。この中でも、サクラの影響が一番大きかった。ドイツ統治期から中山公園はサクラの景観で有名となり、1930年代に青島のサクラ祭りは中国全国で有名な催しとなっていた。ドイツが日本のサクラを輸入し、そして大規模に植えたのはドイツが日本の武士道精神を尊敬していたからといわれている⁶⁾。そうして、日本が未だ青島を占領していないうちに、日本の代表的な植物も青島に輸入され、青島の植物景観に大きな影響を与えていた。日本統治期に入って、単純な観賞ではなく、日本の文化とくに青島神社と忠魂碑の記念施設とセットとして、参道が造られたことによって、サクラもクロマツも日本の象徴であることが明らかとなった。

公園の空間が西洋式で造られたのと同様に、中華民国統治期には特に植物景観で自国の文化を象徴させようとする努力はあまり見られなかった。わずかに中山公園で牡丹園が造られ、60、70種類のボタンが収集されていた。ボタンは中国の文化で「花の王」とされ、中国の国花として選定する期待も高い。ボタン園の構築には中国の文化の浸透を認めることも可能である。他方、日本統治期の花見活動の影響をうけ、中華民国統治期には花見活動が続けられ、全国の観光客を迎え、青島の名勝として有名だった。そして、この時期で青島に活躍していた作家たちは中山公園の花見活動を題材にするなど、サクラは青島の文化の一部となったとさえいうことが出来る。

一方、並木道にはドイツの樹種が多く植えられていた。青島で最初の道路であった広西路が完成した際にはドイツ総督府がわざわざベルリンからトゲナシニセアカシアを青島に運び、並木として植えた。ニセアカシア類以外、「林業には用途がないが、(中略)、形が大きくて奇麗で、並木と公園緑化樹に非常に適する」プラタ

ナスも多く植えられた。この2つの樹種はドイツから輸入され、洋風の建物とともにドイツの文化浸透が見られる。道路景観の統一性を維持するためか、この2つの樹種は戦前まで、引き続き並木として青島の街路に植えられた。ただし、現在、ニセアカシアやプラタナスの並木は徐々に青島の市樹であるヒマラヤスギや中国従来の樹種であるイチョウに替えられることになり、市や国の文化が強調される一方、並木景観は昔とのつながりが失われつつあるおそれもある。

このように、戦前までそれぞれ植林樹種と観賞樹種の代表として、ドイツのニセアカシア、日本のクロマツとサクラは初期から現在まで用いられ、青島の公園緑地景観を構成している。分布の範囲、用いられた期間の点から、植物景観は青島市に最も大きな影響を与えたといえるだろう。

以上、森林、公園、並木道を取り上げ、青島における公園緑地は都市発展とのかかわり、要素ごとの変容の特徴、公園緑地に蓄積されている継承と文化的衝突を明らかにした。戦争の破壊を除いたら、各統治期に支配者たちは青島で環境と景観のよい理想都市を努力し、非常に大きな実績を残した。現在でも憧れを持たれる都市景観が創出された建設すべく事例として、青島の緑地の建設過程は今後「花園都市」、「緑色都市」を目指している他の都市の参考になると考えられる。

第2節 時代ごとの公園緑地の変容の特質

公園緑地は都市計画の思想や都市建設の目標、当時直面していたそれぞれの問題と関わり、時代ごとにそれぞれの特徴が現れていた。

1) ドイツ統治期に青島で公園緑地をゼロから造り始め、やせた土壌と厳しい生態環境に直面し、土砂流失の問題、飲料水の問題は急務だった。なるべく短時間でこれらの問題を解決する重要な対策として、公園緑地は応急的な特徴が強かった。例えば、土地に直射日光が当たるのを避けるために、森林には樹木が非常に高い密度(1万数千本/ha)で植えられることになった。植林用の大量の苗木を繁殖させるために、公園に苗圃が造られ、観光や娯楽より生産の機能が求められた。ゼロから公園緑地を造り、困難が非常に大きかった分、青島の公園緑地に与えた影響も大きかった。当時中国の都市はほぼ立木がない土地であり、租界や租借地の中に外国人たちの娯楽のために公園が造られることも見られたが、森林まで造られたのは珍しかった。そのため、鬱蒼たる森林をもつ山々は青島に他の都市と違う性格を与えた。そして、植林の影響は他の都市にも及んでいた。1904年に済南が、1907年に瀋陽など他の都市がドイツの林務官を雇い、地元の植林事業を指導させていた⁷⁾。

一方、青島で試験を行いながら公園緑地を造ったので、失敗したこともあった。例えば、当初、青島には樹種が少なく、森林にはマツの割合が高く、マツ毛虫の災

害が起きた。その後、針葉樹と広葉樹を混ぜて植え、森林の生態が改善された。森林だけではなく、並木道にも失敗例が見られる。古葉書に見られ、現在も海岸沿いに残っているニセアカシヤが残されていることから、おそらく当初は海岸沿いにもニセアカシヤの並木が植えられたと判断される。青島では海からの風が強く、根が浅いニセアカシヤは海岸沿いに生きられなかったため、徐々にクロマツに替えられたと推定される。

図 5-1 はドイツ統治期に形成された公園緑地のネットワークである。市街においては公園も並木道も総督府と駅付近に集中し、公園緑地のネットワークは欧州人区を中心部しかできておらず、植民地の緑地景観の特徴が顕著だった。それに対し、森林は欧州人区に留まらず、青島市全域にわたって造られた。大規模に造られた森



図 5-1 ドイツ統治期に形成された公園緑地のネットワーク

林は郊外の山、川、海岸までを覆って、都市の公園緑地の基礎を構築した。

2) 日本が青島を支配していた時期にはドイツ統治期に造られた緑地空間と数多くの国から輸入された樹種をもとに、より合理的、観賞できるように改善した。森林において、ドイツ統治期に高密度で造られ、鬱閉が過度となり、枯損する樹木が生ずる森林を間伐し、密度の適当な森林を造った。公園においては植物の特徴が考えられ、多様な植物景観が造られた。極端な例を取り上げれば、青島神社と忠魂碑参道の両側に植えられたサクラの「華麗」とクロマツの「荘厳」のバランスが考えられたほど、公園緑地の景観は丁寧に創出された。



図 5-2 日本統治期に形成された公園緑地のネットワーク

もう一つ注目すべき特徴は公園緑地の記念性と象徴性である。日本統治期に公園の定義、種類が明確に規定され、公園緑地の理論において、大きな進歩を遂げた。明確な定義と正式な命名で、位置づけが不明だった緑地には公園になったものもあり、森林と公園の境も明らかになった。そして、定義によって、公園に「市街ノ記念」の機能も加えられた。そのため、日本の「国家的象徴」の青島神社、忠魂碑、千葉公園の記念碑など数多くの記念施設が造られ、公園は日本の支配者たちが青島で取得した功績の象徴、記念の舞台として取扱われた。結果として、戦後ドイツの記念碑も、日本の神社、忠魂碑もすべて取り壊される運命に遭った。物的な空間だけではなく、日本国内の花見文化も青島にもたらし、青島の公園緑地への影響が一層深まっていった。他方、日本政府は人口の増加を想定し、10年間で実現する巨大な水源涵養林計画を策定したことから、日本が青島を日本人の永遠に住む場所として計画、建設しようとしたという野心も読み取ることができる。

日本統治期の公園緑地のネットワークは市街の拡張に伴い、都市の北側に拡大していった。ドイツ統治期と比べ、一つの顕著な変化は並木道の建設が完備されたことであった。並木道の連結によって、新旧市街のつながりが強まっていた。日本統治期には特に日本人と中国人は分けられていなかったが、事実上の日本人区と中国人区が形成され、中国人区は公園緑地のネットワークの大きな空洞となっていた(図5-2)。

3) 中華民国統治期に公園には運動施設、娯楽施設だけではなく、商業施設も設けられ、公園は一層現代的な公園に近づいた。公園は西洋風の整形式空間、芝生、噴水などの要素で造られたものが多かったことである。多量、大規模な洋風の公園はドイツでも、日本でもなく、中華民国政府によって青島市にもたらされたのである。しかも、青島市だけではなく、民国の首都であった南京にもこのような洋風の公園と庭園も多く造り出された。この点では公園と建築には、異なる傾向が現れていた。これも前述したように、公園が元来欧米に誕生したので、中華民国統治期に民主の国家を創立するために、民主の空間、文明の装置とされていた公園の形式をみずから学んだ結果だと推測される。

一方、中華民国政府は初めて青島を支配する中国政府として、教育、経済の面に加え、公園緑地の脱植民地化にも努力していた。そのおかげで、公園と並木道は初めて中国人区で造られるようになった。そして、この時期には日本統治期のように、巨大な記念施設を造らなかったが、孫文を記念するために、第一公園は「中山公園」と命名され、中山公園と海泊河に「総理記念林」という記念の機能を持つ森林が2年連続で造られた。これらのことから、支配者は公園緑地に中国の文化を入れようとする意図があったことが読み取れる。

もう一つ注目すべきはこの時期に形成された多くの公園はドイツと日本統治期に山や海岸に造られた森林をもとに造られたものだったことである。森林が公園に転換されたことから、時代による公園緑地への需要が異っていても、森林と公園の機能が相互に転換できることにより公園緑地の持続的な発展が確保されたことが分かる。このように中華民国統治期には中国人区の公園の状況が改善され、並木道網の空洞が埋められ、青島市全地域にわたって、より充実した緑地系統が形成された（図 5-3）。

4) 第2次日本統治期に中国大陸で占領地域が増えたとともに、青島には中国華北地域の水上と陸上交通の要衝、軍事の拠点、経済を開発する基地、重要な工業と観光都市など様々な役割が与えられた。地位が引き揚げられたとともに、日後の拡張が予想され、都市が無秩序に広がるのを防ぐために、市街の外側に環状緑地帯が設けられている。これは当時日本政府が1939年に東京で計画した緑地帯と同様な思想であったと考えられる。そして、戦時中の軍事対策が十分に考えられ、緑地の



図 5-3 中華民国統治期に形成された公園緑地のネットワーク

中に数多くの軍事保留地が計画され、公園緑地は都市の拡張を防ぐだけでなく、軍事状況とも関連していたことが分かる。ただし、巨大な都市計画は実現せずに、戦争によって青島の森林も、公園も、並木道も非常に大きく破壊された。

第3節 青島市における公園緑地の一般性と独自性

中国の都市を近代化の原動力によって分類すれば、外国の侵入による近代化と自国の政治、資本、工業の影響による近代化の2種類がある。前者はさらに支配者数によって租界都市と租借地都市に分類される。租界都市には通常多数の国があり、それぞれの国は都市の一部の支配権を持ち、建設していた。代表的な都市は上海、天津、武漢である。後者は一つの国に占領され、一定の期間内のみ都市の支配権が外国支配者に与えられた。この類型の代表的都市は青島、大連、ハルビン、香港である。後者には北京、南京、西安などのように昔から中国の古都であり、近代になって、旧来の政治の力を利用し、工場を造ったり、鉄道を敷いたりして、近代化を始めた例もあれば、南通、無錫のように民族資本の発展により急速に大規模化した新興都市もあった。そして、この両者を折衷するように旧市街の外側に新市街を造った例もあった。済南、瀋陽はこのような近代化の代表都市である⁸⁾。

青島は中国近代に租借地になった都市の代表であり、青島市の公園緑地に蓄積された近代都市計画思想を反映している植民地の緑地景観の特徴は、他の植民都市と一致している。租界都市や満鉄附属地には無論外国人の居留地の範囲内だけ外国人の娯楽の為に公園が造られた。青島とほぼ同時に租借地となったハルビンと大連には、最初に中国人と欧州人が隔離され、欧州人区でゾーニングが設定され、バロック式の都市計画手法が用いられると共に、公園や広い並木道が造られた。それに対し、中国人区には公園緑地は一つも計画されなかった。のちに、日本が中国東北の支配権を取得し、都市の拡大計画や地区計画が行われ、大規模な公園緑地が計画された。この2つの租借地における公園緑地の造成経緯と都市計画思想は青島とほぼ一緒だった。また、中華民国統治期の青島は、ナショナリズムが高揚し、都市全体に対する都市計画が行われたことは南京、上海、広州と共通しており、公園緑地の思想も共通していた。こういう植民地の特徴と近代計画思想の適用という点で青島市の公園緑地は中国の近代植民都市としての一般性を持っている。

一方、青島市の公園緑地には他の近代都市の公園緑地が持っていない独自性もある。まず、租借地で森林を造成するのは珍しかった。そのため、済南と瀋陽も青島の造林専門家を雇い、森林を造り始めた。市街の公園緑地においては、租界都市がいくつかの国家によってバラバラに建設され、面積が限られ、建築の密度が高かったのに対し、青島市の容積率は低く、多くの公園・庭園が造られ、青島市街の衛生

と美観の役に立っていた。租借地であったハルピンと大連では都市は比較的平坦な場所に立地し、バロック式の都市手法が用いられ、非常に巨大な広場（大連の中心広場は直径 500m である）が設計され、大面積な公園緑地が中心広場に集中し、人工的な性格が強かった。青島には大規模な広場が造られず、政府と教会もそれぞれ土地が高くなった、風景の良い場所に立地していたため、公園もこれらの施設の周辺に立地し、集中することはなかった。しかも、山や海岸を利用する公園では自然の特徴が感じられる。並木道において、大連の放射状に、まっすぐ伸びる街路と異なり、青島の都市計画では美観上の考慮でなるべくまっすぐな街路を避け、等高線に沿って街路が造られた。そのため、大連のように、壮麗には見えないが、曲線の街路は都市景観の変化と面白さを増やしたと考えられる。

近代のグローバル化により、中国の都市が近代化を開始したのにもない、多くの公園緑地が造り出された。それぞれの自然環境と歴史背景によって、都市により特徴が現れているが、青島と同様に都市計画・建設と植民文化の影響の視点から公園緑地の形成と変容を検討するのは有効であると考えられる。ただし、森林は計画図に含まれておらず、その位置づけは不明である。これも今後の課題になる。

このように、青島市は中国都市近代化の一般性を持つ一方で、青島にしかない独特の都市及び公園緑地の特徴が創出されたことを明らかにした。しかし、残念ながら戦後青島市の所謂「現代化建設」の過程で昔の建築法規を無視し、旧市街に高層ビルがところどころ建設され、歴史的に形成された柔らかなスカイラインが破壊されることになった。また、旧市街に構築された公園や庭園が建築の増加によって数や面積を減少させつつある。本研究は青島市の美しい景色ができた経緯を振り返って検討した。青島の今後の建設では市街の丘陵、海岸の自然景色を十分尊重した上で都市の拡張を進めることが望ましい。

注：

- 1) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、233
- 2) 華納著・青島市档案馆訳（2011）：近代青島的城市計画与建設、東南大学出版社、188
- 3) 泉対信之助（1922）：青島二年、帝国地方行政学会、13
- 4) 青島守備軍民政部土木部（大正九年五月）：土木誌、56
- 5) 泉対信之助（1922）：青島二年、帝国地方行政学会、13
- 6) 田久江南（1921）：青島要覧、新極東社発行、276
- 7) 青島市档案馆（2007）：膠奥発展備忘録全訳、中国档案馆出版社、313、613
- 8) 傅崇蘭・白晨曦・曹文明等（2009）：中国城市发展史、社会科学文献出版社、180-181

参考文献一覧

史料：

- 1) 青島市档案馆（2007）：『膠奥発展備忘録』全訳，中国档案馆出版社。『膠州湾発展備忘録』はドイツ青島総督府が作成した政府の業務報告である。1898 年 10 月から出版され，1910 年に『膠奥年鑑』に変更され，青島の 17 年の歴史を記録している。
- 2) 謀楽（1912）：青島全書、青島印書局刊。ドイツ統治期の条例、法規などを総合的に編集している。
- 3) 青島守備軍（大正 3 年 11 月至大正 6 年 9 月）：青島軍政史。1914 年から 1917 年まで、総説、外事、治安司法、衛生教育、運輸交通、殖産興業、財政金融及雑件の 8 編を分け、この 3 年間の業務を記述している。
- 4) 青島守備軍民政部土木部（大正九年五月）：土木誌。
- 5) 『欧受大日記』は陸軍大臣官房が編集して保存した陸軍省大日記の一連の文書の一部である。青島に関する欧受大日記は青島守備軍が発簡または接收した文書が編まれた薄冊である。その中に、皇室、外交、礼儀、教育、編制、軍需、作戦、婚姻、葬祭などに関する書類が収められている。本論文ではアジア歴史資料センターのホームページ（<http://www.jacar.go.jp/>）上に提供されている史料を主として使用した。
- 6) 「外務省記録」の「山東占領地処分一件別冊／細目協定関係／公有財産問題参考資料一／青島市街工事計画」に付図「青島市街図」が掲載されている。「外務省記録」は明治初期の外務省創立以来第二次大戦終了までの約 80 年間の在外公館との往復電報・公信頼をはじめとする外交活動にともなう史料であり、アジア歴史資料センターに提供されている：
（<http://www.jacar.go.jp/DAS/meta/MetaOutServlet>）。
- 7) 神社協会：神社協会雑誌。『神社協会雑誌』は神社協会が 1902 年に創刊，1938 年に終刊した神社研究に関する雑誌である。その中の「各地通信欄」には日本が海外で建設した神社も掲載されている。
- 8) 本多静六（1919）：青島森林の将来。現在、東京大学農学部の小野良平研究室に所蔵されている。
- 9) 青島守備軍：『欧受大日記』第五三七号，「青島神社創立に関する件申請」。
- 10) 青島守備軍大正四年度第一統計年報，第三人口。
- 11) 趙琪修・袁榮（1928）：『膠奥志』，成文出版社，121。『膠奥志』は青島の沿革，範囲，民社，政治，食物，交通，教育，建置，財税，人物，芸文，大 - の

全 12 巻にわたり、青島の歴史を記録している。

- 12) 1922 年中日「山東懸案解決に関する条約」及び附約が『膠澳志』『沿革志』『中国回復の顛末』に掲げられている。
- 13) 青島工務局 (1935) : 青島市施行都市計画方案初稿。この中で序言, 計画の範囲, 都市発展の推測, 計画の原則, 中心部の計画, 街路, 公園システム, 交通, 衛生, 土地整理, 実施について詳細に論じている。
- 14) 青島工務局 : 工務紀要
- 15) 青島農林事務所 : 青島農林。
- 16) 青島市政府秘書処 : 三年間の行政概要 (1932-1934)
- 17) 青島市政府接待処 (1937) : 青島概覧
- 18) 青島特別市建設局 (1942) : 大青島市 5 年建設計画, 道路建設付表

- 19) **古写真 :**
- 20) 陸游・徐曉梅 (2005) : 青島老明信片 (1897-1914)、青島出版社
- 21) 和気六郎 (1919) : 青島写真案内 (附官民便覧)、青島写真案内発行所
- 22) 鈴木友二郎 (1919) : 青島市街写真帳、高橋写真館
- 23) 青島みやげ館 (1926) : 青島写真帖
- 24) 山下富吉 (1935) : 青島写真帳、青島みやげ館
- 25) 著者不詳 (1939) : 青島指南、青島特別市社会局
- 26) 伊致中 (1947) : 青島指南、中国市政府協会青島分会
- 27) 著者不明 (年代不明) : 青島、光陽社
- 28) 出版者不明 (年代不明) : 青島・済南絵葉書、出版地不明
- 29) **未公開図面 (青島市城市建设档案馆に所蔵される) :**
- 30) 農林事務所 (1924) : 膠澳商埠第一公園図
- 31) 農林事務所 (1929) : 青島第一公園
- 32) 青島市工務局 (1933) : 棧橋東公園児童運動場
- 33) 青島市工務局 (1935) : 棧橋公園配置図
- 34) 青島市工務局 (1936) : 西鎮公園
- 35) 青島市工務局 (1937) : 第三公園平面図
- 36) 出版者不詳 (年代不詳) : 青島市中山公園平面図

主要書目 :

- 37) 田久江南 (1921) : 青島要覧, 新極東社発行。
- 38) 泉対信之助 (1922) : 青島二年、帝国地方行政学会
- 39) 山東案内発行所 (1928) : 山東案内、附図

- 40) 国立山東大学 (1935) : 国立山東大学一覽
- 41) 都市計画協会 (1967) : 『折下吉延先生業績録』
- 42) 前島康彦 (1967) : 折下吉延先生業績録、杉田屋印刷株式会社
- 43) ミシエル・ドヴェーズ著・猪俣禮二訳 (1973) : 森林の歴史、東京：白水社
- 44) 徐飛鵬・村松伸 (1992) : 中国近代建築総覧—青島篇、中国建築工業出版社
- 45) 青島市史志事務室 (1997) : 青島市志 (園林緑化志)、北京新華出版社
- 46) 青島市史志事務室 (1997) : 青島市志 (旅遊志)、北京新華出版社
- 47) 青島日本中学校校史編集委員会 (1989) : 青島日本中学校校史、青島日本中学校校史刊行会
- 48) Torsten Warner(1994): German Architecture in China、 Ernst&Sohn.
- 49) 青島市档案馆 (2002) : 青島地図通鑒、山東省地図出版社
- 50) 李耀臻 (2004) : 中国海洋大学、浙江大学出版社
- 51) 李耀臻 (2004) : 中国海洋大学大事記、中国海洋大学出版社
- 52) 青井哲人 (2005) : 植民地神社と帝国日本、吉川弘文出版社
- 53) 日高六郎 (2005.6) : 戦争の中で考えたこと—ある家族の物語、筑摩書房
- 54) 汪菊淵 (2006) : 中国古代園林史、中国建築工業出版社
- 55) 辻子実 (2007) : 侵略神社、新幹社
- 56) 青島市志事務室・林業局・都市園林局 (2007) : 青島古樹名目志、中国海洋大学出版社
- 57) 景長順 (2008) : 公園工作手冊、中国建築工業出版社
- 58) 青島市档案馆 (2009) : 見証青島、青島出版社
- 59) 李明・張岩 (2009) : 中山路-街と都市の歴史、中国海洋大学出版社
- 60) 日本公園緑地協会 (2010) : 公園緑地マニュアル、日本公園緑地協会
- 61) 華納著・青島市档案馆訳 (2011) : 近代青島的城市計画与建設、東南大学出版社
- 62) 约尔克・阿泰尔著、青島市档案馆编译 (2011) : 青島城市与军事要塞建設研究 (1897-1914) 、青島出版社

論文：

- 63) 李淑鳳 (1995) : 北京公園緑地中の植物配置、中国園林 Vol. 11、No. 3、32-37
- 64) 張志恩 (1996) : 魯迅公園歴史沿革与歴史評価、中国園林 Vol. 12、No. 4、22-24
- 65) 陳霽・武雲霞 (2001) : 青島近代建築原型的變異、建築歴史 Vol. 19、No. 5、92-95
- 66) 楊樂・朱建寧・熊融 (2003) : 浅析中国近代租界花園—以津、滬兩地為例、北京林業大学学报 Vol. 2、No. 1、17-21

- 67) 陶敏 (2004) : 小型城市傳統公園的適時更新—以江蘇省泰州市泰山公園改造設計為例、城鎮形象·建築設計 2004、No. 4、34-37
- 68) 李百浩·李彩 (2005) : 青島近代城市規劃歷史研究 (1891-1949)、城市規劃學刊 2005、No. 6、81-86
- 69) 彭慧 (2006) : 長沙市主要城市公園初步研究、北京林業大學、修士論文
- 70) 李素英 (2006) : 城市帶狀公園綠地研究、北京林業大學、博士論文
- 71) 陳蘊茜 (2006) : 空間重組與孫中山崇拜、史林 2006、No. 1、1-18
- 72) 孫向麗·張啓翔 (2006) : 青島市における公園の樹種の調査、当代生態農業、45-48
- 73) 由超 (2006) : 青島市城市森林建設研究、山東大學、修士論文
- 74) 高蓉蓉·吳美霞·周春玲 (2007) : 青島市行道樹的美觀度評價、山東林業科學技術 Vol. 168、No. 1、16-19
- 75) 北京園林學會 (2007) : 城區舊公園改造中現有植物景觀保護利用和規劃設計 (講座)、北京園林 Vol. 23、No. 3、51
- 76) 李東泉 (2007) : 近代青島城市計畫·城市發展關係的歷史研究及啓示、國歷史地理論叢 Vol. 22、No. 2、125-136
- 77) 王煒 (2007) : 近代北京公園開放與公共空間的拓展、北京社會科學 2008、No. 2、52-57
- 78) 方慰元 (2007) : 上海東平國家森林公園改造規劃探討、中國園林 2007、No. 9、68-72
- 79) 祝昊冉·馮健 (2008) : 北京城市公園的等級結構及其布局研究、城市規劃 Vol. 15、No. 4、76-83
- 80) 陳毅嘉 (2008) : 台灣地區中山公園研究、天津大學修士論文
- 81) 潘穎 (2008) : 上海近現代公園的保存狀況及保護政策探討檢討、同濟大學修士論文
- 82) 陳雅君 (2009) : 天津城市公園景觀文化特色演變研究、東北農業大學、修士論文
- 83) 王福雲·韓勇·譚大珂 (2009) : 青島近代獨立式住宅建築研究、工業建築 Vol. 39、No. 6、42-46
- 84) 顧芳·曹宏偉·朱銘鸞 (2009) : 用人文和諧的理念重放老公園的光彩、中國園林 2009、No. 9、65-68
- 85) 劉晶·董文 (2009) : 青島濱海景觀改造研究·分析、山東農業大學學報 Vol. 40、No. 3、411-415
- 86) 王冬青 (2009) : 中山公園研究、中國園林 2009、Vol. 25、No. 8、89-93
- 87) 王靜 (2009) : 南京城市公園綠地骨幹樹種調查研究、南京農業大學、修士論文

- 88) 胡冬香 (2009) : 広州近代城市公園制度化演繹、広州園林 Vol. 32、5-8
- 89) 趙慧 (2010) : 上海現代城市公園變遷研究 (1949-1978)、上海交通大学修士論文
- 90) 董運齋・于家柱・于永偉 (2010) : 青島市の森林樹種の選択、国土緑化、43-44
- 91) 劉潔 (2010) : 武漢市城市公園体系研究、華中農業大学、修士論文
- 92) 張文杰・屈培源・張文博 (2010) : 城市公園的「近自然」模式改造—以新鄉市人民公園為例、西北林学院学報 Vol. 25、No. 1、181-184
- 93) 曹慧芳 (2011) : 西安城市公園改造存在問題・对策探討、陝西農業科学 2011、No. 3、246-249
- 94) 柯鑫鑫 (2011) : 杭州近現代公園發展研究 (1912-1993)、浙江大学修士論文
- 95) 何江麗 (2011) : 民国前期北京的公共空間と公共衛生、近現代史と文物研究 2011、No. 11、127-133
- 96) 趙紀軍 (2011) : 武昌首義公園歷史變遷研究、中国園林 2011、No. 9、70-73
- 97) 高山範理・香川隆英 (2012) : ランドスケープ研究 Vol. 76、No. 5、539-542
- 98) 上田裕文・町田佳世子・河村奈美子・小関信行 (2012) : ランドスケープ研究 Vol. 76、No. 5、533-538
- 99) 孫媛・青木信夫・張天潔 (2012) : 天津維多利亞公園歷史進程与造園風格探析、學術論文專刊 No. 7、35-39
- 100) 馬錦義・陳菲・馬亮 (2012) : 旅行開發背景・城市傳統文化公園景觀改造探析—以南京白鷺洲公園為例、南林業大学学報 Vol. 6、No. 4、6-10
- 101) 鄭愛芬 (2010) : 青島市公園綠地木質植物の多様性、南京林業大学修士論文

初出一覧

論文名（公表誌）	本論文該当箇所
「ドイツ統治期青島における都市緑地の形成と特徴」 （『日本建築学会大会学術講演梗概集』E-2、363-364、2012）	第3章第1節
「中国青島市における貯水山公園の形成と変容」 （『ランドスケープ研究』76(5)、421-426、2013）※審査付	第3章第5節第2項
「戦前期青島の公園における桜の植栽」 （『日本建築学会大会学術講演梗概集』E-2、405-406、2013）	第3章の一部
「中国青島市における並木道空間の形成（1891－1945）」 （『日本建築学会計画论文集』Vol.78 No.693、2321-2328、2013年）※審査付	第4章
「戦前期青島市におけるクロマツとサクラの植栽」 （『ランドスケープ研究』77（5）、393-398、2014）※審査付	第2章と第3章の一部
“The formation of green spaces in Qingdao during the colony period by Germany (1898-1914)” (15th SACRPH National Conference on Planning History, 2013、概要審査付)	第3章の一部
“Conflicts and continuity: the development of green spaces in Qingdao, China(1898-1938)” (16 th International Plannning History Society conference, 2014、審査付)	第2章と第3章

謝辞

学位論文を3年間で提出でき、まず感謝したいのは恩師である藤川昌樹先生である。論文執筆以来、史料の探し方・使い方、文章の書きかたを先生が一から丁寧に教えてくださった。特に感動するのは筆者が書いたすべての学会発表用、雑誌に投稿する論文の日本語を先生が何度も直してくださったことである。そして、研究活動で先生が日本各地、対象地・中国青島、さらにトロントまで一緒に考察しにいくくださり、現場で建築や景観に関する専門知識、図面の引きかたなど様々な教授をしていただいたおかげで、筆者は研究の視野を広げられ。この3年間で筆者が研究においても日本語においてもいかなる小さな進歩には先生のご指導や励ましがあったからにちがいない。謹んでお礼を申し上げたい。

村上暁信・松原康介先生・渡辺俊先生には論文中間発表会などにおいて緑地景観や都市計画主体に関するご助言をいただき、論文の分析を深めるにあたり大変貴重なものであった。

黒田乃生先生には、学位論文の副査をお引き受けいただき、樹種の名称、表記に的確なご指摘を頂いた。

東京大学農学部森林風致計画学研究室の小野良平先生・伊藤弘先生に日本統治期の森林の貴重な史料をお貸しいただいた。

中国青島の歴史の愛好者である王棟氏にドイツ統治期の非常に貴重な公園の平面図をお貸しいただいた。

青島市档案馆の處長である周兆利氏、青島市城市建设档案馆の科長である孔繁生氏に資料の調べ方など熱心なご助言やサポートを頂いた。

このほか、都市ストック評価研究室のみなにお世話になってきた。余暇の時間で一緒にゼミ旅行やパーティーをし、楽しく、充実した生活を送ってきた。記して感謝の意を表する。